
転生してサトシを鍛えることにした

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生してサトシを鍛えることにした

【Nコード】

N4176W

【作者名】

原石

【あらすじ】

子供を助けようとして自分だけ轢かれて死んでしまった主人公はポケモンの世界でドタバタと出会う仲間たちと日々を過ごすことに！出会い！仲間の数！！PV二十万突破！！本当にありがとうございます！

長ったらしい自己紹介（前書き）

昔から好きだったポケモンの小説。戦いの描写には期待しない方がお勧めです。

楽しむべきはコメディ面。とりあえずプロローグ行ってみよう！！

長ったらしい自己紹介

車に轢かれそうになっていた子供を助けようとしたら車がスリップして俺だけ轢かれた。

なんともマヌケな死に方をしたこの俺、亮真^{じやうま}はただいま真っ白な空間の中にいたりする。

「これってテンプレ？」

『テンプレ』という言葉の意味はよく分からないけど使ってみたくなるぐらい俺は混乱していた。

『こんにちは加○茶です』

「ふああああ！！！！」

な、なんだ！？いきなり背後に天使のコスプレした美人さんが現れたぞ！？

「つて、加○茶じゃないっしょ！！」

『いや？分からないよ？もしかして本物かもしれへんやん？』

「エセ関西弁！！！！いらなからそんな冗談！！ここはどこ！？オマエは誰！？フーアーユー！！」

『ここは転生所。私は神』

「いや、まともに答えられてもさ……」

この神様（自称）は意外とノリが良いかもしれないなあ……。

『アナタには転生してもらいます』

「唐突！！話のそらし方が唐突！！って転生！？」

転生ってあれか？ダメな死に方だったから次の人生頑張ってみたいな？

『ポケモンの世界に行ってらっしゃーい』

「しかも選択権なしだよ！！」

『え？行きたくないの？』

「いや行きたいよ！！行かせてください！！行ってみたいです三段活用！！」

『じゃあ連れて行きたいポケモン君のブラックから六体選んでね』

「ブラックってことはベストウィッシュからスタートなのか？」

『あの世界のロケット団が優秀になっちゃってるからねー。ボロボロにしてあげてよ。私、ロケット団が「やな感じ」とか言って飛んでいくのが人生の楽しみなんだよね』

「神様の人生って何だよ……」

『いいから早く選んでね』

好きなポケモン六体か……そんなの今の手持ちそのままでオーケーだな。

「決めたぞ」

『早いね。すでに決めてた感じ？』

「まあね。俺の相棒たちだから」

『そう。で、容姿はどうする？』

容姿も決められるのかよ……でもそうだな……

「変えなくていい。これは親からもらった大事な顔だからな」

『そうだね。というわけで君にはサトシ君がイツシユ地方に来たところからのスタートです』

「サトシって10歳だったけ？」

『今は13歳だけだね。ミュウツーに石化され、マナフィ助けるために潜水し、空から飛び降りる度胸持った元10歳だよ』

「超人だよな！？サトシって思った以上に超人だよな！？」

『いいから行けよ……』

「態度が急変！？それでいいのか神様！！」

『いいからさっさと行かんかい!』

神様が何かボタンを取り出してポチッとなつてちよつと待て！！

「足元に穴がああああああああ！……！」

『アディオス』

「覚えてろよ、このクソ神があああああああああああああ
あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

俺のポケットモンスターの世界での人生はそんな落下系ヒロインのような始まりをした。

「へえ、ここがイッシュ地方か…見たことないポケモンがいっぱいだなあ」

人通りの少ない森の中を一台のジープが通っている。

今の発言をしたのは原作の主人公であるマサラタウンのサトシ。説明は先ほどの通りだ。

「サトシ君はイッシュ地方は初めてだったっけ？」

ジープを運転しながらサトシに質問を送る女性はイッシュ地方のポケモンの権威であるアララギ博士だ。

「はい！」

「サトシはポケモンが大好きじゃからのう。ここも新鮮じゃろうて」「そうですね。サトシには初めての経験が多いでしょうね」

助手席に乗っているのが世界的なポケモンの権威であるオーキド博士。サトシの隣にいるのがサトシのママさん。って

先ほど神様から突き落とされた俺は地面に当たったら死ぬよね？的なスピードで落下していた。

「そのジープといてくださーい!」

ええ！？空から人が降ってきた！？

驚きのあまり急ブレーキをするジープ。

「ぐふふえー！！」

その前に落ちる俺。良く死ななかつたな。意外と頑丈かもしれない。試したことないけど。試す気もないけど。試したくもないけど三段活用！！

「だ、大丈夫かう……？」

地面にへばりついて起き上がらない俺を心配したような顔で覗き込むオーキド博士。ってオーキド博士!?

「あなたはオーキド博士ですね!!」

「そ、そうじゃが……君は？」
「俺は……」

さて、どう説明しよう。『異世界から来ました』とか言っただけで入院させられるのはマズイ。というか若干16歳にして廃人扱いにもっとやばい。どうする？どうする……？

「リヨウマです……！住所不定のリヨウマです……！」

死んだ。今の発言で俺の第二の人生死んだ。なんだよ住所不定って……！！なんだよ住所不定って……！！

「そうかね……ん？」

え？通じた？っていうかオーキド博士の視線が俺のモンスターボールに向かってるんですけど……。

「君はポケモントレーナーなのかね？」

「はいっ……！俺の所持ポケはこの六体だけです……！」

「ボックスは使っていないのかね？」

「とある事情で野生に返しました……！というわけで車に乗せてくれないか？道に迷っちゃって……」

「空から道に迷うってどんなだよ……」

「君、俺は16才なんだけど」

俺の身長が低いからってタメ口で話されるとイラッとしてしまうのは俺の悪い癖だ。気を付けないと……。

「ごめんなさいね。うちのサトシは礼儀が無くて……」

ママさんが深く腰を折って謝ってきた。え？何この展開！？俺が悪者！？どうにかしなければ……

「じゃあこうしよう！！サトシが俺にポケモン勝負に勝ったらタメ口許可します。だから顔をあげてください母上様」

「まあ！！母上様なんて！！もう、お上手なんだから！！」

え？口説くつもりじゃなかったんですけど……まあ、いいか。

「というわけで勝負だサトシ。形式は……ってサトシのポケモンはピカチュウだけ？」

「こいつは俺の大事な相棒なんだ!!」

「ピッピカチュウ!!」

「そうか。じゃあ一対一のシングルバトルな。オーキド博士、審判頼めます?」

「よし。いいじゃない。」

俺とサトシは近くの川辺に移動する。さて、俺はなんのポケモンで戦おうかな……。

「これより、リョウマ対サトシのシングルバトルを始める！」

「いけっ！！ピカチュウ！！君に決めた！！」

初めて生で聞いた。意外とハマるよねその言い方。でもな、俺にもアイデンティティーってもんがあるのさ!!

俺は腰に着けたモンスターボールからある一体のポケモンを取り出し、場に出した。

「LET'S GO!! ジュカ!!」

[illegible]

「！！！！」

そう。俺がレベル5から丹精込めて育てた最高の相棒であるジュカイン♂のジュカだ。こいつは元からのスピードに性格のせつかちの特性が加わってスピードが最高レベルに達しているスピードアタッカーだ。

「ジュ、ジュカイン！？」

「こっちから行くぞ！！ジュカ！！リーフブレード！！」
「ジュカッ！！」

腕についている刃型の葉っぱを翡翠色に輝かせてピカチュウに突っ込むジュカ。スピードでコイツに勝てる奴はそっていない！！

「ピカチュウ！！」

「今更避けられるか！！」

「ピイイイイイイ！！！！！！」

一発のリーフブレードで地面に崩れ落ちるサトシのピカチュウ。弱え……。

「ピカチュウ戦闘不能！！よってリュウマの「ちょっと待った！！」勝ち！！」

「おいサトシ！！」

「え？」

サトシは本当の意味での主人公だ。だが主人公がこんな強さじゃ物語は進まない！！俺は考えた。サトシを鍛えよう。そのためには何が必要だ？対戦できる仲間が……仲間！？

「お前といままで一緒に旅してきた仲間をこのイッシュ地方に呼べ！！！お前の特訓に付き合ってもらおう！！」

「そんな殺生な！！あいつらにはあいつらの生活があるんですよ！？」

「やかましい！！オマエはポケモンマスターになりたくないのか！？」

「あ、タケシ？イッシュ地方で一緒に冒険しないか？美人さんも旅についてくるってさ」

「というかポケモンマスターって具体的にはなんなんだろう。リーグ全制覇？コンテスト制覇？それとも全部？よく分からん。でも、だからこそ人生は面白い！！」

「リュウマさん。明日にはみんな来るそうです」

「オマエ人望厚すぎだろ！！しかもタケシ騙してただろ！！」

「そんなことないです。リュウマさんが美人さん連れてこればいいだけですから」

「オマエ腹黒いのな」

「策士と呼んでください」

壊れた。サトシが第一話から壊れた。……ん？俺のライブキャスターに複数の電話番号が登録されてるんですけど！？えっと……アロエにデントにカミツレに……って全部ジムリーダーじゃねえかよ！！なんで！？知り合いでもないのになんで電話番号登録されてんの！？よく分かんない！！

「じゃあ今日は私の研究所に泊まっていきなさいな。さあ乗って乗って」

俺たちはアララギ研究所で一日を過ごすことにした。

「というわけで自己紹介と行こうか」

一夜明けた今日、アララギ研究所には大勢の男女が集まっていた。

「俺はタケシ。元ニビジムリーダーで今はポケモンドクター見習い

だ。よろしくな」

ほう。こいつがタケシか……相変わらずの糸目だな。見えてんのか？

「私は元ハナダジムリーダーのカスミよ。よろしくね」

途中で髪型が変わったカスミさんですねはい。良く知ってます。人氣高かったですからね。

「私はハルカって言いまーす！！リョウマさんってなんだか強そう！！」

ハルカか……俺的には赤を基調としてた時が一番良かったんだけど、これもこれで可愛いからいいか。

「僕はマサト！！で、こっちが相棒のラルトスだよ！！」

え？ここで原作ブレイク？ラルトスはマサトが大きくなってから手に入れるってことじゃなかったっけ？ま、いつか。これはあの原作じゃないってことで。

「私はヒカリ、こっちはポツチャマ！！」

シンオウ地方出身のヒカリ。冬国らしい肌の色だ。そのニット帽は常備ですか？

「で、俺がマサラタウンから来たサトシです。リョウマさんも自己紹介お願いします！！」

はて？サトシが何故か俺のキラキラしたような目で見てくるのには

なにか意味があるのかな？まあいつか。

俺はベンチから立ち上がって手持ちのポケモンを全部出した。

「俺はリョウマ。一応、サトシの師匠をすることになった。でも、俺の目標は全地方のリーグ制覇なんでもそこそこよろしく。で、俺の手持ちは右からジュカイン♂のジュカ。トゲキッス♂のウイング。キリキザン♂のZERO。キュウコン♂のキュー。ニドキング♂のニドってニドキングは♂以外はないか。で、最後の一匹がキングドラ♂のノヴァだ。というわけでこれからよろしくな」

長い自己紹介を経て、俺の第二の人生が幕を開けた。

長ったらしい自己紹介（後書き）

お次は自己紹介。彼の紹介はいつまで続く？アーユーレディ？

とりあえずオリ主のキャラ紹介いつとく？（前書き）

「適当だなオイ」

B Y リヨウマ

「10月21日に内容を変更しました」

とりあえずオリ主のキャラ紹介いつとく？

リヨウマ

年齢

16歳

容姿

黒い髪に黒い瞳。髪型はところどころが跳ねている普通ヘアー。顔は中の上ぐらい。目はちよっとツリ目。

服装：BWの男主人公。

身長

165cm

体重

52kg

性格

とりあえず面倒くさがり屋。でも意外と純情。真面目なロケット団も許さない。幽霊が苦手。

好きなタイプ

草タイプ

嫌いなタイプ

ゴーストタイプ

将来の夢

全地方リーグ制覇

今の手持ち

ジュカ（ジュカイン♂）

ウイング（トゲキツス♂）

ZERO（キリキザン♂）

ラティオス（ラティオス♂）

グリード（バンギラス♂）

LUCALIO（ルカリオ♂）

とりあえずオリ主のキャラ紹介いつとく？（後書き）

「適當って言うな!!」

B y 原石

後輩へのプレゼント（前書き）

「原作ブレイク!!」

B
Y
リョウマ

後輩へのプレゼント

とりあえず研究所を後にすることにしようと思った俺たちだったが……

「サトシ君。君にこの三体から一匹だけ選ばせてあげる」

アララギ博士がイッシュの御三家を連れて俺たちの足を止めた。

「ツタージャとポカブとミジュマルだな」

「リョウマさんはどれを選んだんですか？」

「俺はホウエン地方から旅を始めたからキモリだ。っていうか昨日戦っただろ」

とりあえずホウエン出身ということにしておいた。これからごまかすのにいろいろと気苦労しそうだ。

「うーん……じゃあこいつにします」

サトシが選んだのは水タイプのミジュマル。ラッコに似ているこのポケモンは所持しているホタチという貝で戦う不思議なポケモンだ。

「ミジュッー!!」

「うわっ……あはは……人懐っこいな……」

サトシがミジュマルを指名した瞬間にミジュマルがサトシに飛びついた。

「珍しいですね。最初っからこんなに懐いてるなんて」

「それは私も思ったわ。見ず知らずのはずなのにね」
「サトシだから大丈夫!!」

俺はアニメとマンガの知識を最大限利用して話を合わせていく。最初のポケモンの懐き度なんて俺が知るわけないし。

「盛り上がってるところ悪いんだけどさ」

後ろで深刻な顔をしたカスミが俺たちのテンションを下げる。

「私、一緒に旅に出れないんだ」

「ええ!?!なんでだよカスミ!!」

「私ね、カントーに彼氏がいるのよ」

おそらくレッドだろう。ポケスペとアニメの混合世界かよ……キヤラ多いな……。

「それでね、一緒に旅に出ないか? って誘われちゃったのよ」

「そうか……それならしょうがないんじゃないか?」

「タケシの言うとおりだ。俺らよりもその彼氏さんを選ぶべきだな」

俺たちと旅をするために大切な人を裏切るような真似はしない方がいい。それは人生の教訓だ。

「分かったよ。じゃあまた今度な!!」

「ええ!! 次会ったときはダブルバトルで勝負よ!!」

え!?! 今行くんすか!?! 早っ!! ってもう見えなくなってるし……。

「相変わらずせっかちななあ。カスミは」

「サトシには言われたくないと思うけどな」

「タケシ……それを言わないでくれよ……」

『ハッ！！みんなで楽しく旅に出るねえ。お子ちゃまだなあ』

すると、研究所から出てきた新米トレーナーらしき少年が出会いがしらに罵倒してきた。みんなの頭の上に確かにイラッという文字が浮かんだのが見えた。

「こらっ、シューティー君！！」

「だって事実じゃないですか。旅はピクニックじゃないんですよ？」

「テメエいい度胸してんじゃねえかコラ。アララギ博士。庭のバトルフィールド借りますよ。このクソガキぶちのめす！！」

「できるんですか？この僕に勝つなんて」

「言ってる女男。新米できたてほやほやのトレーナーごときが調子に乗ってんじゃねえよ。その脆いプライド修復不可能にしてやんよ！！」

「落ちていてリヨウマさん！！喧嘩はよくないかも！！」

ハル力が後ろから俺を羽交い絞めにする。

「離せハルカ！！俺はこいつのポケモンを倒す前にこいつ本人を殴りたいんだ！！」

「ポケモンバトルだけで我慢して欲しいです！！」

わーわーぎゃーぎゃーと暴れまわる俺。

「リヨウマさんって短気なんだな……」

「気を付けた方がいいね。大丈夫じゃなさそう」

俺たちはドタバタしながらもバトルフィールドに向かった。

「これより、リョウマ対シューティーの試合を始めるー!」

審判はタケシが務めることになった。まあ、この中で一番経験があ

るからな。ジムリーダーだし。

「いけえ……ッタージャ……！」

「タジャッ……！」

「ハッ……ッタージャぐらいでこの俺を倒す？笑わせんな……！LE
T・S GO！ ジュカ……！」

「ジュッカアアアアアアアアアアアアアアア……！！
……………」

登場した途端に咆哮して周囲を震え上がらせるジュカ。相変わらずの迫力だな。やっぱり現実で見るのは最高だね。

「ニックネーム？子供じゃないんですから」

「（ブチイ……）」

「あ。リヨウマさんキレたかも」

「よく分かるよな。ハルカ、リヨウマさんの知り合い？」

「いや、そうではないんだけどなあ………なんでだろ？」

こいつは言っではならないことを言ってしまったようだ………殺す。

圧倒的な実力というのを見せてやる。

幸運にもこの世界では技は四つ以上覚えられることになっているらしい。

「お前は言っではいけないことを言ったああああああああ……！！……！！ジュカ……！！ソーラービーム……！！」

俺の指示を受けて光を体に吸収していくジュカ。ダブルバトルだっ

たらキューで『にほんばれ』をして一ターンで決められるのに……。

「ツタージャー！！今のうちにグラスミキサーで攻撃だ！！」

「タアジャー！！」

動けない俺のジュカに向かってグラスミキサーを連発する相手のツタージャ。だが……そんな攻撃で俺のジュカが倒れるわけない！！断じてありえない！！

「効くかよバーカ。サトシ！！」

俺は文字通り手に汗握って観戦していたサトシに声をかける。

「はい？」

「俺のバトルを盗め！！目で見て肌で感じ自分のものにしろ！！いいか？」

「はいっ！！」

「というわけでサトシの師匠として負けるわけにはいかないので終わらそうか！！ソオオオラアアビイイイムッ！！！！」

熱血漫画さながらの大声と言い方で指示を出す俺。ジュカの体から翡翠色の光線が放たれる。

「タジャッ！？」

今まで見たこともない技だったのか呆然として避けることすらできずに崩れ落ちるツタージャ。

「ツタージャ、戦闘不能！！よって勝者、リヨウマ！！」

「やったー！！リヨウマさんが勝ったー！！」

「うぐっ」

「凄いねー！僕、こんなに圧倒的な勝利初めて見たよー！！」

「はうっ」

無邪気なホウエンコンビによって心に大ダメージを受けているシューティー。やべ。面白いコレ。

「当たり前だ。こんなバトル負けるわけないだろ」

「うう」

「俺は全地方リーグ制覇狙ってたぜ？これぐらい朝飯前だ」

「うわああああああああああああああん！！！！」

「シューティー君！？」

耐えきれなかったのか号泣しながら旅に出て行った。なにこの旅立ち。流石に可哀相だろ。

「もう。後輩を虐めないで頂戴。大事な旅立ちの時だったのよ？」

「すいません。つい面白くなっちゃって」

「リヨウマさんって意外とSなんですね」

ハルカよ。お前はあとでみっちりと話があるからな。

「リヨウマさんー！！」

するとサトシが目をキラキラと輝かせて俺のもとにやってきた。

「すごかったですー！！今のバトル。俺、リヨウマさんの弟子になって光栄だと思いますー！！」

「そう？そこまで言われると照れるな。あははー」

褒められると悪い気はしないな。まあ、これから一緒に旅をする仲間なんだし、これはこれで良いスタートかもしれない。

「じゃ、行こうぜ。まずは最初のジムがあるサンヨウシティに向かう。俺もジムバッヂ取りたいし」

「え？リヨウマさんの背中にかけるタイプのバッグの中にカントーからイツシュまでのバッヂは入ってたと思うけど……」

「はあ！？」

俺は慌ててバッグの中身を確認める。財布にライブキャスターにあまりのハイパーボールに回復の薬に……ジムバッヂ。

「は？え？どゆこと？」

俺はこの世界に来たばかりでジムなんて言ったこともなければ見たこともない。なのになんでジムバッヂが……

『はろはろー。神様です』

突然テレパシーがとどいた。

『なんだまたテメエの仕業かよクソゴッド』

『雷で二度目の死味あわせてやるうか？』

『心の底からゴメンナサイ』

『まあ、いいや。で、あなたのその世界での設定を作ってみたワケよ。未設定だといういる大変だと思ってね』

『ありがとさん。で、どんな設定？』

『バッヂは全部集めたけどリーグにはまったく出場したことない変人』

『テメエここに降りてこいやコラアアアアア！！！！！！！！！』
『は？なにキレてんの？』

『誰だつてキレルわ！！なんだよ変人つて！！俺は普通の人間だつ
つづの！！』

『うるさい。じゃーねー』

『お、おい！！』

神様がテレパシーをブチ消しして逃げ去った。あの野郎、いつか殺してやる。

「どうしたんですかりヨウマさん。なんだか顔色が悪いよ？」

「気のせいだ。心配してくれてありがとな」

ハルカの頭をなでる俺。バンダナの上だから布の感触と髪の毛の感触が混ざって変な感じがする。けど、別に悪い気はしない。

「ふっ、ふえ！？（ボンッ）」

何故か顔がリンゴのように真っ赤になるハルカ。

「どうした？」

「べ、別になんでもない！！」

「そうか？ならいいんだ。よし、じゃあ行こうぜ」

ハルカの顔が赤く染まった理由は知りたけれど、今は早くサンヨウシティに行きたいな。初めてのポケモンの世界なんだし、楽しまなければ損だ損。

「気を付けなさいよー！！」

俺たちはアララギ博士に見送られながら冒険に出た。

後輩へのプレゼント（後書き）

「「「はーっははー！..!..」」」

B Y コジロウ&ムサシ&ニヤース

ロケット団を教育しよう(前書き)

「できれば感想も送ってきてほしいかも!」

B
y
ハルカ

ロケット団を教育しよう

「暗くなってきたし、今日はココで野宿するか」

この世界に来て分かったことだが、街と街の距離が結構長い。まあ、俺が見てきたのはゲームの世界だから距離感は違うと言ってもこの距離はないと思う。福岡市から下関ぐらいまでの距離あるし。

因みに俺の服装はブラックホワイットの主人公の格好だ。あの恰好は意外と気に入っているから、この服を選んだあのクソ神に一応感謝してやろうと思う。

「じゃあ夕食は俺が作るからそこらへんで暇つぶしでもしててくれ」

「え？タケシが料理すんのか？」

「タケシの料理は美味いんですよ！！」

「ほう。それは楽しみだな」

「ハハハ…お手柔らかに頼むよ……」

タケシが料理を作れることは知っていたがあえて知らないことにした。食べたことないし。

「リヨウマさん！！」

「ん？ああ、特訓だろ？いいぜ、ビシビシ鍛えてやる」

「はいっ！！」

「じゃあ私もついて行きたい！！」

「あらあ？ハルカはリヨウマさんが行くからついて行きたいの？」

「ちょ、ちよつとヒカリ！？そ、そそそそそんなわけないでしょ！！」

「どっちなんだよ」

「サトシは黙っててほしいわ！！」

「いいから行くぞ。マサトはどうする？」

旅の日記だろうか。何かを一心不乱に書き綴っていたマサトに声をかける。

「僕はここでリョウマさんのポケモンたちと仲良くなりたいんだけど……」

「そうか。なら、ジュカ以外をここに残しておくぞ。一応、安全のためにな」

「ありがとうリョウマさん!!」

「お礼なんていいって。LET'S GO! みんな!!」

俺が全てのモンスターボールを投げると、相棒たちが飛び出してきた。

「じゃあ、行くか。タケシ、俺たちはあそこの丘の上にいるからな」

「分かった」

「んじゃ、しゅっぱーっ!!」

俺によるサトシの最初の特訓が始まった。

「——というワケで、ポケモンにはタイプの相性というものがあるんだ」

「リョウマさん。それぐらい俺でも知ってます」

最初の特訓でつまづいた。

俺はまず最初にタイプについて教えようと思い、懇切丁寧に説明したのだが、バツサリと袈裟斬りにされてしまった。

「ば、バカじゃねえの！？オマエはタイプというものを何も分かってない！！」

「苦しい言い訳ね」

「バトルは強くても説明は苦手なんだろうね」

「そこ！！うるさいぞ！！いいかサトシ？今のお前の手持ちのタイ

プは電気と水だ。さて問題です。この二匹にはどんなタイプの技を覚えさせればよいでしょうか？」

「え？電気タイプには電気タイプを水タイプには水タイプの技を覚えさせればいいんじゃないんですか？」

「このバカチンがああああああ！！！！！！！！！！」

「げぶえ！！」

サトシが俺の平手打ちで宙を舞う。きよ、教育的指導！！

「いいか？電気タイプのポケモンが電気タイプの技を使うと確かに威力は上がる。だがなあ！！相手が地面タイプだった場合、どう戦うんだ？」

「そ、それは……水タイプに替えればいいと思います！！」

「交代ができないバトルもあるだろうが！！」

「で、ですけど！！」

「けどもけどもうるさいな！！いいか？お前のピカチュウは随分とレベルが高くて技も豊富だ。だが、俺のジュカに一撃で葬り去られるようじゃポケモンマスターなんてなれっこないんだよ！！」

「そ、それは、リョウマさんが強いから……」

「お前はそうやって言い訳をして負けを正当化しようとしていることに気づいてないのか！？」

「！？」

「負けることは別に悪いことじゃない。大切なのは勝負で得られる経験と情報だ。このポケモンにはこんな技が効果的だ。あのポケモンにはこんな技はダメだ。そうやって試行錯誤していくことで初めて強いポケモントレーナーになることができるんだよ！！」

知るかそんなの。俺がポケモンマスターへの道をサトシに教えられるわけないだろう。でも、俺はサトシを強いトレーナーにするために協力することはできる。それが転生者としての使命であり希望だ。

「すいませんでした！！俺、今まで間違っていました！！」
「分かればいいんだ分かれば」

「今のつて自分のミスをごまかしたただけだね」
「リョウマさん、凄い話術かも……」

「ホント黙っててくれないか！？」

「ばれちゃいけないんだよ！！俺のミスを隠ぺいするための熱弁だったなんて！！」

「ピカア！？」

ピカチュウの悲鳴が聞こえたと思ったら、巨大なアームにピカチュウが拘束されていた。まさかっ！！

「なんだ！？」

『なんだかんだと聞かれたら』
『答えてあげよう明日のため』

『FUTURE。白い未来は悪の色』

『UNIVERSE。黒い世界に正義の鉄槌』

『我らこの地にその名を記す』

『情熱の破壊者、ムサシ！！』

『暗黒の純情、コジロウ！！』

『無限の知性、ニヤース！！』

『『さあ集え、ロケット団の名の「ちっがあああああああう
！……」』』もとに……え？』』

「ロケット団が真面目に仕事するのはダウトオオオオオオオオ！！！！！！！！」

「なんてこと言ってくれるのよ！！」

「そうだそうだ！！俺たちの決め台詞を邪魔するなんて！！」

「常識がないにや！！」

「やかましい！！戻せ！！お前らの決め台詞を最初のバージョンに戻せ！！あの『世界の破壊を防ぐため…』的な奴のほうで！！」

「んな無茶な！？」

何故俺がここまでロケット団の変化を受け入れないかというと、俺が思うにロケット団「マヌケ」という構図がないとロケット団じゃないと思っっているからだ。

「やれ！！それをやったらピカチュウ好きにしていから！！」

「リョウマさん！？」

「それはダメでしょ！！」

「リョウマさん！！我を失わないで！！」

「だって見たいから！！初代の決め台詞が見たいから！！あの決め台詞じゃないとロケット団なんて認められないからああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺は滝のように涙を流す。だってとても悲しいから。せつかくこの世界に来たのに、ロケット団が真面目に悪事やってるんだよ？そんなの認められるか！！

「やって！！やってください！！やらないとボコボコにするよ！？」

「やってみなさい！！いけっコロモリ！！」

ムサシが出しあポケモンはコウモリに似たポケモンのコロモリ。飛

行タイプが入ってるがそんなのどうでもいい!!

「俺が勝ったらお前ら初代の決め台詞やれよ!？」

「いいわよ!!それぐらいやってあげようじゃない!!」

「言ったな!？言質とったからな!？LET'S GO!ジュカ!

!あのコロモリをぶちのめせ!!俺たちの為に!!」

「ピカチュウの為に戦って下さい!!」

「やかましい!!あいつらが今まで誘拐に成功したことなんてあんなのか!？」

「ないです。頑張れリョウマさん!!」

「ひどいじゃ!!それはひどいじゃ!!」

「そうだぜ!？俺たちだってやるときはやるんだぞ!!」

外野がなにか言っているが今はどうでもいい。俺はあのセリフを聞くために戦ってやる!!

「ジュカ、ギガインパクト!!」

「ジュウウウカアアアアア!!!!!!」

ジュカが白銀の輝きを纏ってコロモリに突っ込む。ジュカのスピードなら避けられるわけがない!!

「コロモオオオオ!!!!!!」

「コロモリちゃん!？」

圧勝。キズどころか攻撃すらさせずに勝負あり。こんな序盤で俺が負けるわけはないんだけど……………原作キャラって弱いのだ。

「さあ!!やってもらおうか!？」

「ひい!!やりますやらせてください!!」

そして、ロケット団の初代決め台詞が始まった。

「なんだ… かんだ… と聞かれたら…!! うう…」

「答えてあげるが世の情け!!」

「世界… の!! 破壊を… 防ぐため…」

「世界の平和を守るため!!」

「愛と真… 実と悪を貫く…」

「ラブリーチャーミーな敵役!!」

「ムサシ…」

「コジロウ!!」

「ニヤースでにやーす!!」

「銀河を… 駆けるう ロケット団のお二人にはあ!!」

「ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ!!」

「にやーんてにやー!!」

「… ムサシにまったくやる気が見られない!?!」

「よかった!!」

「… へ?!」

「それでこそロケット団だよな。いやあ、満足満足。あとは… お前らが空の彼方に飛んでいくのを見るだけだな」

俺がニヤリと笑うと、ロケット団の三人はおびえたように顔を真っ青にする。

「それはもう封印したの!!」

「やかましい。ジュカ、リーフストーム」

ドゴォ！！

ジュカのリーフストームによって、空の彼方に飛んでいくロケット団。さあ来るか！？言うか！？

『やな感じいいいいいいいい！！！！！！！！』

「俺、もう死んでもいい……」

あのロケット団を決め台詞から飛んでいくまで見れたんだ。感無量だね。

「リョウマさんって強いけど、なんか変わってるよな……」

「そこがいいんじゃないの？」

「ハルカ、本音が出てるよ？」

「ふえ！？」

結局、特訓なんかできずに夕食の時間になった。

ロケット団を教育しよう(後書き)

「評価も頼みます!!」

By リョウマ

夕食の後はシリアスに行こう（前書き）

「珍しくシリアスだ」

By リョウマ

夕食の後はシリアスに行こう

静寂

ただその言葉だけがこの食卓を支配していた。

「いいか？人数が多いからあんまりドタバタ食べるなよ？」

料理を作ったタケシが心配そうに注意を促す。

「わかってるさ……」

「リョウマさんには負けないよ……」

「二人ともテンション上がりすぎじゃない？」

「ハルカは分かるけど、リョウマさんもご飯好きだったなんて……」

「僕、こっちに避難して食べるよ」

俺は日本の文化『HASHI』を構える。対するハルカはフォークとスプーン。

「リョウマさん。そんな箸で私に勝てると思ってるんですか？」

「黙ってる。俺の箸使いは世界一だと自負できる」

バチバチバチッ

俺とハルカの間で電撃が走る。負けられない戦いがここにある……。

カチャッ

「「いただきますっ!!」」

マサトが食器と食器をぶつけた音がした瞬間、俺とハルカの攻防が始まった。

「うおりゃあああああああ!!!!!!」

まず手を出したのはシチュー。箸を使わずに皿ごと持ち上げて胃の中に流し込んでいく。美味しい。そこらへんの店よりも断然美味しい。

「ふぁ!!ふぁふぁーふぁふぁっふえふぁいふぁふぁ!!(わ!!マナーがなっていないかも!!)」

「そういうお前こそスパゲッティを一気に頬張ってんじゃねえか!!」

飛び交う皿。飛び散るソース。無くなっていく料理。食卓は戦場だと言う人がいるが、全くその通りだと思う。

「「おかわり!!」」

「早っ!!」

「ていうか汚いわよ」

「お姉ちゃん……」

最近外野が俺の悪口ばかり言ってる気がする。

「流石ですりヨウマさん!!」

「そっちこそ!!」

「うえっぷ。食いすぎた……」

みんなが寝静まったところ、俺は一人でさっきの丘の上に来ていた。

「出てこいお前ら」

手持ちのみんなをモンスターボールから場に出す。

「ジュカツ」

「キィ」

「キザンッ」

「キュウ」

「ニードー」

「ドラッ」

「ははは。元気だな。でも静かにな？みんな寝てるから」

俺の言った通りに声のトーンを下げるジュカ達。

「さて、お前らは俺の正体を知ってるよな？」

「「「「「「……「「「「「」」

バツが悪そうな顔で目をそらすみんな。

「あはは。別に攻めてるわけじゃないさ。だって俺とお前らは同じところから来たもんな。ここじゃない違う世界から……」

「くくくく……くくくく」

「リアクションとれよ……はあ、でさ、お前らはこれからどうしたい？って俺は言葉が分からないから一緒に……じゃあこうしよう。俺と一緒に冒険したいって奴は俺に向かってなんでもいい。技を放ってくれ。手加減すんなよ？男と男のコミュニケーションだ」

「ジユカツ！！」

ジユカのおんがえしで宙を舞う。

「キィ！！」

ウィングのおんがえしで地面を転がる。

「キザンツ！！」

ZEROのおんがえしで再び宙を舞う。

「キュウ！！」

キューのおんがえしでさらに空高く上がる。

「ニドオ！！」

ニドのおんがえしが腹にヒットする。

「ドラァ！！」

トドメとばかりにノヴァのおんがえしが頬にクリーンヒットした。

「うおえ！！て、テメエら……マジでやりやがったな……」

しかし、俺は気づいていた。こいつらがみんな『おんがえし』で攻撃をしてきたことを。

「俺はお前らと会ったばっかなんだけどな」

「ジュカツ！！」

「そんな俺でも一緒に過ごしてくれるか？」

「キイ！！」

「どんな困難も一緒に立ち向かってくれるか？」

「キザンツ！！」

「大切な人ができたとき、守るのを手伝ってくれるか？」

「キユウ！！」

「誰がピンチになっても助けに来てくれるか？」

「ニドオ！！」

「一緒に楽しんでくれるか？」

「ドラァ！！」

そして、俺はこの世界で初めて思った大きな夢を口にする。

「俺と一緒にリーグ制覇目指してくれるか？」

「ジュカインツ！！」

「キツス！！」

「キリキザン！！」

「キユウコオ！！」

「ニイドオオ！！！！！！」

「ドラアアアアアア！！！！！」

涙が出た。誰にも見られていないことを祈りながら俺はみんなを抱き寄せて号泣した。

しかし、俺は近くの木の後ろに誰かがいることに気が付かなかった。

「——で。深夜にポケモンの特訓してたら

ニドキングの毒の棘が刺さってKOされた。と？」

「あはは……面目ない……」

一夜明けた今日、俺はニドの毒の棘によってダウンしていた。

「はぁ……俺は今から近くの町で薬を買ってくる」

「俺も行くよ」

「私も行くわ」

「僕も行く！」

「じゃあ私」「ハルカ（お姉ちゃん）はリヨウマ（さん）の看病をして」「うん。分かった……」

そしてタケシたちは必要な荷物を持って、薬を探しに行った。

「……………」

残された俺たちの間に沈黙が訪れる。というか俺は具合が悪いから喋るのが辛いだけなんだけど。

「ハルカ」

「リヨウマさん」

同じタイミングで名前を呼んでしまったので再び沈黙する俺たち。

「リヨウマさんからどうぞ……」

「そうか。えっと、ハルカは何を目指して旅をしてるんだ？」

確か、コンテストの制覇だと思うんだけど……この地方にはコンテストなんて無いが。

「私はイツシュ地方のポケモンたちを見てみたかったです。知らないポケモン可愛いポケモン。どんなポケモンが生息するか確認したかったです。それが旅の理由。あはは……ちよっと単純かも？」

「え？」

「旅の理由は人それぞれだ。俺はただ楽しむために旅をしてるから、

俺よりは数倍マシだろ」

「そうですか……」

「で、お前の要件は？」

「えっと……こんなことを聞くのはダメだと思うけど……」

「いいから言えよ」

俺はハルカに許可を出したことをこの後、心底後悔することとなる。

「リヨウマさんって異世界の人なんですか？」

「……………え？」

俺は凍りついてしまった。

なんでバレた？旅の仲間には一回もそんなことは言っていないのに…

…何故？まさか！…

「昨夜のこと見たんだな？」

「はい……………」

あちゃーと右手で髪を掻く。油断してた。まさか見られるだなんて…………。

「で、どう思った？」

「へ？」

「だから、俺が異世界の人間だって知ってどう思った？」

「えっと……………驚いたかも」
「そりゃそうだよな……………」

驚かない人間なんていないと思う。俺は混乱を避けるためにあえて話さなかったのだから。

「でも、安心したかも」

「は？なにが？」

「リヨウマさんにもちゃんと、生まれた場所があるんだって」

「この世界じゃないけどな……………」

「この世界とかあの世界とか関係ないかも。私は、今のリヨウマさんがいいな。絶対にいなくならないでくださいね？」

ハルカが満面の笑みを俺に向ける。

ドキッ

お、落ち着け！！これは別に照れなんかじゃなくてその…………可愛いなコイツって思っただけでってんにゃああああああああああ……………！！！！！！！！

「ど、どうしたんですか！？」

「べ、別に何も無い！！おやすみ！！」

俺は勢いよく布団に潜り込む。顔の赤さを隠すためじゃない。決して違う。

『……………やっぱりリヨウマさんの事を私は……………』

なにかハルカが呟いていたが、よく聞こえなかった。

夕食の後はシリウスに行こう（後書き）

「ポケモンゲット？」

B Y サトシ

カラクサタウンの悲劇（前書き）

「原作がブレイクされすぎて……」

B
Y
リョウマ

カラクサタウンの悲劇

「へえ、ここがカラクサタウンか……」

無事に身体から毒も抜け、全快になった俺はみんなと最初の町であるカラクサタウンに来ていた。

「私買い物したいです」

周囲にある店をキラキラした目で見ながらヒカリが言う。

「じゃあ別れて行動するか。どう別れる？」

「……リヨウマさんとハルカは一緒に行動が義務」「……」

「聞いたことないわよ！！そんな義務！！」

「別にいいけど……」

チラツとハルカの方を見る。するとお互いに目が合い、バツと視線を逸らしてしまう。

この間の一件以来、こんな関係が続いていた。そろそろ元に戻さないとマズイかもしれない……。

「じゃあ私はサトシと一緒に見て回るから」

「えー。俺かよー」

「文句言わないのっ。ほら行くわよ！！」

「ちよっ、引っ張るなって！！」

ヒカリとサトシが人ごみの中に紛れて見えなくなった。相変わらず仲良いなあいつら。

「じゃあ俺はマサトと行動だな」

「タケシ。僕、ラルトスにポケモンフーズをプレゼントしたいんだけど……」

「分かった。じゃあ、まずはフーズショップから回ろうか」

「うん!!」

サトシたちと同じように人ごみの中に紛れて見えなくなるタケシとマサト。

「じゃあ俺達も行こうか」

「はい」

悪い雰囲気俺達も街の散策に出かけた。

「ここで休憩でもしよう。少し疲れただろ？」
「はい……」

一時間ほど町を見て回った俺達は近くのカフェで一休みすることにした。勿論、雰囲気はギスギスしてる。

「なあ、ハルカ」
「なんですか？」

俺は腹をくくって聞いてみることにした。だってこのままの空気には耐えられないと思ったから……。

「なに怒ってるんだ？」
「……え？」

「いや、『え？』って言われても……」
「私別に怒ってないかもしれないです」
「どっちだよ」

「怒ってませんよ」
「そうなの？なら良いんだ。なんか俺が話しかけてもあいまいな返事しかしてくれなかったからさあ。心配してたんだよ」
「心配かけてごめんね？ちよっと考え事してたから、反応が鈍かつ

たかも」

「考え事？」

するとハルカは身を乗り出して、俺の耳元で呟き始めた。いい香りがするな。とかそういう邪念は考えようにしよう。自分の保険のために。

「リヨウマさんの例の件についてです」

「ああ……あれか……」

例の件とは、俺が異世界から来たことについてだろう。もう解決したと思うんだけどな……。

「結局、リヨウマさんは元の世界に帰りたいの？」

「そんなわけではない。あっちの世界は楽しくもなかったからな。それにくらべてこっちの世界は楽しいぞ。………お前もいるし………」

「え？何か言いました？」

「別に何も言っていないぞ！？」

危なかった……聞かれてはいけないセリフを聞かれてしまうところだった……。

「ふーん………」

何故か半眼で俺を見てくるハルカ。え？俺何かしました？

「まあ、いいかも。知ってます？ここのパフェって絶品らしいですよ？」

「ああ。後、俺にはさん付けなんていらないから」

「そ、そう？分かった！！って話を逸らさないでほしいかも！！」

「……………チッ」

「今、舌打ちしませんでした！？」

「気のせいだ気のせい」

「すいませーん！！ジャンボパフェ二つお願いしまーす！！」

「お前よくそんなに食べるよな……………」

「リヨウマのおごりだからいいの！！」

「オイコラ大食い少女。なんで俺の財布からパフェ代を出さなきゃならんのだ」

「だってリヨウマがおごってくれるって」

「言ってますん！！そんな太っ腹なセリフはお前と出会ってから一度も言ってますん！！」

「うわぁ……………美味しそうかも！！」

「え！？もうできちゃったの！？断れなかった！！ってかハルカ。

お前、財布は？」

すると、ハルカのスプーンがパフェを掬ったあたりでストップした。
おいまさか……………。

「……………この間、全部使っちゃった……………」

「俺だって金持ってたねえよ！？」

「ええ！？それじゃあどうやってここから出るんですか！？」

「知らねえよ！！……………そうだ！！ハルカ。お前はここで待ってる。

俺は今から金をバトルで稼いでくるから！！」

「それは許さないかも！！リヨウマはその隙に私を置いていく気なんだ！！」

「チィ！！もうバレたか！！」

「リヨウマの考えぐらいお見通しよ！！」

「あの……………お客様……………？」

俺たちがテーブルを挟んで言い争いをしていると、額に青筋を浮き上がらせた店長らしき人がやってきた。

「お金がないなら代金分働いてもらいますよ？」

「待ってくれ！！もうすぐ金を持った仲間がここに来るから！！」

「そうです！！もう少して……あと十分ぐらいで来るはずなの！！」

「ですが……他のお客様のご迷惑になるようなことをされるとこちらにもいろいろと困るのですが……」

「分かってる！！だから応援を呼ぶから皿洗いだけは勘弁して！？」

「ホントにゴメンナサイ！！」

それから十五分後、偶然カフェの前を通りがかったタケシが俺たちの代わりにパフェ代を払ってくれたのだった。

「リヨウマとハルカは今日の夕飯抜き」

その日の夜、宿に泊まった俺たちに下されたタケシからの死刑宣告。

「なんで！？それは酷すぎだ！！横暴だ！！」

「そうよ！！なんで私たちの夕飯が抜きになっちゃうの！？」

「お前らが無駄な出費を重ねたからだろうが！！」

「う……」

「しかもあのジャンボパフェの値段が高すぎたせいで2人分の食費が足りないんだ！！原因のリヨウマとハルカが飯抜きになるのは当然だ！！」

「タ、タケシ……抑えて抑えて……」

「そ、そうよ……ハルカ達も反省してるみたいだし……」

サトシとヒカリが怒り狂うタケシを宥める。た、助かった……。

「……………お金は？」

「計画的に使うものです」

「今度からは？」

「絶対に無一文で食事なんかに行きません」

「それならいいんだ」

「それじゃあ！！」

「夕飯は抜きのままだけど」

「「そんなああああああああああああああ！！！！！！！！」

「！！！！」

タケシの冷酷な言葉で地面に崩れ落ちる俺とハルカ。

「タケシのバカ……いつも女のケツ追っかけてるくせに……」

「そうかも……引き留めるこっちの身にもなってほしいわ……」

「お前たちは一週間飯抜きだ」

バカな！？罰がレベルアップしやがった！！こいつ、どんだけ冷酷な奴なんだ！？

「待つて！？もう一度話し合おう！！俺たちは分かりあえるはずだ！！」

「私たちも十分反省してるってば！！」

「自分で反省してるなんて言うなよ……」

「だって俺たちが一食すら抜けないことを知ってるだろ！？」

「一日三食でも足りないかも！！」

「いやそれは食べすぎだ」

く……！！ここまで訴えてもダメだなんて……この糸目野郎は鬼か！？

「そうだな……俺が今から出す条件を達成できるなら飯抜きは解除してやるう」

「できる！！達成してみせるさ！！」

「私も頑張るわ！！」

「そうか。それじゃあ——」

俺はこの時思いもしなかった。タケシが出す条件があまりに厳しいものだなんて。

「明日、ハルカとリヨウマでこの町のバトル大会で優勝すること。あ。全地方のチャンピオンも出場するらしいぞ。形式はタッグバトルな」

[illegible]

俺とハル力の悲鳴は宿中に響き渡った。

バトル大会当日

『さあ始まりました。カラクサタウン杯最強決定戦！！今回はなんと豪華な選手がそろっております！！』

憂鬱だ。チャンピオンとこんなに早く戦うことになるなんて……。

『まず最初にカントー地方トジョウト地方のリーグ責任者であるワタル選手とシバ選手！！』

続いて、ホウエン地方のリーグ責任者であるダイゴ選手とシンオウのリーグ責任者であるシロナ選手！！残念ながらイッシュ地方の四天王およびチャンピオンは出場されておりません！！しかし、そのほかにも強豪ぞろいのこの大会！！さあ、一回戦目の試合！！ホウエンコンビのリョウマ選手とハルカ選手VSイッシュのシューティー選手とシンオウのジュン選手の対決です！！』

「げ。ニックネーム好きのいじわるトレーナーだ……」

「オイコラ。また地獄見せんぞデメエ」

というかなんでシューティーの相方がジュン？いつ知り合っただ？

「リョウマとやら！！俺に負けたら罰金一億円だかな！！」

「払えるわけないだろ！！」

『バトルスタート！！』

俺の初めてのポケモンバトルの大会はドタバタすぎなスタートを切った。

カラクサタウンの悲劇（後書き）

「罰金だ!!」

B
y ジュン

タッグバトルを試してみよう（前書き）

「はろはろー」

B y 神様（自称）

タッグバトルをしてみよう

「LET'S GO!ニド!!」

「出てきて!!バシャーモ!!」

「ニイイドオオオオオオオオ!!!!」

「シャモツ!!」

ハルカのポケモンはやっぱりバシャーモか……。まあ、それぐらいしか戦える奴いないだろうし……。

「いけっ!!ツタージャ!!」

「ゴウカザル、出番だ!!」

「タジャ!!」

「ウツキイイイ!!!!!!」

猿と蛇が出てきた。どちらも御三家の内の一体だ。なんか俺だけ疎外感……。

「バシャーモ、ツタージャにブレイズキックよ!!」

「シャモオ!!」

流石バシャーモ。ホウエンのポケモンで最も人気のある御三家だけはある。スピードが意外に速い。

「避けるツタージャ!!」

ツタージャは横跳びでブレイズキックを回避する。ほう……前よりバトルが上手くなってるじゃないか……。

「まだまだ行くわよ！！バシャーモ、ほのおのうず！！」

バシャーモの口から放たれた炎がツタージャの周りでぐるぐる回ってツタージャを閉じ込めた。ハルカってバトルできるんだな……意外だ。

「タ〜ジャ……」

『ツタージャ、戦闘不能！！』

操作が上手くなったとしてもバトルを左右するのは経験の差。シューティーのツタージャは一撃で崩れ落ちた。

「何やってんだ！！ゴウカザル！！ニドキングにマッハパンチ！！」

凄まじいスピードでジュンのゴウカザルが突っ込んでくる。流石、シンオウリーグに出場しただけはある。なかなかの使い手だ。

「喰らうかよ！！ニド、じしんだ！！」

「ええ！？私のバシャーモがまだ地面にいるのに！？」

「俺がそんな凡ミスするわけないだろ！！ニドキング、フィールドを真っ二つにじわれしてからじしんをするんだ！！」

「ニイドオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

ゴオン！！

ニドが地面を思いっきり踏みつけると、フィールドが真っ二つに割れた。弁償とかしなくてもいいよな……？

「ウキィー！！」

「ゴウカザル！！」

じしんによって大ダメージを受けたゴウカザルは地面に膝をついた。油断していたから防御もできなかったんだろうな。

「ハルカ！バシャーモでゴウカザルにトドメさせ！！」

「分かったかも！バシャーモ、ゴウカザルにはかいこうせん！！」

動きが鈍くなっているゴウカザルに白銀の光線が襲い掛かる。

「ゴウカザルウウウー！！！！」

ドオオオン！！

破壊光線がゴウカザルに直撃し、砂煙が舞い上がる。

「やったか……？」

そして、砂煙が晴れ、目を回したゴウカザルの姿が現れた。

『ゴウカザル戦闘不能！！よって勝者、リヨウマ＆ハルカペア！！』

『『わああああああああああ！！！！！！！！！！』』』

会場が割れんばかりの歓声に包まれる。す、凄いな……大会ってこんなに白熱するのか……。

「やったー！！リヨウマ、勝ったよー！！」

「そうだな。これで優勝に一步近づいたってわけだ。それと分かったから抱き着くな。ここは公衆の面前だつてのー！！」

俺は嬉しさのあまりに抱き着いてくるハルカを引きずりながら控え

室まで戻っていった。

「凄いですリョウマさん!!まさかフィールドを壊すなんて!!」
「弁償はしなくてもいいそうだ。良かったな餓死せずに済んで」

サトシ達が控え室に来た途端に騒がしくなった。それとサトシ、フイールドを壊すのは良いことじゃないからな。

「ハルカとリヨウマさんのコンビネーション良かったわ!! 息ぴったりだった!!」

「あ、ありがとう…… / / /」

「どうしたハルカ？」

「な、何でもない!!」

顔が真っ赤なのになんでもないうってどゆこと? 女の子って言うのはよく分からん……。

「はぁ……」

「タケシよ。その溜息は一体どういうことだ?」

「リヨウマさんってダメダメだね……」

「ラルウ……」

「ポケモンとトレーナーが同時に精神攻撃すんな!!」

ホントにこのメンバーは俺の罵倒が増えてきている気がする。俺ってそんなに駄目な人間?

「次のリヨウマさんたちの相手はシロナさんたちだってさ」

「そういえばサトシは出場しなかったんだな」

俺の記憶ではサトシは大会という大会に出場していた気がする。それなのに観戦側に回るだなんて……。

「出場してもリヨウマさんに勝てないから」

「…………… スマン」

「謝らないでください！！俺はもつともつと強くなつて、リョウマさんに勝てるようなトレーナーになつて見せるんですから！！」

サトシのいいところ、それはどんな時でも諦めないど根性だ。サトシの熱意につられて、通常の何倍も力を出すポケモンが増えていく。そうやってサトシは強くなる。それが俺の考えだ。

「それにしても、ハルカつてホウエンの手持ち連れてきてたんだな。俺はピカチュウだけなのに」

「マメパト捕まえたでしょ？私はこの子たちと冒険をするつて決めるからね。別のポケモンは必要ないのよ」

ハルカの手持ちつて六体もいたつけ？と考え事をしてしていると……

『ごーんにちはー。あれ？こんばんは？』

バカ神からテレパシーが来た。

『何のようだ』

『もー何ー？その態度は。せつかくもう三体だけポケモン増やしてあげようと思つたのに』

『は？なんだよいきなり。なにかあつたのか？』

『別にい。アンタのポケモンがトゲキッス以外ゴツイのばつかだから華を足してあげようと思つたのよ。華を。というわけでプラスするポケモンは可愛い限定です！！』

『……お前、俺のポケモンと暮らしてたりしてないよな？』

『ギクウ！！そ、ソクナワケナイ<ライチュツ！！>ヨーってこらあ！！ライちゃんつてば！！』

『絶対に一緒に暮らしてるよなあ！？しかも俺のライに勝手に変なあだ名つけてんじゃねえ！！』

『……送るのはライちゃん以外にしてね？この子がいなくなっちゃたら世界滅ぼすよ？』

『お前か！！マヤの予言の地球滅亡の原因はお前か！！』

『い・い・か・ら！！早く三体選びなさい！！』

『つたく……じゃあつてやっぱ遠慮しとくよ』

『いいの？数少ないボーナスチャンスよ？』

『俺はこの六体で旅に出る。これからいつまでも。そう決めてんだよ』

『そう……良かったわねみんな！！またずっと暮らせるよおおおお！！！！！！！！』

『俺のポケモンを従えるの止めるよ！！』

『アンタのポケモンじゃないわ！！既にアタシのポケモンよ！！しかも私は今、アンタが出場してる大会で一回戦を突破したわ！！』

『お前ホントになにやってんだよ！！ん？タッグバトルでお前が出る場？』

『もう一人はぞろつちでカバー』

『俺のゾロアを卵から孵してなにをやってたんだ！？反則だろ！！実質一人で戦ってんじゃねえか！！』

『ぞろつちを舐めないでよね。彼はどんな生き物にも姿を変えられるのよ』

『知ってます！！それぐらい一般常識です！！』

『んじゃ、決勝で会いましょうね！』

プチッ

自由気ままなクソ神が同じ大会に出てる？勝てんのか？アイツは俺の残りのポケモンを全部所持してるんだぞ！？

「リヨウマさん、大丈夫？」

ずっと黙っていた俺を心配したのか、ヒカリが顔を覗き込んでくる。

「大丈夫だ。俺の逃がしたポケモンを全部引き取ったトレーナーが
出場してることに気づいて、攻略法を練ってたんだ」

「リョウマの残りのポケモンってどんなのがいるの？知りたいかも」
「そうだなあ…カメックスにリザードンにディアルガにパールキアに
ガラガラにライチュウにギガイアスにハッサムにメタモンにそれか
らそれから……百匹ぐらいかな？」

俺が答えるとハルカたちが顔を蒼白にして黙り込んだ。

「どうした？」

「百匹って……どんだけ捕まえたんですか……」

「そんなこと言われてもなあ。今の俺のポケモンはこいつらだけだ
し……」

腰につけたモンスターボールを手に取り眺める。ボールの中のポケ
モンたちが心配そうに俺を見つめていた。

大丈夫だよと声をかけ、視線をハルカたちに戻す。

「俺は相手がどんな奴でも負けられない理由があるんだ。なあハル
カ？」

「うん！！私たちの夕飯の為に負けられないわ！！」

「目的が目的なだけにあんまり応援する気になれない……」

「大丈夫。ハルカたちなら勝てるわよ！！」

「お姉ちゃん、リョウマさん、頑張ってね！！」

「賞金、絶対に獲得して来いよ。十万円なんだから……」

何故だろう？タケシの応援が一番迫力あったんだけど……怖い。

『それでは、準決勝に出場する選手は第二フィールドまで来てくだ
さい』

すると、時間を知らせる放送が控え室に届いた。さあて、いっちょ
やりますか！！

「行くぞハルカ」

「モチ！！絶対に負けないわよ！！」

俺たちは準々決勝の舞台となる第二フィールドに向かった。

『準決勝はステージを替えてのスタートです。この第二フィールドは水と荒れ地の混合ステージです。』

水場と荒れ地か……水対応とか多そうだな。気を付けないと……。

『それでは準決勝の一回戦目は圧倒的な強さで勝ち進んできたリョウマ&ハルカペア対こちら絶対的な強さを見せたシロナ&ダイゴペア!!さてどんな戦いを見せてくれるのでしょうか!?!』

「期待がプレッシャーになるんですけど……」

「負けないってば。私たちの力を見せてあげればいいのよ!」

ハルカが肩を落としている俺の背中をペシペシと叩く。嬉しいけど痛い……。

「貴方たちが私たちの相手?私はシンオウリーグチャンピオンのシロナよ。よろしくね」

「僕はホウエンリーグチャンピオンのダイゴ。どうぞよろしく」

礼儀正しいな。流石チャンピオンだ。っていうか勝てないってこんなコンビに。

『はじめ! !』

強豪と最強の準々決勝が始まった。

タッグバトルを試してみよう(後書き)

「いや無理だつて!!」

By リョウマ

戦え僕らのポケモンたち!! (前書き)

「勝負勝負勝負って楽しい!!」

B
y サトシ

戦え僕らのポケモンたち！！

「LET・GO！ウイング！！」

「カメール、出てきて！！」

俺が出したのはトゲキッスのウイング。ハルカが出したのはカメールだ。

「空を駆けなさい、ウォーグル！！」

「すべてを粉碎しろ！！メタグロス！！」

シロナはウォーグル。ダイゴはメタグロスを出してきた。どちらも強いポケモンだから油断はできねえ……。

「ウイング、ゆびをふる！！」

俺が指示したのはランダム技を繰り返す指を振る。この技は言うなれば運試し。運が悪ければ弱い技。運が良ければ強い技。というぐあいにバトルであまり使わない方がよくね？という技である。

「キッス！！」

トゲキッスの上から無数の隕石がふってきた。発動したのはおそろく流星群。俺は意外と運がいいみたいだ。

「ウォーグル、避けなさい！！」

「メタグロス、てっぺき！！」

それぞれの方法で流星群のダメージを減らしていく二人。流石チャ

ンピオンだ。判断力がスゴイ。

「カメール、ウォーグルにれいとうビームよ!!」
「しまった!!」

水中に潜んでいたカメールが空中に飛び上がり、冷凍ビームを放つ。

「……なんてね。ウォーグル、かぜおこしでれいとうビームを吹き飛ばしなさい!!」

「ウォーグ!!」

ウォーグルのかぜおこしでウィングに向かって跳ね返ってくるれいとうビーム。

「うおおおお!!? 避けるウィング!! 急降下だ!!」

なんてデタラメな戦い方をするんだ!! これがチャンピオンの実力か!?

「メタグロス、トゲキッスにはかいこうせん!!」
「何い!?!」

油断した。メタグロスから放たれたはいこうせんがウィングに凄まじい速度で襲い掛かる。

「ウィング、ゆびをふる!!」

もはや回避もへったくれもない運試し。俺はみんなが言うほど実力はないため、こんな方法をとるしかない。クソッ!! もっと知識を持てれば!!

「キイイ！！！」

すると、ウィングが空間に裂け目を作りだして潜り込んだ。これはまさか……

「シャドーダイブ？運がいいわね」

「ヨッシャアアアアア！！！！！！NICEだウィング！！よくやった！！」

「リヨウマに続くわよ！！カメール、ふぶき！！」

フィールド中に吹雪が吹き荒れた。寒っ！！味方の技だけど寒っ！！

「アーンド、れいとうビーム！！」

「なんですって！？」

吹雪を回避するのに必死になっていたウォーグルにれいとうビームが直撃する。

『ウォーグル、戦闘不能！！急所に当たってしまったようです！！』

なんて命中率だ……ふぶきで視界も悪くて距離もあったのに技を急所に当てるだなんて……。

「あとはメタグロスだけだ！！ウィング、だいもんじ！！」

「カメール、きあいパンチ！！」

「メタグロス、だいはくはっ！！」

「なっ！？」

こんな場面で自滅技のだいはくはっ！？一体なんのつもりだ！？

「チャンピオンとして、敗北するときも華を大事にするのが礼儀というもの！！見せてあげよう！！チャンピオンの散り方を！！」

別に見たくもない。負けるなら勝手に負けてほしいと思う。

「ウイング、そらをとぶ！！」

「カメール、ダイビング！！」

俺たちの指示通り、必死に空高く飛び上がるウイングと水中深く潜っていくカメール。なんでこんなところで世界記録に挑戦みたいなことをせにやなんのだ。

「メエエエタアアアアアア！！！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

鼓膜が破れそうになるぐらいの爆音が会場を包み込む。

爆風で周囲の木々がしなって折れそうになる。

どんな威力だよ！！ポケモンの技ってレベルの威力じゃねえだろ！！

『メタグロス戦闘不能！！よって勝者、リョウマ&ハルカペア！！』

勝ったけど！！なんだろうこの達成感のなさは！！全然嬉しくないです！！

「いい勝負だったわ」

「次は負けないよ？」

捨て台詞を残し会場を後にするチャンピオンコンビ。帰れ。自分の

地方に帰りやがれ！！

「次は決勝だな」

「どんな人が相手でも私とリヨウマなら勝てるって！！」
「そうだな」

次の相手はおそらくあのクソ神だろう。なんかレベルとか急激に上げてそうだし。怖いなあ。戦いたくないなあ。

「じゃあ会場に行きましょう！！」

「ひ、引つ張るなって！！転ぶから！！」

俺たちは大会の優勝へのチケットを手に入れるための最終決戦へと向かった。

『さあハチャメチャな戦いがあつたおかげで決勝戦は第三ステージで行うこととなりました!!』

そのハチャメチャな試合が全部俺たちの試合だという現実が心に突き刺さつて凄く泣きそうだ。

『決勝戦はノーマルステージ。西側はフィールドを破壊するトレーナー。リヨウマ&ハルカペア!!』

「絶対に根に持つてるだろ」

「あはは……」

俺の言葉にハルカが苦笑いで同意する。別に好きで壊したわけじゃないんですけど……。

『東側は可愛いポケモンで勝利を掴んできたトレーナー。カミノ&ゾロチペアです!!』

カミノ↓神の

ゾロチ↓ぞろっち

なんて適当な名前で出場してやがるあいつらは……。

「はろはろー。元気にしてるー?」

「お前も帰れよ!!」

「嫌よ。私は優勝賞品の羽根飾りが欲しいもん」

「知らねえよ！！羽根飾りぐらい自分で作れよ！！」

神様なんだし。

ツンツン

ハルカが俺の肩をつついて耳に顔を近づけてきた。

「ん？」

「あの女の人って誰？」

ハルカの周りに怒りのオーラが見えるのは何故だろう。身震いが止まらない。

「あいつは俺をこの世界に送り込んだ神様だ」

「神様！？なんで神様が大会に出場してるの！？」

「羽根飾りが欲しいんだと」

「んな勝手な……」

ハルカが思わず呆れた視線をカミノに向ける。ハルカ、その気持ち
は痛いほど分かるぞ。

「貴方がハルカちゃん？リヨウマみたいな駄目男と一緒にバトルだ
なんて可哀相」

「そうですか？リヨウマは結構強いですよ？」

目が笑ってない。目が笑ってないよハルカ。背後になんか修羅みた
いな降臨してるし……。

「そう？リヨウマはロリコンじゃないのよ？」

「誰が幼女だ！！私は真正正銘の恋する13歳です！！」

「13歳？リヨウマと3歳も離れてるじゃない。フツ」

「鼻で笑いましたね！？許さない！！あなたは絶対に許さないんだから！！」

『決勝戦は使用ポケモン四体のダブルバトル。バトル開始！！』

「LET'S GO！ZERO！！」

「フシギバナ、出てきて！！」

「ライちゃん出番よ！！」

「……………ビッキー」

相手はライチュウとビクティニか…………マジで強化してやがるのかな？
まあ、試させてもらおうとしますか！！

「行くぜえ！！ZERO——」

戦え僕らのポケモンたち!! (後書き)

「私を倒せるう？」

B y カミノ

神様VS転生者？（前書き）

「久しぶりです」

B
y
リョウマ

神様VS転生者？

「ZERO、ライチュウにアイアンヘッド!!」

まずはそこまで威力のない技を選択する。

小手調べのためだ。この世界においてのクソゴッドの実力を調べるためにも、な。

「ライちゃん!!」

「ライツ!!」

ライチュウが命令も下されていないのに身代わりを使って攻撃を回避した。

こいつ……. どんだけ懐かせてんだよ。

「もう小手調べは終わり?」

やっぱり分かっていたようだ。これだから神ってやつは大っ嫌いなんだよ。

「まあな。今からは本気で潰すぞ。ZERO、地面にギガインパクト」

白銀の光を纏ったZEROが地面に向かって拳を振りおろすと、フィールドが巨大なクレーターで埋め尽くされた。弁償とか言われないうことを祈ろう。

「フシギバナ、ねむりごなよ!!」

「ええ!?!」

「……っ!？」

完全に俺しか眼中になかったカミノはハルカの存在を忘れていた。俺はその油断を利用することにしたのだ。まず、相手の動ける範囲を狭めて動きを制限する。そして、その隙にハルカのフシギバナで相手を眠らせる。この作戦は試合の前にお互いで話し合って決めた作戦なので、ハルカもすぐに実行してくれた。

「油断大敵だなあ。カミノさんや」

「うるさいっ!!卑怯な技使いが!!」

「なんとも言え!!俺たちは絶対に負けるわけにはいかねえんだ!!ZERO、ハサミギロチン!!」

「ザンツ!!」

ZEROの腕の刃が青白く光り、長く伸びる。

この世界のハサミギロチンはアニメ版と同じような見た目になるようだ……つとと、余計な考えは削除だ削除。

「ライちゃん、起きなさい!!」

「ハッ!!そんな声一つでねむりが破ら「ラアアアイ!!」れるワケなああああああ!!」

起きた!!起きやがった!?!カミノが念じるだけで眠り状態から目を覚ますだ!!?反則だ……この勝負、勝てるかどうか分からねえ!!

「ライちゃん、キリキザンのハサミギロチンを避けつつボルテッカ
!!!」

「くっ!!フシギバナ、ビクティニに向かってハードプラント!!」

「……ビッキー、GET UP!!」

「ティイイイイイ！……！」

「なんですつて！？」

ビクティニまでもが目を覚ました。マズイ……一気に状況を一転された。このままでは流れを持って行かれちゃう！！

「チツ！！仕方がねえ！！ZERO、ライチュウのボルテッカーを受け止める！！」

「ザンツ！！」

ガシイ！！

ZEROが自らより小柄のライチュウをガツシリと受け止める。ライチュウは身動きが取れないようで、じたばたしている。よし、作戦成功！！

「ZERO、そのままギガンパクトだ！！」

「ええ！？ライちゃん！！逃げてえ！！」

そんな悲鳴だけで俺のZEROの攻撃を避けられるはずもない。

ドオオオオオオオオオンツ！！！！

凄まじい轟音を轟かせながらZEROがライチュウを押しつぶした。

『ライチュウ、戦闘不能！！』

俺が育てていた時と同じように防御力が低いライチュウ。よかった……あのクソゴッドがチート補強しなくて……。

「ライちゃん戻って!!……よく頑張ったわね。ライちゃんの串い合戦!!コジヨ太、出番よ!!」

「コオオジヨオオオオオオオオ!!……!!」

カミノの最後のポケモンは格闘タイプのコジヨンド。俺のZEROの最大の天敵とも言っている格闘タイプを入れてくるなんて……速攻で終わらせる!!

「ハルカ!!じんだ!!」

「それじゃあZEROが!？」

「大丈夫だ!!こっちで何とかする!!」

そして俺はZEROの方を向く。俺の視線に気づいたようで、ZEROもこっちを見てきた。

ZERO、ビクティニを拘束して地震を命中させるんだ。いけるか？

コクン

ZEROが静かに頷いた。よっしゃ!!流石、俺のパーティーの切り込み隊長!!

「いっけええええええZEROオオオオオオオオ!!
!!……!!」

「ザアアアアアアアアアアアア!!……!!」

「フシギバナ、じしんよ!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

巨大なクレーターができているフィールドが上下左右にぐらぐらと揺れる。いつも思っただけど、どうしてこんな技でダメージ受ける

の？

『キリキザン、ビクティニ、戦闘不能！！』

フシギバナの地震には耐えきらなかったが、自分の役目を果たしてくれたZEROには特製のポケモンフードを進呈しよう。

「ZEROの意志を継げ！！LET'S GO！！キュー！！」
「コオオオオオオン！！！！」

紅蓮の炎を纏ったキューがフィールドに顕現する。コジョンドなんて目じゃないZEー！！

「……今凄くイラつくこと考えなかった？」

「滅相もございません」

「そっ？ならいいんだけど……」

危ない危ない。ハルカの目に光が灯ってなかったのを確認した時にはマジで死ぬかと思ったよ。

「……ラグラ」

「ラージイ！！」

ゾロチが出したのは水タイプのラグラージって……

「全然可愛くねえじゃん！！ごついじゃん！！」

「どこがよ！！すっごく可愛いじゃない！！」

「俺にはお前の美的感覚が理解できん！！」

「しなくていいわよ！！」

「どっちでもいいからさっさとバトルをして！！フシギバナ、ラゲ

ラージにハードプラント!!」

「ええ！？話の途中に攻撃い！？」

流石だ。どんな状況でも冷静に攻撃をしていくハルカ。言い争いでバトルを放棄する俺とカミノ。差は歴然だ……。

「……ラグラ、れいとうビーム&ふぶき」

「二段階攻撃！？」

ゾロチの指令の後、ラグラージから放たれる二つの技。二つ同時攻撃なんて聞いたことないぞ！？

「これが私の真骨頂！！名付けて『ダブルツイン』よ！！」

「どっちも意味が同じです！！」

「うるさいわね！！だまって喰らいなさい！！」

俺のキューとハルカのフシギバナに氷タイプの二つの技が迫ってくる――

神様VS転生者？（後書き）

「ひっさしぶりい」

B
y カミノ

神様VS転生者？（前書き）

「コンテストはこの地方にはないみたいね……」

B
y
ヒカリ

神様VS転生者？

「キュー、オーバーヒートだ!!」

「キュウウウウウウ!!!!」

ゴアアアアアアア!!!!

会場の空高くまで届くかと思うほどの火柱がキューから放たれた。
コイツの炎ならこんな氷技なんて溶かしてしまえる!!

「バアアアアアア……」

ドンッ!!

あ。

『フシギバナ、オーバーヒートに巻き込まれて戦闘不能!! 的にも味方にも攻撃をされて沈黙です!!』

「リヨウマ!？」

「すまんハルカ!! 悪気はなかった!!」

「だとしても私のフシギバナが戦闘不能なんですけど!？」

「気にすんな!! この前ロケット団が言ってた!! 今日がダメでも明日という日があるさ」ってな!!」

「それは今の状況の言い訳にはなっていないかも!!」

修羅のようなオーラを纏わせて俺に怒りを向けるハルカ。
やっべ。バトルの前に死ぬかも。

「フシギバナの仇iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

「関節技は勘弁してくだギャアアアアアアアアアアア!!!!」
「!!!!」

「あのー……攻撃してもいいかしら?」

「ご自由に!!」

「じゃあ遠慮なく!!海王子ここに推参せよ!!マナっち!!」
「マアナ!!」

え? マナフィ? 俺そんなポケモン持ってないんですけど。

すっげえ欲しかったし図鑑に登録したかったけどゲットできずに終わったし。

「二日前にゲットしたのよ。いやぁ大変だったわ。海底都市から連れてくるのは」

「まさかそのマナフィって!?!」

「そのまさかよ。アナタが依然出会ったマナフィちゃんです」

「マナツ!!」

そこまでやるかカミノ……. どれだけ可愛いもの好きなんですかい。

「マナっち、キュウコンに向かってハイドロポンプよ!!」

水タイプのマナフィから放たれるハイドロポンプの威力は通常の1・5倍。

当たれば即死は免れないだろうな。

「キュー、みがわりだ」

身代わり…ヒットポイントの四分の一を消費して自分の代わりに人形のようなものにダメージを与えさせる技。

この技にはヒットポイントが減るといふ短所があるがその分使い勝手がいいのが長所だ。

「これでキューのダメージは一時ゼロになる「関係ないわ」はずつてどつという意味だ!？」

「身代わりなんて一撃で葬り去ってやるって言うてんのよ!！」
「……ラグラ、なみのり」

特攻が高いマナフィから放たれるなみのりの水の量はフィールドを覆い尽くすほどだ。

これは避けられないか……!？

「グレイシア、れいとうビームで波を凍らせて!！」

ピキッ

なんという威力であろうか、れいとうビーム。

あの凄まじい量の波を一瞬で氷漬けにしてしまったではないか。

「グレイシア、続けてラグラージにシャドーボール!！」

『無防備なラグラージに迫るシャドーボールの大群!!はたして避けられるのか!!』

「キュー、ほえるだ!！」

「コオオオオオオン！！！！！」

会場中に響き渡るキューのほえる。

この世界でのほえるは相手を一定時間動けなくさせる技だ。

そして今はラグラージにシャドーボールが迫っている状態。

そんな状態で動きを止めると待っているのはもちろん――

――戦闘不能だ。

『ラグラージ戦闘不能！！ほえるによつて動きを止められてしまつてことにより急所に当たつてしまつてようです！！これでカミノチームのポケモンはマナフィのみ！！さあ、ここからどう逆転していくのか！！』

確かにアイツの手持ちは残りマナフィだけだ。

しかしアイツはなんか仕掛けてきそうなんだよなあ。

ニヤリ

ゾクウツ！！

カミノの妖艶な笑みを見た瞬間に前身のけが逆立つのが分かった。
なんだ！？なにを仕掛けてくる！？

「マナっち、全部の技発動」

カミノがマナフィに意味不明な指示をすると、マナフィの周囲が信じられない光景になっていた。

「なみのりにハイドロポンプにサイコネシス！？」

「アイツまさか……マナフィが覚えてる技を全部発動したってのか
！？」

そんなデタラメな攻撃ができるなんて考えもしなかった！！

なぜなら、ポケモンの体が技による負荷に耐えられるかどうかの賭けをしなくてはならないからだ。

「コオオオオオン！！！」

「シオオオオオ！！！！！！」

マナフィの猛攻の後に残っていたのは目を回したキューと 그레이シアの姿だった。

『キューウコン、 그레이シア戦闘不能！！よって今回の大会を制したのはカミノ選手です！！』

俺の耳には、あのバカが勝利者インタビューを受けている音がぼんやりと聞こえていた。

「あんな奴に負けるなんて……」

カラクサタウンを後にした俺はサニョウシティまでの道中で力なく

歩いていた。

「元気出してくださいよ。あんな技されたら誰も勝てませんって」
「そうね。確かにあれじゃありヨウマさんでも勝てないわね」

サトシとヒカリが慰めてくれてはいるが、俺のテンションは一向に上がることは無かった。

「マサトがジムリーダーになるための特訓でトウカジムに帰ったんだ。リヨウマも元気を出して、ちゃんと特訓しなくちゃな」

そう。あの大会の後、マサトは『僕はジムリーダーになってみせるんだ！』と言い残してトウカシティに帰っていったのだ。
なんだか一気に人数が減った気がする。

「そうだけどさ………はあ」

「これはちよつと重症かも。元気出しなさいってばー。リヨウマー」
ハルカが俺の目の前で手を振ってくるがまったくテンションが上がらない。

すると……

『相変わらず心が弱いわねえ。リヨウマは』

丘の上で夕日をバックにあのバカが仁王立ちしていた。

「おお！！美しい！！その流星を彷彿とさせる滑らかな黄色い髪！！モデルのような長い手足！！そして貴女の後ろの夕日がなんともいえない美しさを醸し出している！！このタケシ、貴女に心を奪われました！！」

タケシが凄まじい速度でカミノの手を取り、ナンパしていた。
アイツも懲りないよな……。

「何の用だよ。俺を笑いにでも来たか？」

「それが全然違うのよ。アタシはアナタたちと旅がしたくて来たの」

は？この神は何を言ってるんだ？

「ちょっとこっちに来て」

カミノが俺を近くに呼び、みんなに聞こえないような音量で話し始めた。

「アンタを転生させたことが上にバレて、神様辞めさせられたのよ」

「はあ？神様ってそんなことで辞めさせられんのかよ」

「そういうこと。というわけだから一緒に旅をさせて頂戴な」

「うーん……………」

確かにコイツが旅に同伴すれば愉快になって楽しいだろうけど……。

「なにを迷っているんだリョウマ！！」

「うわあ！！ビックリしたあ」

「こんな美しい人と旅ができるなんて一生に一度あるかないかだ！

！俺はカミノさんと一緒に旅をするのに賛成だ！！」

コイツは絶対に反対しないとは思ってたけどな。

「俺も賛成です。カミノさんに同時技の極意とか教わりたいし」

「私も賛成！！カミノさんに服とか選んでもらいたいし！！」

サトシとヒカリも賛成のようだ。

あと残るは……

「ハルカ、お前はどうかんだ？」

「……」

腕を組んだまま黙りこくっているハルカ。
なにをそんなに悩んでいるのだろうか。

「ハルカちゃん、ちょっとこっちに来なさいな」

「……？」

カミノが俺たちから離れたところにハルカを呼んで再び小さい声で話を始めた。

ここからじゃよく聞こえないし、後はアイツら次第ってことで。

「（ハルカちゃんはアタシがリョウマを口説かないか心配なのよね？）」

「（！？……もうバレてたんですね……）」

「（だってアタシは元神様だもん。あと、敬語は止めて頂戴な。よそよしくて嫌になっちゃう）」

「（分かったわ。で、ホントにあなたはリョウマのことをどうも思っていないのよね？）」

「（アイツはアタシにとってのイジリ対象ってところかしらん）」

「（そう……分かったわ）」

「リヨウマ！！私もカミノが同伴するのに賛成よ！！」

なんだなんだ！？何がハル力をあそこまで張り切らせているんだ！？

「というわけで改めて自己紹介しとくわね。私の名前はカミノ。リヨウマの逃がしたポケモンを全て所持していて、リヨウマのボックスの役割も兼ねているわ。以後よろしく！！」

そんなこんなで俺たちの旅のメンバーに騒がしい元神様という意味不明な人物が加わることとなったのだ。

先行きが心配だ……

神様VS転生者？（後書き）

「アンタがゴールドか？」

B
y
リョウマ

とりあえず二人目のキャラ紹介いつとく？（前書き）

「アタシの出番ってワケ」

B y カミノ

10月21日に改訂しました。

とりあえず二人目のキャラ紹介いつとく？

カミノ

年齢

18歳（人間年齢）

容姿

ポニーテールで鋭い目。目と髪は黄色。タケシがゾッコンなぐらいの美人。

服装：BWの女主人公。

身長

170cm

体重

知りたいのぉ？教えないわよ。

性格

DS。しかし優しい性格でもある。リョウマとハルカをいじるのが趣味。

好きなポケモン

可愛いポケモン

嫌いなポケモン

可愛くないポケモン

将来の夢

絶対に負けない

今の手持ち

マナっち（マナファイ♂）

ゾロっち（ゾロア♂）

ライちゃん（ライチュウ♂）

ラグラ（ラグラージ♀）

ビッキー（ビクティニ）

コジヨ太（コジヨンド♂）

とりあえず二人目のキャラ紹介いつとく？（後書き）

「また次回会いましょう」

B
y カミノ

孵化のスペシャリストとの邂逅（前書き）

「オレはゴールドだ!!よろしくな!!」

B
y
 ゴ
 ゴ
 ル
 ド

孵化のスペシャリストとの邂逅

「腹減った……」

カミノが加わりにぎやかになった俺たち一行はサンヨウシティに向かって歩き続けていた。

「我慢しろリョウマ。食費が足りないんだからな」

「タケシ……俺ももうダメかもしれない……」

俺とサトシの体力は限界に達しており、足取りがおぼつかない。

「私もう駄目え……」

そしてついにハルカが地面に座り込んでしまった。
珍しいな。ハルカが弱音を吐くなんて。

「もう……みんなだらしなさすぎ……」

「まあ確かに小腹は空いたけどねえ」

前を軽いステップで歩いていたヒカリとカミノの二人が俺たちのところまで戻ってきて上から見下ろしてくる。

「こうなったら近くににいるトレーナーブツ倒して大金を巻き上げるしかない……」

この世界ではゲームと同じように、バトルで勝ったトレーナーから賞金を受け取ることができる。

俺はそれを利用して食費を稼ごうというワケだ。

「でもトレーナーなんて見当たりませんよ?」

サトシの言うとおり、ここは森の中ということもあってか、人っ子一人見当たらぬ。

「大丈夫だ。クロス、トレーナーを探してくるんだ!」

「クロッ!」

俺が出したのはヘラクロスのクロス。カミノが仲間になったついでにニドと入れ替えておいたのだ。

正直、戦力としてはコイツのほうが十分に高いからな。ごめん、ニド……。

そしてクロスは森の上空に飛来してトレーナーを探しに行った。

「誘拐じゃないの? コレ」

「大丈夫だ。話せば分かってくれるハズ」

――十分後

「ヘラクロッ!」

クロスが一人のトレーナーを抱え上げて戻ってきた。

ん？あのトレーナー、どつかで見たような……。

「オイオイオイ！！いきなり何すんだコノヤロー！！離せてんだ！！」

クロスが連れて来たトレーナーは爆発したような前髪が特徴の俺の少し下ぐらいの少年だった。

「テメーがこのヘラクロスのトレーナーか！？よくもやってくれたな！！覚悟はできてんのか！？」

「まさか……ゴールド……？」

そう。この少年はポケットモンスター SPECIAL に登場するゴールドだったのだ。

いやぁ、偶然というのは怖いね。

「なんでオレの名前を知ってるかは聞かねーが、こっちも頭にキテルんだ。バトルしてもらっぜ！！」

「あー……うん。はいそーなりますよね」

「自業自得かも……」

ハルカの呟きが胸に突き刺さるほどに辛かった。

「これより、リヨウマ対ゴールドの六体六のシングルバトルを始める!!」

審判は毎回恒例のタケシだ。

「実況は私カミノが務めさせてもらっわ」
「いるのその役？」

外野がうるさいがあえて無視。

「オレからいくぜ!! エーたろう!!」

ゴールドが繰り出したのはエテボース。やっぱり原作通りの手持ち

なのかな？それなら安心できるんだが……。

「クロス、LET・S GO!!」

こっちはノーマルタイプに強い格闘タイプでいかせてもらうとしましようか!!

「先手必勝!!エーたろう、おうふくビンタ!!」

「エテボースッ!!」

速い。エテボースなのに素早さが高い。これは苦戦しそうだ!!

「クロス、尻尾を掴んでインファイト!!」

「んだとお!？」

クロスは指示通り、エテボースのおうふくビンタを受け止め、顔面にインファイトを叩き込んだ。

「エテボース戦闘不能!!」

「やるねえ。なかなか強いじゃん」

「そりゃどうも」

「でもここからはそうはいかねえぜ!!トゲたろう!!」

「キイイイ!!」

ゴールドの二番手はトゲキッス。

なんかあのトゲキッスの目つきが凄く悪いんですけど……。

「コイツはオレに似てギャンブル好きだ!!つつーワケで、ゆびをふる!!」

そして発動したのが……

「ブレイブバードだと!？」

「NICEだトゲたろう!! 良くし運だ!!」

クロスは天敵である飛行タイプのブレイブバードをくらって戦闘不能となってしまう。

流石に四倍の威力には耐えきれなかったみたいだな……。

「よくやったクロス。ウィング、LET'S GO!!」

「へえ、アンタもトゲキッス持ってたんだ」

「俺のウィングを甘く見るなよ? ゆびをふる!!」

ウィングがゆびをふるを発動すると、ウィングから黄色い閃光が放たれた。

「チャージビームだ!!」

サトシが興奮したように叫ぶ。平和でいいよな観客席は……。

「トゲたろう、しんそくだ!!」

「なんの!! こつちもしんそくだ!!」

お互いに旋回しながら均衡する二匹のトゲキッス。実力は互角。これが孵化のスペシャリストの実力ですか……。

観客席では、ハルカたちが真剣にバトルの考察をしていた。

「どちらのトゲキッスも強いかも」

「そうね。私のトゲキッスなんか足元にも及ばないわ」

「おそらくだけど、どちらのトゲキッスの特性もくはりきり>ね」
「はりきり？」

聞いたことが無い特性なのか、サトシが首を傾げる。

「くはりきり>。攻撃が高くなって命中率が低くなる特性よ。さつきから二人は物理攻撃ばかりしているのもそのせいね。リヨウマは下がった命中率をこうかくレンズで補強してるみたいだけど」

「それって命中率をあげられる道具なのよね？」

「ご名答。よく調べてるわねえ。リヨウマのことはなんでも分かっていたい」と。青春ねえ（ニヤニヤ）

「もう！！からかわないで！！」

こっちは凄く平和のようだ。

場面は戻ってバトル中の俺たち。

「これで決めるぞ！！ウィング、ゆびをふる！！」

するとゴールドのトゲキッスが一瞬で氷漬けになった。

「ぜったいれいどかよ……チツ、悔やんでもしょうがねえ！！ウーたろっ、いわおとしだ！！」

一撃。

ダメージがあつたとはいえ一撃でウィングが倒されるなんて……流石は凶鑑所有者だな。

「流石だな！！ならば……ノヴァ、LET'S GO！！」

「ドラアアアアアア！！！！」

俺の三体目はノヴァ。典型的にはこっちが有利！！

「ノヴァ、ハイドロポンプだ！！」

「ウーたろっ、じばく！！」

はあ！？初っ端からじばくだと！？

「両者戦闘不能!!」

早い。三体目のバトルが一瞬で終わるなんて……しかも、強い。ゴルドの強さは完全に俺以上だ。勝てるかなあ……。

「ウーたろうの串い合戦だ!! マンたろう!!」

「そっちからしかけといてかよ!! キュー、LET'S GO!!」

典型的には圧倒的に不利なキューを繰り出す俺。

「なんでキューウコンを!?!」

俺の選択に流石に驚きを隠すことができないサトシ。まあ、当然だよな。

「よく見てろ。キュー、あやしいひかり」

俺が選んだ技は相手を混乱させるあやしいひかり。

「タツ!?! マンタツ!?!」

見事にあやしいひかりがヒットしたマントインは混乱してるせいで自分を攻撃してしまっている。

「しっかりしろマンたろう!! 根性だ根性!!」

「そんなモンで流れは変わらない!! キュー、トドメのはかいこうせん!!」

「コオオオオオオオオン!!!!!!!!!!」

のた打ち回っていたマントインの急所に見事はいこうせんがクリンヒット。

凄まじい命中率だ。流石はキュウコン。

「マントイン戦闘不能!!」

俺たちのバトルはまだまだ続く……

孵化のスペシャリストとの邂逅（後書き）

「また人に迷惑をかけてるのかお前は……」

B
y
シルバー

通信進化のスペシャリストとの邂逅（前書き）

「姉さんに怒られるな……」

B y シルバー

通信進化のスペシャリストとの邂逅

「いやぁ流石っスね。でも、ここからはそうはいかねえぜ！！ニョ
たろう！！」

ゴルドの五体目は水タイプのニョロトノ。

『ニョロトノ。ニョロゾの進化系。三匹以上ニョロトノが集まると
必ず怒鳴るような鳴き声で合唱を始める。ニョロトノの鳴き声によ
ってニョロゾやニョロモたちが集まってくることがある』

サトシのポケモン図鑑がニョロトノを認識して説明をしていた。
いいな、あれ。俺も欲しい。

「余所見してる場合っスか？ニョたろう、ハイドロポンプだ！！」
「余所見なんてしてねえよ。キュー、みがわり」

タッチの差でハイドロポンプがキューが生み出したみがわりに直撃
した。

あんなことを言ったが、結構危なかったんだよ。

「そんな技が通じるかよ！！サイコキネシスで本体を引っ張り出せ
！！」
「はぁ！？」

そんな予想の斜め上方向をブッチギル戦いかたなんてあるのかよ！？

「キュウウウウ……」
「キュー！？」

ニョロトノのサイコネシスによって宙に浮かぶキュー。
マズイ。ゴールドの技の予想がまったくできない。

「ハハハ！これで終わらせてやぶるあああ！！！」

突然ゴールドが草むらに飛んで行った。っていうか殴り飛ばされた？

「またお前は人に迷惑をかけてるのか……」

ゴールドを殴り飛ばした少年はゴールドと同年代で赤の長髪だ。つてまさかこの少年は……。

「シルバー……？」

「俺を知っているとはな。そんなに有名になったつもりはないんだが」

ビンゴ。

やはりこの少年はシルバーのようだ。

あのロケット団のボスであるサカキの一人息子であるシルバー。能力としては通信進化のスペシャリストってところか。

「なんでジョウト出身の二人がイツシュ地方にいるんだよ……」

「オレたちは単に図鑑の完成の為に来ているだけだ」

あいかわらずマジメな性格してんなあ。ゴールドに見習わせたいぐらいだ。

「ブルーの姐さんに頼まれてキュートなポケモンを捕まえに来させられただけなのによく言うぜ」

「もう一回草むらとのフレンチキスをプレゼントしてやろうか？」
「ゴメンナサイ」

額に青筋浮かべて拳を握りしめるシルバーを見て土下座を決めるゴールド。

なにこの上下関係。

「で、お前は今度は何をやらかしたんだ？」

「オレは別に何もしてねえよ！！こいつのヘラクロスがいきなりオレを誘拐してきたから復讐してただけだっつーの！！」

「そのまま海に捨てられてれば良かったのに……」

「聞こえてんぞコラ」

相変わらずの犬猿の仲の二人。なんで一緒に旅なんてできるのだろう？世の中には不思議がいっぱいだ。

「まあいい。とにかく迷惑をかけたな。代わりに謝っておく」

「いいっていいって。お互い様だしな」

「自分が意図的に誘拐したくせによく言うわよね」

「うんうん。お互い様どころか一方的に悪いはずなのにね」

「リヨウマって意外と腹黒いかも……」

女性陣の好感度が日に日に下がっていつているのは気のせいだろうか？

「ちょっと待てよシルバー！！オレはこいつとまだ決着を着けてないんだぜ！？」

そういえばそうだ。バトルの途中でゴールドが離脱したからバトル放棄で俺の勝ちってことになってるし。

「それなら一対一で戦えばいいだろうが。こっちは時間が無いんだ。これ以上姉さんを待たせるワケにはいかない」

「へいへい分かりましたよシスコン野郎。早く終わらせるからちよつと待ってる」

え？一対一でやるの？ということはバクフーンでも出てくんのかな……。

「というわけでオレはバクたろうでいくぜ」

「じゃあ俺はジュカで」

お互いに御三家と呼ばれるポケモンを繰り出す。
まさかこんな早くに似たようなポケモン同士で戦うことになるとはな。

「先手必勝！！バクたろう、かえんぐるま！！」

疾風

ゴールドのバクフーンの動きを表すにはこの言葉が一番いいだろう。炎を纏って回転したまま凄まじい速度で接近してくるバクフーンはまるで死を教えに来た死神のような恐ろしさを感じさせる。

「ジュカ、じしんだ！！」

バクフーンに有効なタイプは地面タイプ。

しかしそんな教科書のような対策が上手くいくはずもなく、簡単に避けられてしまった。

「かえんほうしゃ!!」

「はかいこうせん!!」

技の応酬がお互いに続く。

どちらの技も互角で決着がつかない。

どうすれば……

「ジユウ……」

うめき声が聞こえたと思い、ジユカのほうを見ると目で分かるぐらいに消耗していた。

「ジユカ大丈夫か!？」

もともと体力が多くないジユカには不利なタイプの技を受け続けることはあまりにも危険だ。

それなのに俺はずっと回避を命じずに攻撃ばかり指示していた。

「ごめん……俺の戦略ミスだ……」

「ジユカツ!! ジュツカアアアアアアアアアアアアアア!!」

「!!!!!!」

ジユカが空に向かって咆哮した途端にジユカの体の周りに翡翠色のオーラのようなものが漂いだした。

「これは……?」

「おそらくジユカインの特性であるくしんりよく>が発動したんだ

ろっ」

真面目な顔でバトルを見ていたシルバーが静かに説明をしていた。

「なんだかよく分からねえけど面白くなってきた！！バクタろう、ブラストバーン！！」

バクフーンから放たれた巨大な炎がジュカに勢いよく迫ってくる。

「俺たちの本気を見せてやろうぜ！！ジュカ、ハードプラント！！」

ドーンッッッ！！！！

お互いが放った最強技が激突し、砂煙をまき起こす。

「どっちが勝ったんだ！？」

誰かのそんな言葉が聞こえたあとに砂煙が晴れ、一匹のポケモンの姿があった……

通信進化のスペシャリストとの邂逅（後書き）

「楽しいバトルだったっすね!!」

By ゴールド

終わりの始まり（前書き）

「最終回ではありません」

B
Y
リヨウマ

終わりの始まり

「ジュカイン戦闘不能！！よって勝者、ワカバタウンのゴールド！
」

「よっしゃあああああああ！！！！！！」

負けた。完全に俺の負けだ……。

戦略、実力、経験、どれをとっても完璧なまでの敗北。

「良いバトルだったっすね！！」

「ああ……」

ゴールドの握手に応じるが全然元気が出ない。

ポケモンバトルに負けるってこんなにも悔しいことだったのか……。

「なあ、アンタ」

するとバトルを観戦していたシルバーがこっちに近づいてきた。
いったい何の用だろうか？

「シンオウに行ってみたらどうだ？」

「シンオウ？」

シンオウとはダイヤモンドパールプラチナの舞台となった地方のこ
とで、コンテストやリーグ、その他たくさんの要素がある場所だ。
だが何故そんなところに行けだなんて言うのだろう？

「あそこにはオレら以外の図鑑所有者が滞在している」

「そりやまた凄いことで」

「アンタの戦い方を見ていて気づいたんだが、アンタは自分より強いトレーナーと戦うことで一気にトレーナーとしてレベルアップするような素質があるみたいだ」

「一気に……？」

「ああ。だからシンオウに行つて自分をもう一度見つめなおし、そして自らを高めてきたらいいんじゃないか？」

一応俺のほうが年上なんだけど今回は気にしないでおこつ。

それにしてもシンオウか……考えもしなかったな……。

でも、俺にはサトシを鍛えるっていう使命があるし……。

「リヨウマさん、是非行つてください！！」

「サトシ……」

「俺はいつまでもリヨウマさんに甘えてばかりじゃダメだって分かったんです！！だから……俺は一年後のシンオウリーグでリヨウマさんに勝てるようにイッシュで鍛えます！！」

「そうか……」

まだそんなに教えてないんだけど……コイツはこんなに俺を慕ってくれていたのか。

「……………分かった。行くよ、シンオウ地方。そして俺も自分を鍛えてくる」

「私もついて行く！！」

後ろの方で俺たちの会話を聞いていたハルカが手を上げながら俺とシルバーの間に割り込んできた。

「私もリヨウマと一緒にシンオウを回りたい！！」

「ハルカ……」

「私のことを忘れてないかしら？」

ハルカの後ろからカミノが静かに歩いてきた。

まあ、コイツが黙って俺を見送るだなんて思わなかったけどな。

「私もついて行くわよ。一応、アンタのポケモンを所持してるわけだしね」

「カミノ……」

俺のわがままな旅について来るだなんて変わった連中だ。

ま。そういう俺も変わり者何だけどな。

「話は纏まったか？」

ニヒルな笑いで俺に確認をとってくるシルバー。

流星はロケット団のボスであるサカキの息子だ。

雰囲気とか目つきとかが違う。

「ああ。俺はシンオウに行く」

「そうか。ならこれを受け取れ」

シルバーはそう言う俺たち三人にそれぞれ一枚ずつ紙切れを渡した。

「これは？」

「シンオウ行きの飛行機のチケットだ。オーキド博士が用意してくれたんだがまさかオレたちのチケットまで渡すことになるとはな……」

「おいこらシルバー！！オレたちのっていうことはオレのチケット

もか！？」

「当たり前だ」

「当たり前じゃねえよ！！どうすんだよ！！このままじゃオレたちブルーの姐さんに何されるか分かったもんじゃねえぞ！！」

「大丈夫だ」

言葉とは裏腹にシルバーの足が若干震えてるのは気のせいだろうか？

「出発は明日。応援はする。オレたちの先輩と後輩にいろいろと教えてもらい教えてやってくれ。それじゃあな。行くぞゴールド」

「てめえはホントに愛想がねえよな！！じゃあなーまたどこかでー！！おい、ちょ…引つ張るな！！」

結局、ゴールドとシルバーのジョウトコンビは神速でその場を去っていった。

『シンオウ行き出発まで残り十分です。お早目に御搭乗下さい』

サトシ達が降り立った空港まで戻ってきた俺たちは飛行機の前で向き合っていた。

「気を付けてな」

普段通りの態度で俺の肩を叩いてくるタケシ。

「さんきゅ。お前の飯、美味かったぜ」

「そりゃどうも」

「リヨウマさん、短い間でしたけど楽しかったです!!」

「さんきゅなヒカリ。……………サトシのこと頼んだぞ」

「（ボンッ！）。な、ななな何を言ってるんですか！！」

「分かった！！分かったから殴りかかってくるな！！」

「もう！！…ハルカ、リヨウマさんが無茶しないようにちゃんと監視しとくんだよ？」

「分かってるって。大丈夫、でしょ？」

「カミノさん、俺はあなたという美しいトレーナーとお別れするのがとても悲しい！！」

「そういわれると嫌な気にはならないわね。大丈夫よ、私たちはいつでも会える。シンオウリーグで会いましょう？」

「はいっ！！」

それぞれが自分たちらしい見送りと見送られ方をしていつているな。さあて、後は……

「サトシ」

タケシとヒカリの後ろでずっと黙っていたサトシの帽子を掴んで上にあげる。

その下には涙と鼻水でいっぱいサトシの顔があった。

「なあに泣いてんだあ？今生の別れてワケでもあるまいし」

「だって………つぐ、リヨウマさんとの旅がすごく楽しかったから！！」

ヤバイ。俺ももらい泣きしそうになってきた。

なんて破壊力だサトシ。君は凄まじい能力を持っているな。

「まだまだ教えてもらいたいこととかたくさんあるけど………えぐ、俺は…リヨウマさんに勝つためにイッシュでの冒険、頑張ります！」

「！」
「……っ」

もう耐えられなかった。
固いと思っていた俺の涙腺から大量の涙が零れ落ちる。

「バ、バアカ。俺だってその分強くなってるから簡単には負けねえぞ？」

「そうだとしても！！俺は絶対にアナタに勝ってみせます！！」

『発車二分前です』

機械じみたアナウンスが俺らを急かす。

「急がないと乗り遅れるぞ」

「分かってるわよ。行きましょりヨウマ」

「またねー」

飛行機に搭乗していくハルカとカミノ。
スマン。あと少しだけ時間をくれな。

「俺は……お前らと一緒に旅ができて……本当に……本当に……」

タケシの作る飯はどんな料理よりも美味しかったな。

ヒカリの見せてくれる技はどんな技よりも美しかったな。

サトシの見せてくれるバトルはどんなバトルよりも熱かったな。

そんでもって……

みんなとの少しの旅は本当に楽しかったな。

「楽しかった！！またバトルしよう、シンオウリーグで！！」

俺は逃げるように飛行機に搭乗した。

そして三時間後

「ここがシンオウ地方……」

俺たち三人はシンオウ地方に降り立っていた。

「分かつてはいたけど寒いわねえ」

「どこかで上着買おうよ上着。このままの恰好じゃ耐えられないかも」

「お前らには感動とか情緒を感じる心とかいうのがないのか」

着いた途端に寒い寒いと連呼しやがって……。

「だって寒いもんは寒いじゃない」

「そうよ。寒さに耐えてまで感慨にふけらなくてもいいと思う」

「お前ら思ってたより腹ン中腐ってやがりますねえ!？」

この二人は全国の登山愛好家に怒られればいいと思う。

「ん？この気配は……」

突然カミノが空港から飛び出すように走り去っていった。

「ちょ、ちょっとカミノさん!？」

「どうしたんだ!？待てよ!!」

俺たちのシンオウ巡りは波乱の展開を迎えようとしていた。

終わりの始まり（後書き）

「良い根性しとるったいね!!」

B
Y 野生児ギャル

もう一人の転生者と野生児ギャルとオシャレボーイとの邂逅（前書き）

「It's beautiful!!」

By オシャレボーイ

もう一人の転生者と野生児ギャルとオシャレボーイとの邂逅

「待てってカミノ!!」

空港に着いた途端に外に駆けだしたカミノを追いかける俺とハルカ。カミノの奴、一体どうしたっていうんだ？

「カミノさん!!どうしたっていうの!？」

「分からねえ!!けど、結構焦っている感じはあったぞ!!」

空港の出口である自動ドアを通り抜け、外に出る。
アイツはどこだ……？

「いた!!リヨウマ、あそこにカミノさんがいた!!」

「ホントか!？」

ハルカが指差した右の方を見ると、カミノが赤い帽子をかぶった俺と同年代ぐらいの少年と話している光景が目に入った。

あの男は……？

レッドに似ているけどそれにしては雰囲気というか見た目というか…… 凄くおとなしい印象を受けるんだが……。

「おい、カミノー!!」

「あ。ゴメンゴメン!!突然飛び出しちゃって」

「別に構わねえけど……ソイツ誰？」

「あ。紹介してなかったわね。この子はリード。根っからのレッドファンで、恰好もソウルシルバーハートゴルドのレッドと同じよ」

レッドファン……ってちょっと待て。

「まさかソイツも……」

「そのまさかね。この子もアンタと同じ転生者よ」

「「ええ!？」」

転生者ってそんなにごろごろいるもんなのかよ!?

大丈夫か世界の意志!!

「この世界の転生者はこの子とアンタの二人だけだから安心しなさい」

「そうか。俺はリヨウマ。アンタの紹介もしてくれないか?」

するとリードはおびえるようにカミノの背後に隠れてしまった。
え?なに?なんか驚かせるようなことした?

「ごめんなさいね。リードは臆病なのよ」

「ぼ、僕はリードです。よろしくおねがいします……」

「ついでにリードはアンタと同年よ」

同じ年なのは納得できるけどコイツのおびえようはなんだかなあ……。

「豆情報だけど、リードのこの世界での立ち位置は最強のポケモントレーナーね」

「「最強のポケモントレーナー!？」」

カミノの信じられない言葉に驚きを隠せない俺ら二人。

つつーかさつきから驚きぐらいしか反応見せてないよなハルカ。

「最近までシロガネ山の頂上に籠ってたハズなんだけど………ねえ

リード、どうして下山したの？」

「イ、イエローと一緒に冒険しようって誘ってきたから……ごめんなさいごめんなさい!!」

「どうして謝ってんだよ……」

「最強のポケモントレーナーにはとても見えないかも……」

なんだコイツ。すっげえ弱そうなんですけど。

『あ!!見つけたったい!!』

『ちよつと落ち着きなつて!!』

すると町のほうから青いバンダナの少女と赤い帽子の少年が勢いよくこちらに走ってきた。

あれってまさか……。

「げ。お兄ちゃん……」

ハルカが苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。
つてお姉ちゃん!?

「ん?おお!!ハルカだ!!こんなところでなにしてるんだい?」

「へえ……この子がルビーの妹さんね……」

「はあ!?お前ってルビーの妹だったのか!?」

「うん。コンテストとかいろいろ教えてもらってたんだ」

「ん?ボク、自己紹介なんてしてないハズだけど……」

げ。やつちまった……つい、漫画を見たときの知識が……。

「ぼ、僕が紹介したんだよ!!」

「そうだったの？ま、いいや。じゃあ改めて自己紹介させてもらおう？ボクはルビー」

「私がサファイアになりたい！」

こいつ等もポケスペからの登場人物ってワケか……それにしても

「ハルカとサファイアってやっぱり似てるんだよねあ……」

サファイアはハル力を少しでも成長させた風な容姿だから横に並ぶと分からなくなる。

つづーかもと同じキャラがモデルだしな。違うのは服の色と目つきと犬歯が見えるか見えなかってところか……。

「そ、そういえば、イエローは？」

「イエロー先輩なら街の方で宝石を見ましたけど……」

「イエローオオオオ!!!僕にはそんな高価なものを買えるような財力はないんだってええええええええええ!!!!!!」

ポケモンのしんそく並のスピードで街に向かって走ってゆくリード。アイツも苦勞してるんだな……しかも相方はイエローか。見事なまでにバランスとれてますねこの世界。

「相変わらず毎日を全力で生きてる人だなあ。で、あなたたちは何者ですか？」

「俺はリヨウマ。リーグ優勝の為に旅をしてるんだ」

「一応、私はハルカ。ポケモン図鑑の完成の為に旅をしてるの」

「私はカミノよ。絶対に負けないトレーナーになるために旅をしているの」

それぞれの旅の目的と名前をルビーとサファイアに告げていく俺た

ち。

っていうか、カミノの旅の目的ってそれだったんだな。初耳だ。

「リーグ優勝ですか……」

「絶対に負けないトレーナーったいね……」

何故だろう？ 凄く嫌な予感と共に嫌な汗が止まらなくなってきた。
この流れはヤバイ。絶対にバトルとかそんな感じになっちまう……。

「リヨウマさんとカミノ「イヤだ」さんでいいっちゃる？ 私た「拒否する」ちとダブ「断る」ルバトルで勝負してく「他を当たれ」れないってそんなに断らなくてもいいやろ！？」

「だって無駄な争いはしたくないし」

「それでもリーグ優勝目指しとると！？」

「目指してますけどなにか！？」

「だったら腹くくってバトルしようって言っとると……！」

「バトルする理由が見つからねえから嫌だ」

「この……臆病腰抜けチビがあああああああ……！！！！！！」
「ぐふっ」

サファイアのなにげない悪口が胸に深く突き刺さる。

チビって……好きでこんな身長ってワケじゃねえのに……。

「そのカミノさんのほうがよっぽど男らしいったい……！」

「（ブチィー！！）上等だコラアアアアア……！！！！後で後悔すんなよおおおお……！」

「ごめんハルカ。止められなかった」

「いいわよ。私だってリヨウマが戦ってるのを見るの好きだから。」

お兄ちゃんの腕前も見れるワケだし」

「そんなに強くないからね。ボクは美しさを追求するコーディネーターだから!!」

「ああ……また変なスイッチ入っちゃったかも……」

「ボクが求めるはく美>!!強さよりも美しささえあればこの世では絶対的な立ち位置を得る!!」

「あーはいはい」

「それなのにサファイアは強さ強さ強さ!!強さよりも大切なものがあるとボクは思うんだよ!!どう思うハルカ？」

「あーもう、そうですねー」

「そうかい？それならよかった!!ボクは妹の教育を間違っではいなかったんだ!!」

いや、アンタの教育方針ってどんなだったんだよ。

あそこまでメンドくさそうなハルカ、初めて見たんですけど。

「使用ポケモンは二体のダブルバトル!!ハルカちゃん、審判頼んでもいい？」

「はい。頑張ります」

「カミノ、ポケモンを引き出してもいいか？」

「お安い御用よ。どれを引き出すの？」

「——と——だ」

「ふうん……そういうことね。了解」

「それでは、リョウマカミノペアVSルビーサファイアペアのダブルバトルを開始します!!」

「俺の最初のポケモンは——だ!!」

もう一人の転生者と野生児ギャルとオシャレボーイとの邂逅（後書き）

「僕はイエローのことが大好きなんです」

By リード

とりあえず三人目のキャラ紹介いつとく？（前書き）

「リョウマとカミノの自己紹介に訂正を加えておいたよ」

By リード

10月21日に改訂しました。

とりあえず三人目のキャラ紹介いっとく？

リード

年齢

16歳

容姿

若干たれ目で顔立ちは上の中。髪型はゲームのレッドと同じ。髪と瞳の色は茶色。

服装：SS・HGのレッド。

身長

163cm

体重

50kg

性格

とことん臆病。でも意志は強く一途。誰にでも優しく、他人を放っておけない。幽霊が大っ嫌い。

好きなタイプ

ほとんど

嫌いなタイプ

ゴーストタイプ

将来の夢

臆病を治すこと。

手持ち＜確定＞

ピカきち（ピカチュウ♂）

リザきち（リザードン♂）

バナきち（フシギバナ♂）

カメきち（カメックス♂）

カビきち（カビゴン♂）

ラブきち（ラブラス♂）

とりあえず三人目のキャラ紹介いつとく？（後書き）

「これからよろしくお願いします」

By リード

リヨウマ&カミノVSルビー&サファイア（前書き）

年齢としては

13歳：ハルカ・サトシ・ヒカリ・エメラルド

14歳：サファイア・ルビー・ダイヤモンド・パール・プラチナ

15歳：ゴールド・シルバー・クリスタル

16歳：リヨウマ・リード・イエロー

17歳：レッド・グリーン・ブルー

18歳：カミノ

という具合です。

リヨウマ&カミノVSルビー&サファイア

「これは……」

こんにちは、ボクはイエローです。

リードに宝石屋さんから連れ出された後街を出ると、知らない男性と女性のタッグとルビーさんとサファイアさんのタッグがポケモンバトルをしているのを発見したんです。

「リヨウマとカミノのタッグかあ……二人ともどんな実力なのかなあ？」

旅の仲間であるリードがああ二人を見て呟きました。

あれ？どうしてリードはああ二人のことを知っているのかな？

「リードの知り合い？」

「あ、イエローには紹介してなかったね。えっと……男の方がリヨウマ。僕と同じ転生者なんだって」

そう、リードは転生者。

これは、リードが全てのチャンピオンを倒した後に聞かされた真実なんです。

最初聞かされた時は信じられなかったけど、彼が普段口に使っていた言葉が聞き覚えのないものばかりだったということを思い出し、信じるようになったんだ。

これはボクとリードだけの秘密……ウフフ。

「で、もう一人がカミノといって僕とリヨウマを転生させた神様。とある事情で今は人間みたいだけだね」

「神様がそこら辺をうるちよろしてもいいのかな……」

「まああの人は自由奔放な人だからね」

「そうなんだ……」

「あ、ポケモンを出すみたいだよ」

「テッカ、LET・S GO!」

「又ケちゃん、出番よ!!」

リヨウマさんたちのポケモンはテッカニンと又ケニン。

二匹ともツチニンの進化形でどちらも特殊な特性を持っているんだ。

「RURU!!」

「どらら!!」

ルビーさんはグラエナでサファイアさんはボスゴドラ。

どちらも良く鍛えてあつてそこら辺のトレーナーには負けるのを見たことが無いぐらい強いポケモンなんだ。

「なんて美しくないポケモンなんだ……」

「ほっとけ!! テッカ、かげぶんしんだ!!」

「又ケちゃん、すなかけ!!」

凄い、テッカニンの分身が数えきれないぐらい現れた!!
しかも………速い。

「へえ、結構鍛えてあるね、あのテッカニン」

「どういうことなの?」

「テッカニンはデオキシスのスピードフォルムを抜いたポケモンの中で一番素早さが高いポケモンなんだよ。で、かげぶんしんとはそ

の名の通り<影分身>だから速さと数が比例するというワケなんだ」
「へえ……」

ボクはあんまりバトルに詳しくないから観戦のときはいつもこうやってリードに教えてもらってるんだ。
ん？ルビーさんの顔が険しくなったぞ？

「又ケニンか……ボクのRURUなら倒せるハズ！！かみくだく！！」

ルビーさんのグラエナが刃のような歯で又ケニンをかみ砕こうとする。

効果は抜群だから又ケニンは耐えられない！！

「まんまと作戦に引っかかってくれたわねえ。又ケちゃん、みがわり！！」

「なっ！！？」

ええ！？体力が少ない又ケニンでみがわりなんかしたらすぐにやられちゃうんじゃないかな！？

「そんなに心配そうな顔しなくても大丈夫だよエロー」

「でも又ケニンは体力が少ないからみがわりは危ないんじゃない……」

「又ケニンの体力は数値で表すと一なんだ」

「一！？」

「うん。だから又ケニンはみがわりをしても体力が減ることは絶対はない。いわゆる最強の盾ってヤツだね」

「最強の盾……」

「あ。グラエナの歯が抜けなくなったかな？」

リードの言つとおりグラエナの歯は鋭すぎてヌケニンのみがわりに深く突き刺さっていた。

「よっしゃよくやったカミノ！！テッカ、こうそくいどうだ！！」
「ジジッ！！」

特性のかそくで毎回素早さが上がるテッカニンのこうそくいどう。もう目でとらえられるような速度じゃなくなっていた。

「NEXT！！つるぎのまい！！」

なにか剣のような影は見えたけど何をしているのかさっぱり分からないぐらいの速度でテッカニンは動いている。
凄いな……この二人、レッドさんに善戦できるかもしれない……。

「いつまでも好きにはさせんたい！！どらら、いわなだれ！！」

テッカニンの一番の弱点である岩タイプのいわなだれがテッカニンを上から襲っていく。

でも、かげぶんしんによって回避率が上がっているテッカニンにはいわなだれが当たらなかった。

「ど、どうして一匹にも当たらんと！？」

「落ち着くんだサファイア！！焦ったら相手の思いつぽだ！！」

「気づくのが遅かったみたいね。リヨウマー！！」

「おうよ！！テッカニン、こころのめ&バトンタッチ！！」

「……なっ！？」「……」

審判であるサファイアさんにそっくりの女性とルビーさんとサファイアさんとボクの驚きの声が漏れる。

あんな回避率と素早さと命中率と攻撃力の上昇のままで別のポケモンなんかに変えられたらひとたまりもないじゃないか!!

「ゴキゴキ」

リョウマさんがバトンタッチによって繰り出したのは巨大な鋏が特徴のキングラー。

攻撃力と防御力が高くて素早さが低いポケモンだけど……。

「は、速い!？」

ルビーさんがリョウマさんのキングラーの動きを見て驚愕していた。ボクだつて驚いてるんだ。あのキングラーが目にも止まらぬ速さでフィールドを動き回っているのだから。

「今の俺のクラの攻撃は一度だけ必中だ!!クラ、ボスゴドラにハサミギロチン!!」

「ゴキゴキッ!!」

「グオオオオオオオオ!!!!!!」

「どらら!？」

一撃必殺技のハサミギロチンがヒットして地面に崩れ落ちるボスゴドラ。

強い。この二人のタッグの強さは底知れない。

「こつちも負けてられないわね!!ヌケちゃん、連続でつばめがえし!!」

「ジジジッ!!!!」

「そ、そんな!？」

ルビーさんのグラエナに何度も何度もつばめがえしを決めていく又ケニン。

あれ？又ケニンってこんなに強かったわけ？

「ポケモンの強さはトレーナー次第だからね。しかもトレーナーがカミノとなるとその強さは最強クラスかも……」

カミノさんって強いんだね！！

ボクにバトルとか教えてくれたりしないかなあ……。

「ボスゴドラ、グラエナ戦闘不能！！」

「一体も倒せないなんて絶対にありえない！！いけっ、ZUZU！！」

「どららの重い合戦ったい！！ちやも！！」

フィールドに現れる2人の切り札のラグラージとバシャーモ。

あの二体は最強の技を覚えてるから勝てると思うのだけど……。

「戻って又ケちゃん！！出番よトロちゃん！！」

カミノさんの二体目はトロピウス。

草タイプと飛行タイプの二つを持っているポケモンだ。

「クラ、バシャーモにクラブハンマー！！」

素早さが今のところトップのキングラーが巨大な鋏をバシャーモに向かって振り下ろす。

「ちやも、受け止めるったい！！」

「ダメだサファイア！！そのキングラーの攻撃力は普通のキングラーとは段違いだ！！」

「今更気づいてももう遅え！！」

ドオオオオオオオン！！！！

凄まじい轟音が鳴り響き、大量の砂煙が舞い上がった。

そして、砂煙が晴れると……地面に崩れ落ちているバシャーモの姿があった。

「バシャーモ、戦闘不能！！」

「そんな！？」

「焦りは禁物よ！！トロちゃん、ギガドレイン！！」

「クラ、ギガインパクト！！」

トロピウスのギガドレインとキングラーのギガインパクトの威力にラグラージが耐えられるワケもなく……

「ラグラージ、戦闘不能！！よってリョウマカミノペアの勝ち！！」

パン！！

「ナイス攻撃ね」

「お前こそ」

勝者の二人がお互いに笑いあいながらハイタッチをしていた。

でも、審判の女性が恨めしそうにカミノさんを睨んでるのはどうしてだろう？

ちよっと寒気がしてきたし……。

「おめでとうリヨウマー!!」

するとさっきの女性がリヨウマさんに勢いよく抱き着いた。

あ、う、抱き着く位置が上すぎてリヨウマさんの顔が胸で埋まってるんですけど……。

「ハルカちゃん？嬉しいのは分からないでもないけど抱き着く位置をもうちよつと下げたら？アナタの少しばかり豊満な胸でリヨウマが成仏しそうよ？」

「ああああああ!!!ごめん!!!大丈夫リヨウマー!？」

「我が人生に一片の悔いなし………」

「そんな恥ずかしい死に方だけはしないでええええええ!!!!!
!!!」

なにあの茶番劇。

意外と面白い人たちだなあ。

リードにも見習ってほしいぐらいの明るさだね。

「え、えつと……そのジト目は何を意味してるのかな？」

「べつつにい。リードもあれぐらい明るい性格だったらしいのにー
って思ったただだよお？」

「うぐ」

「バトルは強いけど、女の子に対する気遣いってものがリードには
欠けてるしい」

「かはっ」

あ、吐血した。

「おいおいそこらへんにしといてやれよ。リードが違う意味でヤバ

イから」

すると向こうにいたハズのリヨウマさんたちがこっちに集まっていた。

あれ？もしかしてばれてた？

「バトル、始めから見ってたんだろ？」

「はい、凄く熱くなれるバトルでした！！」

あんなバトルを見たのはレッドさんとグリーンさんのリーグ決勝戦以来かもね。

「えっと……凄く言にくいんだけど……」

ん？カミノさんが凄く困ったような顔をしているけどどうしたのかな？

「リヨウマとイエローは同じ年なのよね……」

「え……ええええええええええ！？」

「こ、こんなチビッコいのにってヒイ！？」

「それ以上イエローをバカにしたら僕のリザきちの爪が頸動脈をえぐることになるよ？」

「リード！？キャラが変わっちまってるから！！分かった！！俺が悪かった！！だから爪を押し付けなくてくださいってギヤアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

それから小一時間ほどリードによるリヨウマさん反省会が続いたんだ。

リョウマ&カミノVSルビー&サファイア（後書き）

「よし！…気ままな旅のはじまりだ！！」

BY リョウマ

新たな仲間と旅立ち（前書き）

「なんて濃いメンバーなんだろう……」

By リード

新たな仲間と旅立ち

「とりあえず?」

「ごめんなさい……」

リードによる一時間耐久説教のフルコースを受けた俺は遠目からでも分かるぐらいに衰弱していた。

怖え。説教中のリードがなによりも怖え。

「リヨウマ、とりあえず近くの街で腹ごしらえしようよ。お腹もへつて来たし」

説教中ずっとガイドマップを覗き込んでいたハルカが待つてましたと言わんばかりのタイミングで俺に提案した。相変わらず食べ物になると積極的ですねえ。

「同感ね。こっちに来てから何も食べてないもの。早く行きましょ」
「了解了解。賛成だ。よし、行こうぜ」

「あ、僕たちも行くよ」

「私たちもお腹が減ってきたったい!!」

「たちじゃないけどね……」

俺たちは一番近くの街であるミオシティのレストランに向かった。

リードの案内でたどり着いたレストランは絶品だった。
やはりプロなだけあるのかタケシの料理の数倍美味かった。

「みんなの食事も済んだところで本題に入りましょうか」

俺が水を飲みほしたと同時にカミノが話をしだす。

「はあ？本題ってなんだよ」

「私たちの旅の予定についてに決まってるでしょ？計画も立てずに旅をするつもり？アンタバカなの？バカなんですよ？」

「まだ何も言ってるエだろうが！！しかも続けざまに罵倒してんじやねえよ！！そしてハルカ！！話の途中にさらに注文を取らない！！」

俺の言葉にビクウ！！とあからさまな反応を見せるハルカ。

さっき信じられないぐらいの量を完食したくせにまだ食うつもりかこの小娘は。

「しょ、しょうがないでしょ！！まだ満腹じゃないんだから！！」

「ツンデレみたいにセリフを吐くな！！しかも満腹になる必要が感じられん！！」

「腹八分目なんて信じられないかも！！」

「知りませんから！！アナタの言い分なんて知りませんからあ！！」

白熱していく俺とハルカの意味不明な言い争い。

「ちょ、ちよつと二人とも落ち着いて……」

「リード（さん）は黙ってる（て）！！」

「はい……すいません……僕が悪いんです。生きててごめんなさい……」

拡がっていくカオス。

どうしようかこの状況。後戻りできるかなあ？

「ちよつと黙れ二人とも。それ以上無駄な時間を作るってんならぶつ飛ばすぞ」

「「ごめんなさいカミノさん。私たちが悪かったです。許してください」「」

こっわ！！今のカミノの目には光どころか何も映ってなかった気がするぐらい怖かった！！

「ったく、すぐに脱線するんだから……とにかく、私たちはこれからシンオウを回るワケなんだけど……リード、アンタも一緒に来なさいな」

「ええ！？なんで僕が！？」

「アンタ、臆病を治したいって言ってたじゃない。だから一緒に旅をしつつ、アンタの臆病を治していくってことで。リヨウマとも気が合いそうだし」

確かに長旅において男一人というのにはなかなか辛いものがあるからなあ。

一人でも話せる同年代の仲間が欲しかったところだし。

「うーん……」

「分かりました。ボクとリードもカミノさんたちの旅に同伴します」「ちよつと待ってイエロー！！僕の人権とか僕の考えとか一切合財無視して決めるのだけはやめてほしい！！」

「だってリードに考えさせたら日が暮れちゃうよ。だからボクが決めたの」

「それはそうだけど……」

そうなのかよオイ。考えるだけで日が暮れるってどんなだよ。

「ボクたちはここでお別れするとするよ」

「リーグの為に修行しなくちゃいけないしょうがないっちゃん」

「そう。分かったわ」

「頑張れな」

「次はアンタらには絶対に負けんつたい!!」

そう言い残して店からダッシュで飛び出すサファイア。
アイツマジで14歳? 凄く足が速いんですけど。

「え!? ちょ!! 待ってよサファイアアアアア!!!!!!」

必死にサファイアの後を追うルビー。

アイツ年齢が上がってから苦労人になってないか?
漫画のときよりも苦労してるような気がするし。

「とにかく今日はポケモンセンターで休みましょ」

「そうね。リヨウマ、部屋は男女別でいい?」

「別にいいぞ。俺には異性と二人きりで一晩過ごせる自信が無いからな」

「それはどっちの意味でなの?」

「勿論、理性が耐えられないって意味だ」

「そうだと思ったけど……」

「リヨウマさんって意外と天然?」

「そうなのよ……私の気持ちにも気づいてくれないし……」

「何か言ったか?」

「別にイ」

ハルカのやつ、いきなり不機嫌になったけどどうしたんだ?
ま、気にしてもしゃあないか。

「じゃあ早く行きましようか。日も暮れてきたことだし」

俺たちは店を後にし、ポケモンセンターに向かった。

ポケモンセンターでポケモンたちの体力を回復した私たちはお風呂に入って部屋に戻ってきていた。

「イエローちゃんって髪サラサラねえ」

「カミノさんこそツヤとか凄いですよ」

黄色い髪の二人がお互いの髪を褒めあつてる。
どっちも同じぐらい綺麗な髪だと思っけどなあ。

「で、ハルカってリヨウマさんの彼女なの？」
「ブツ」

何気なく外を見ていた私はイエローの一言に思わず吹き出してしまった。

「な、ななななななな何を言ってるの!？」

「だってハルカとリヨウマさんって結構仲がいいから」

「いやいやいやいやまだそんな関係じゃないわよ!！」

「ハルカちゃん、まだってことは後々はあ？」

カミノさんが獲物を見つけた肉食獣のような顔でにやけている。
相変わらずドSですねカミノさん。

「そ、そりゃあ私だって?その……男と女の関係にはなりたいたいと思
つてますけど……」

「暴露が速いですね」

「それがハルカちゃんの良いところなのよん」

「でも……リヨウマはちつとも私の気持ちに気づいてくれないから
あ……」

「何かスイッチ入りましたけど？」

「兄のルビーに似てるわね。変なところが」

「そうだ!ー!リヨウマが全然私の気持ちに気づいてくれないから私

「がこんなに苦労するんだ!!」

「苦労してるんですか？」

「いや、そこまでしてないと思うんだけどなあ……」

「キ、キスまではいかにしないしろハグぐらいしてくれてもいいじゃない!!」

「バトルの後思いつきり抱き着いてましたよね？」

「あれはノーカウントなんじゃない？一方的だし」

「よし!!今から告白してくる!!」

決めたら即行動が私の信条。

「ちょ、ちよつと待ちなさいな!!」

「そうですよ!!少し落ち着いて!!」

ドアを開こうとする私を後ろからしがみついて止めようとするカミノさんとイエロー。

「止めないで!!私にはやらなきゃならないことができたの!!」

「別に今じゃなくてもいいんじゃないかしら!？」

「女には負けられない戦いつてモンがあるのよ!!」

「今のこの状況には一切関係ないかな!？」

「待っててリョウマ!!今、私の気持ちを伝えに行きます!!」

「いいから少し落ち着いてええええええええええええ!!」

「!!!!」

結局私は二人によって冷静さを取り戻し、その日は何事もなく就寝した。

新たな仲間と旅立ち（後書き）

「平和が一番です」

By エロイ

リョウマVSリード？（前書き）

「あとがきにて宣伝がありますよ！」

By エエロー

リョウマVSリード？

「これより、マサラタウンのリード対カナズミシティのリョウマのバトルを始めるわ！」

一日宿泊したポケモンセンターのバトルフィールドでリョウマとリードが向かい合っている。

どちらも私が転生させた転生者なんだけど、すでにこの世界に慣れているようね。

まあ、リードはこの世界に何年もいるけどね。

「使用ポケモンは三体！ポケモンの交代はナシよ！……始めっ！！」

「僕からいかせてもらうよっ！いけっ、ピカきち！！」

「ピッカ！」

リードの一体目はでんきねずみポケモンのピカチュウ。

昔から思ってたけどリードのネーミングセンスはどうにかならないのかしら？

リードはね、ポケモンに『きち』ってつける癖があるの。

「ピカチュウか……だったら俺はこいつだ！！LET'S GO！
ジュカ！」

「ジュカア！！」

リョウマの一体目はみつりんポケモンのジュカイン。

リョウマのネーミングセンスは漫画のレッドとブラックに影響されてるみたい。

ポケモンの名前を一部抜くところとかね……。

「先手必勝！ジュカ、“きあいだま”だ！」
「ツカア！」

ジュカインの腕の先からオレンジ色の光の塊がピカチュウめがけて放たれた。

特攻が高いジュカインだから覚えさせてるみたいだけど、そんな攻撃がリードに通用するかしら？

「ピカきち、サンダーウォール！」
「なんだその技！？」

ピカチュウが自分がため込んでいる電気エネルギーで巨大な壁を創造した。

そう。リードが最強のトレーナーである所以はこれにある。
リードはオリジナルの技を発明しちゃうから誰も対策ができないの。

「ジュツ……ッ」
「今の技の追加効果で麻痺ったか！？」

この世界に来たばかりのリョウマがそんなことを知ってるワケもないからおそらくこの勝負はリードの勝ちで終わるでしょうね。

「もう攻撃は終わり？僕のピカきちはまったくダメージを受けてないよ？」

「チッ！まだまだあ！ジュカ、ハードプラント！」

地面から巨大な木の根っこが生えてピカチュウに突撃していく。
焦ったら負けよりヨウマ。

その技は外れたが最期、反動で動けなくなってしまう諸刃の剣。

防御と特防の低いジユカインが動けない間に技を受けて耐えきれなかしら？

「ピカきち、ボルテッカーだ」

「ピツカ！ピカピカピカピカピカ！」

迫りくるハードプラントを華麗に避けながら電気を纏ったピカチュウがジユカインに突撃していく。

「しまった！」

「焦りは負けを呼ぶよ？油断大敵ってやつだね、リヨウマ」

「ジユカイン戦闘不能！」

これでリヨウマの残りはあと二体。この状況をどう打破するつもり？

「流石は最強のトレーナー、俺の戦いがまったく通用しねえ。でも、やれるとこまで頑張って見せる！！LET'S GO！クロス！」

「ヘラッ！」

リヨウマの二体目は1ばんづのポケモンのヘラクロス。

別にピカチュウに対して有効ってわけじゃないんだけど………なにか考えでもあるのかしら？

「まずはピカチュウを取り押さえろ！」

「クロッ！」

「ピツカア！？」

素早い動きでフィールドを動き回っていたピカチュウを一発で捕まえるヘラクロス。

チート……？

「そのままインファイト！」

「な、なんだって！？」

ドドドドドドドドドド……！！

地面にピカチュウを押さえつけてインファイトを叩き込んでいくヘラクロス。

ああ……凄く嫌な光景が広がってるわ……。

「ピカチュウ戦闘不能！」

「まったく君には驚かされるよ。いけつ、リザきち！」

「グオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアア……！！！」

大地を揺るがすような咆哮が響き渡った。

リョウマVSリード？（後書き）

「今回は宣伝をさせていただきます」

「随分と畏まってるわね？」

「やかましい。じゃあいくぞ……」

作者が書いている作品を一つ宣伝したいと思います！

その作品の名は……『生徒会が奏でる天使の鼓動』！

生徒会の一存とAngel Beats!のクロス小説。

テンションはこの小説に負けず劣らず

シリアスにも手を出してみた作品となっております。

面白いかどうかは皆様次第と思いますが、是非読んでいただけると幸いです。

あ、感想とか送ってくれと嬉しいかな。

あとは評価とかね……

というわけで『生徒会が奏でる天使の鼓動』をよろしくお願いします！

「違うシリーズの紹介をここですか？普通」

「意外性についてみたんだ！！」

「あ、そう」

「はあ、まったくこれだからオバハンは」

「あ、それオレも思った」

「（ブチィ！）」

この後、作者とリョウマはカミノによって地獄と現世を行き来することになりました。

リョウマVSリード？（前書き）

「俺とリードのバトルがついに決着！」

By リョウマ

リョウマVSリード？

「グオオオオオオオオオオオオ！」

リードが二匹目に選んだのはリザードンのリザきち。

この世界に来たばっかの時にピカきちの次に捕まえた付き合いの長いポケモンね。

ゲームのレベルで表せば100。

弱点のタイプの攻撃を喰らったぐらいじゃ戦闘不能にはならないし、素早さと特攻はリードの手持ちの中で1、2を争う。

あ、ちなみにリードはこの世界に来るときにポケモンを連れてこなかったわ。

一から自分で育てていくつもりだったみたいね。

おっと長話が過ぎたわね。そろそろバトルに視点を戻しましょうか。

「リザきち、だいもんじだ！」

「グオオ！」

リザードンの口から放たれた炎がリョウマのヘラクロスに直撃して大の字の形で燃え上がった。

今の攻撃の威力はタイプ一致で1.5倍。

いくら特防の高いヘラクロスでも弱点のタイプの1.5倍の技を喰らったら一溜りもないわね。

「クロオ……」

私の予想通り、リョウマのヘラクロスは体力を一気に削られていつ倒れてもおかしくない状態だった。

今の攻撃をよく耐えたわね。でも、ヘラクロスが覚える技で炎・飛行タイプのリザードンに効果的な技はほとんど存在しないはず。リョウマはこの状況をどうやって覆すつもりなのかしら……？

「根性出せ、クロスッ！お前の根性はどんなポケモンにも負けないはずだ！」

「クオォ……クオォオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ!!!」

リヨウマがヘラク羅斯を元気づけた途端にヘラク羅斯の体から靄の
ようなものが発せられ始めた。

あのオーラはまさか……

「カミノさん、あの気みたいなのってなんですか？」

「ハル力ちゃんは初めて見るの？なら教えてあげるわ。あのオーラはおそらくリヨウマのヘラク羅斯の特性のくむしのしらせよ。体力が少なくなつたと同時に虫の技の威力が上がるといふ特性よ。でも、リザードンに虫タイプはいまひとつの威力だからこの特性が逆転のチャンスになるとは思えないのだけど……」

ここからはリョウマの腕の見せ所ね。

「クロス、リザードンの顔面にメガホーン！」

「クロスッ！」

素早さがそこまで高くないヘラクロスとしては信じられないようなスピードでリザードンの顔に向かって飛来していくヘラクロス。

リザードンに比べて体が小さいせいかヘラクロスは攻撃を次々と避けていく。

「ヘラッ！ヘラッ！クロオオオオオオオオオオ！！！」

歯を食いしばりながらも体力が尽きるまでメガホーンを直撃させていくヘラク罗斯。

一体何が彼をあそこまで突き動かしているのかしら……？

「ヘラクロスの声が聞こえます」

「イエロー？ 私たちにも何て言っているのか聞かせてくれないかしら？」

「はい。彼は『ご主人様はオレの根性を信じてくれている。だからオレはその期待に応えるのみだ!』と言っています」

「リヨウマの期待に応えるため……あのヘラク羅斯のリヨウマに対する忠義は凄いかも……」

期待に応えるためね。

ポケモンって私が思っているより心が強いのかもね。

「ク口……ク口オ……」

そして、ヘラクロスが残りの体力を使い切ってしまったのか、地面に墜落した。

「ヘラクレス戦鬪不能！」

「よく頑張ったなクロス、ゆっくり休んでくれ」

リョウマがヘラク羅斯をモンスターボールに戻す。

これでリョウマの使えるポケモンは残り一体。

それに対してリードの残りのポケモンはあと二体。

そのうち二体は体力を半分ほど消費したリザードン。

リヨウマはどんな悪あがきを見せてくれるのかしらね。

リョウマの最後のポケモンはキングドラのノヴァ。

キングドラの弱点はドラゴンタイプただ一つ。

「キングドラとはまたマニアックなポケモンだね！リザきち、ドラゴンクロー！」

上空を旋回していたリザードンが両手の爪を輝かせて一気にキングドラ目掛けて急降下した。

「……作戦通り！ノヴァ、上を向いてハイドロポンプだ！」

「大丈夫、リザきち!？」

流石はリードの手持ちポケモンなだけはあるわ。
あんなに至近距離で水タイプ最強の技を受けたにもかかわらず体力が残っているだなんて。
でも、リザードンの様子からして次の技が最後になるのは間違えな
いかもね。

「一気にカタを付けるぞ！りゅうせいぐん！」

キングドラが天高く白銀の球型のエネルギーを放出した。
そのエネルギーが上昇をやめたと同時に複数に分かれて動きが鈍く
なっているリザードンに降り注いだ。

「リザきち、まもるをしながらキングドラにおんがえし！」

「二段階攻撃！？」

リザードンはりゅうせいぐんから身を守りつつキングドラに体ごと
突っ込んだ。

おんがえしとは懐き度によって威力が変わる技の事。

何年もリードと一緒に暮らしてきたリザードンがその技を使ったら
どうなるかなんて見るまでも無かった。

「（キュ〜）」

「リザードン、キングドラ戦闘不能！よって勝者リード！」

リードは静かに片手を空に掲げて勝利を喜んでいたわ。

バトルが終わって今後の旅について話し合いをすることになった俺たちはポケモンセンターの食堂で昼食をとっていた。

「まずはヤヨイシティに行ってみない？」

「ヤヨイシティ？そんな名前の街なんてシンオウ地方にあったか？」

俺の記憶ではそんな街の名前なんて知らない。

「あるわよ？ヨスガシティと並んでシンオウ地方随一の観光名所。伝説のポケモンであるミュウを祀っている街よ」

「そんなにデカい街なのか……」

「ヤヨイシティには美味しいものがいっぱいあるそうなの！ああ、楽しみかも！」

「空気もきれいだからチュチュたちを休ませるのにも適してるみたいですよ？」

「僕も行ったことが無いから訪れてみたいなあ」

次々とヤヨイシティの情報を並べていくハルカたち。

この状況ってアニメの劇場版にいく前振りみたいになってない？

まあ、俺も楽しみだし

「オーケーだ。んじゃとりあえず目的地はヤヨイシティってことでいいか？」

『了解！』

シンオウ地方での最初の旅の目的は観光ということになった。

ヤヨイシティか……一体どんな街なんだろうな？

楽しみだ！

「ミュウは今どこにいる？」

暗闇の中に一人の男が椅子に座って呟いた。

彼の周りにはシンオウ地方の地図やとある街の様子などが映っているモニターが設置してある。

「私が十年以上探し求めてきたミュウは今どこにいる？」

すると彼の周りにあるモニターの一つに変化があった。

幻のポケモンであるミュウの姿が映ったのだ。

「見つけたぞ！これで我が悲願が達成される！待っているよ、ミュウ。お前は私が捕まえる……」

モニターにはミュウの向かっている街の名前が表示されていた。

その街の名前は『ヤヨイシティ』

ミュウを祀るシンオウ地方を代表する観光名所の一つだ。

この時は誰も予想していなかった。

まさかあの巨大な街で悲劇の事件が起こるなどとは……

リョウマVSリード？（後書き）

「アニメで言うところの劇場版だ」

By リョウマ

嵐の前のカーニバル（前書き）

「劇場版？」

B
y
リョウマ

嵐の前のカーニバル

どうも、サトシです。

リヨウマさんたちと別れた後、ヒカリとタケシと一緒に最初のジムがある街に到着してあっさり一つ目のバッジを手に入れました。

そしてそのままの勢いで三つ目のバッジまで手に入れた俺は只今昼のランチタイム中です。

「よし。今日のメニューはなんとバーベキューだ！」

「よっしゃあ——！肉だ肉だあ！」

「ああ……また太っちゃう……頑張れ私」

天気もいいし、たまにはみんなを外に出してやるか！

「よーし、出てこいみんな！」

ポンッ

景気のいいコミカルじみた音と同時に俺の旅の仲間たちが外に現れる。

因みに俺の手持ちはピカチュウとマメパトとツタージャとミジユマルとポカブとズルッグなんだ。

結構増えたからみんな強く鍛えないとな！

「それじゃあ俺のも。出てこい！」

「貴方たちも出てきていいわよ！」

二人も俺と同じようにポケモンたちを外に出していく。

二人のポケモンは以前と全く変わっていないから俺も仲が良い。

『ん？誰かと思えば仲良し気取りのピカチュウ使いじゃないか』

「あ！シューティー！俺とポケモンバトルしようぜ！」

「サトシ……今から食事なんだが」

「ごめんタケシ！でも急がないとシューティーがどつかにいなくなっちゃうからさ！」

「いいだろう。まあ、君なんかが僕に勝てるだなんて思ってもないけど」

「やってみなくちゃ分からないだろ？」

リョウマさん、俺はまだまだ弱いけど……

「シューティー、バトルしようぜ！」

貴方と戦うときまで一生懸命頑張ります！

「ここがヤヨイシティか……」

ミオシティから歩くこと三日、俺たち一行は目的地であるヤヨイシティに到着していた。

「この祭りは飛行ポケモンとトレーナーによるレースが主なようね。なんでも、昔ミュウがこの町を訪れたときに町中を飛んで移動していたという言い伝えからこの祭りが生まれたそうよ?」

カミノがこの世界に来た時に買った【シンオウ地方ガイドブック】を見ながら説明をしている。

「つていうかミュウが訪れた言い伝えって……」

「この世界にミュウなんているのか? 幻のポケモンなんだろう?」

「存在はしているけど実物に会えるかどうかっていうのは神のみぞ知る ね」

「お前は既に神様じゃねーもんねー」

「なに? 喧嘩売ってんの? 買っわよ? 百倍特価で」

「上等だ。なんならその飛行レースつてので勝負してもいいぜ? ま

あ、俺のウイングにお前が勝てるとは思わねえけどな」

「（ブチイ！）やってやるうじゃないの！後で泣き言言っても許さないわよ！？」

「ハッ！この俺が泣き言？バカ言ってんじゃねーよ。なら、負けた方は勝った方の言うことを何でも聞くってことでいいか？」

「オーケーよ！絶対に勝ってやるんだからっ！」

そして俺たちは街に来て早々、祭りに参加することになった。

コイツには借りが嫌というほどあるからな。ここで一気にお返ししてやる！

「僕たちは観戦しとこうよ。絶対に見る方が楽しいと思うよ？この二人の勝負」

「リヨウマー、頑張ってねー」

「カミノさんも頑張ってください」

リード達はそう告げるとそそくさーと観戦席を示す標識通りの道を走っていった。

『春から夏に変わろうかというこの季節、ついにやってきましたヤ
ヨイシティの毎年恒例【ミユウ祭り】！さて、今から五分後にこれ
また毎年恒例の【空中レース】が始まります！今年は一体どのトレ
ーナーが栄光を手にするのかー？』

無事に選手登録を済ませた俺とカミノは自分たちのポケモンと一緒に
にスタート地点で睨み合っていた。

「相変わらずトゲキッスが好きねえ。ジュカが泣くわよ？」

「俺はどのポケモンも同様に愛するんだよ。今回は空が飛べるポケ
モンってことだからウィングを選んだだけだ。それよりお前のポケ
モン、勝てんのかあ？」

カミノがレースに参加するために選んだポケモンはハミングポケモンのチルトリス。

俺の記憶ではそこまで素早さはなかった気がするが……

「ふっふっん」チルちゃんを舐めてもらっては困るわ。この子はアントアがチルトトのまま放っておいていたところを私が丹精込めてチルトリスまで育てたのだから！」

「その言い方やめろ！俺がまるで悪役みたいじゃねえか！」

放っておいたんじゃないかってかまってあげられなかったただけだ！

「アントアたち仲良いな」

俺とカミノが言い争いを続けていると近くでスタンバイしていた同い年ぐらいの女性が声をかけてきた。

おお……ポニーテールの美少女だ……

「む」

「どうしたのハルカちゃん？」

「リヨウマが他の女に夢中になってる気がするかも！」

「あのリヨウマに限ってまさかあ」

『別に仲良くない!』

「あははっ、息もピッタシだ♪アタシはカナローズ。カナって呼んでくれ!」

ボーイツシユな性格してんだなあ。結構、タイプだし。
つつーかカナが連れてるポケモンって……

「プテラ?変わったポケモン連れてるなあ」

「アタシの手持ちはみんな化石ポケモンなんだ。アーマルドにユレイドルにカブトプスにオムスターにトリデプス。そしてコイツだな。このプテラの名前はラテ。ラテは十歳のころからの付き合いでアタシの一番の相棒だ!」

「へえ、幼馴染ポケモンってわけね」

「俺の幼馴染ポケモンはジュカってことになるのか?」

「そうなんじゃないの?」

「で、この街は初めて?」

「ん?ああ。観光しに来たんだけど……」

どこから廻っていいか悩んでさ、と頭を掻きながら答える。
実際どこから廻っていいか分からねえし。

「ふゝん……そうだ!このレースの後にアタシが案内してやるよ!」
「いいのか?今さっき出会ったばかりの人間相手に?」

「アンタたちは悪い人間じゃないってアタシの第六感が告げてるんだ。遠慮すんなって」

「そえじゃあお言葉に甘えて。っと、もう始まるみたいだぜ?」

周りの参加者たちが次々と自分のポケモンに跨ったりぶら下がったりし始めた。

……ぶら下がってる人ってレース終盤まで握力と腕力、保てるのか？俺は無理だ。

「よし、アタシとラテの最強コンビの力を見せてやるよ！因みにアタシは前回チャンピオンなんでそこんところよろしく！」

パン！

空砲の乾いた音が辺りに鳴り響く。
レース開始の合図だ！

「ウイング！」

「キュウウウウウー！」

さて、俺たちも一位目指して頑張るとしましょうかね！

「ミュウ……すべてのポケモンの遺伝子を持つポケモン……」

暗闇に一人座っている男性が地獄の底から聞こえてくるような声で呟いた。

隣にはオムスターとラムパルドがすやすやと眠っている。

「ミュウさえいれば私は……失ったものを取り返せるのだ……」

彼の顔には焦燥と歓喜が入り混じった表情が浮かび上がっている。

「オムスター、ラムパルド。お前たちは私の大事なポケモンだ」

眠っている二匹の頭を優しく撫でる。

二匹は気持ちよさそうに身じろぎした。

「フフツ。お前たちも私と同じものを失った」

彼は視線を二匹から違うものへと移らせる。

その視線の先にあるのはミュウが映っているモニター。

彼が開発した超小型観察機が追尾しているのだ。

「ともに取り返そうではないか！我々の過去を！」

彼はとてもまっすぐでとても歪んだ存在。

そう。彼こそは最強と謳われた伝説の冒険家。

「ミュウよ、お前を捕獲するのはこのテリース」マクガーデンだ！

彼の運命は神のみぞ知る。

嵐の前のカーニバル（後書き）

「この街ではミユウを神様として祀ってるんだ！」

B
y カナローズ

決着！飛行レース

「ウイング、【しんそく】！」

スタートした瞬間に最速の技を発動してトップに立つ。
俺のウイングの【しんそく】に勝てるヤツなんていない！

「あばよー！カミノつつあーん！」

「ちょー！？待ちなさい！この勝負は私が勝つのよ！」

俺に一気に差をつけられて叫んでくるカミノ。

しかしそんなことでは距離が縮まるわけもない。

「【しんそく】【しんそく】【しんそく】【しんそく】【しんそく】ピー・ピー
エイダー」【しんそく】！！」

「どんだけ勝ちたいのよ！？」

壁にぶつかりそうになりながらも街を縦横無尽に駆け抜けていく？
俺とウイング。

俺のピーピーエイダーの残りはあと三十個！このレース一回分ぐらい余裕である！

「ハハッ！アタシを忘れてもらっちゃ困るな！ラテ、【ちょうおん
ぱ】だ！」

「うおお！？」

後ろからの【ちょうおんぱ】によってバランスを崩したウイングが
俺を振り落としそうになった。

しかも混乱しているせいで真っ直ぐ飛べなくなっている。

「トップは貰った!」

「チィ!ウイング、【ゆびをふる】!」

効果的な技が思いつかなかったたので博打技に賭けてみる。
頼む!何かいい技が出てくれ!

するとウイングの口からプテラに向かって白くて丸い物体が吐き出され、プテラに巻きついた。

これはまさか……

「【いとをはく】だとお!」?

「ナイスだウイング!これでアイツの動きは鈍くなった!この隙にトップを独走するぞ!」

ウイング混乱が治ったので速度を上げていく。

目の前には残り五キロの看板が。

よし。この調子でいけば俺の勝ちは確定!

「させないっていつてんでしょうがああああああああああ!
!チルちゃん、【りゅうせいぐん】よ!」

背後から聞こえる不吉な叫び。

おいおい嘘だろ?こんな街中で【りゅうせいぐん】ぶっ放すなんて町の人にキレられるぞ?

「ってなんじゃこりゃあああああああああああ!」?

カミノのチルタリスが放った【りゅうせいぐん】は、一列縦隊を組ん

「ふっふん」私の勝ちね。リヨウマ？」

レースが終わり、リード達観戦組と合流したあとカナに案内されたレストランで食事をとることにした俺たち。レストランについて早々カミノがそんなことを俺に言ってきた。

「うるさい黙れ」

「約束覚えてるわよねえ？」

「ハテ、ナンノコトヤラー？」

「負けた方が勝った方の言うことを聞くって約束なんだけどー」
「身に覚えがないな」

「こらリヨウマ！負けたんだから正直に参りましたって言いなさいよ！」

「そうですね。リヨウマさんは負けたんですから」

「イエローって時々毒舌だよね……まあ確かにリヨウマが負けたの

「は事実なんだしそこは諦めないとね」

「わーったわーった！俺の負けだよ！で、命令は？」

「そうねえ……」

コイツのことだからまともな命令じゃないことは確かだ。覚悟を決めて耐えないとな。

「それじゃあヤヨイシティにいる間リヨウマは私の言うことに逆らうことは許されないうことで。一緒にお風呂に入るって命令も断れないわよ?」

[illegible]

カミノの言葉に思わず立ち上がる俺とハルカ。

っていうかハル力はなんでそんなに焦ってるんだ？

「そ、そそそそそそそんなのダメだってば！」

「え？何が駄目なの？」

「そ、それは！……言えないけど」

「それじゃあ反対意見にはならないわね。というわけでリョウマはこれから一週間私の奴隷♪」

「最悪だ……まさかここまで歪んだ命令をされるとは……」

コイツの奴隷だなんて耐えられる気がしない。ははっ、俺の人生もここまでかな？

「はははっ！アンタらやっぱり面白いなあ！見るだけでも飽きないぜ」

「カナはカミノの怖ろしさを知らないからな……こいつは稀に見る生粋の悪魔だぜ？」

「あア？何か言った？」

「心の底からゴメンナサイ」

「あははははははははっ！ひい…ひい…あゝ、腹痛え」

俺とカミノのやり取りに腹を抱えて爆笑するカナ。意外と笑い上戸なのかな？男勝りな性格だし。服の露出は多いし。肩がバツサリと出ていて美脚が太ももから見えるぐらい短いズボン履いてるしってそれはカミノも同じか。つつーか二人のズボンって同じデザインだよな。しかもカナって意外と胸でさえから色っぽいし。

「リヨウマ？」

「名前を呼びながら足を踏むのは止めてくれ！別に何もしてないだろ！？」

「私はリヨウマがカナのことをじっと見つめていたから止めただけよ？」

「ハルカだつて胸はそこそこデカいだろ！？」

「リヨウマは一体どういう目でカナを見ていたの！？」

「色っぽくて美人だなーって」

「今からその両目を潰すわ。動かないでね？」

「スマン！マジでスマン！だから失明だけは勘弁して！？」

「まったくしょうがないなーと呟きながらチョコキを下ろすハルカ。ねえ、残念そうな顔をしたまま手を下すのは止めてくれない？すっごく疑いを持つちゃうからさ。」

「リヨウマは相変わらずねー。ハルカちゃんのことをどうも思っていない」

「む。それは聞き捨てならねえな。俺は別にハルカのことを子ども扱いなんてしてないぞ？」

「それじゃあどう思ってるのよ？」

「ん？えーっと……………／／／／（ボンッ）」

何故だ！？ハルカの事を頭に思い浮かべるとすっごく体が火照ってくる！なんで！？なんでえ！？

「どうしたのー？ほれほれえ、言いなさいよー」

「っ……／＼／＼」

「まったく……しょうがないわねえ。ねえカナ？ここの近くに宿とかある？今日は疲れちゃったから休みたいんだけど」

「宿？ここがすでに宿なんだけどな」

「あらそう？それなら良かった。と、いうわけで――」

カミノが妖しくニヤけて俺たちを見渡す。
うわぁ、嫌な予感がビシビシする。

「――部屋割りには私とリヨウマ、ハルカとイエローちゃんとカナとリードってことでオーケー？」

「「異議あり！」」

「却下」

カミノの非情な言葉に崩れ落ちる俺とハルカ。っていつかさっきからどうしてハルカが俺に同意してくるんだ？

「大丈夫よ。寝るとき以外は基本私とリヨウマの部屋は男子部屋として使うから。その間は私はハルカちゃんたちの部屋で過ごさせてもらうわ」

「でも！」

「大丈夫。私はリヨウマとそんな関係じゃないから」

「それならいいんですけど……」

なんだなんだ？彼女たちは一体何を話してるんだ？小声すぎてよく

聞こえないぞ？

「よしこれで解決ね♪というわけでチェックインしてお風呂にでも入りましょう。汗もかいちゃったことだしね♪」

「はい」

「お風呂……またカミノさんの差を見せつけられてしまうのね……しかも今回はカナもいるし……（キツ）」

「そんな涙目でアタシの胸を凝視するなよ。別にデカくもないんだからさ」

「その謙虚なところが私を傷つけるのよおおおおおおおおお！！！」

相変わらずテンションが高いチームですこと。
というわけでこれから入浴タイムです。

お色気シーンもあるかもな。

……………べ、別に覗こうとは思ってねえぞ！？

「あ。リヨウマとリードも女湯だからね」

「ええ！？マジかよ！？最悪だあ！！」

「ちよと待つてよ！僕も連れて行かれるの！？」

「貴方は私に凄い数の借りがあるでしょ？」

「そんなあ…………」

嫌がる俺たちを女湯に連れて行く女子一同。

カナによると今日から一週間カミノがこの宿を貸し切り状態にしてしまったらしい。どんだけ大金積んだら貸切にできるんだよ……

俺たちはこれから待っているピンクなシーンに耐えるべく念仏を唱えていた。

決着！飛行レース（後書き）

「耐える耐える耐える耐える耐える！」

BY リヨウマ&リード

理性崩壊？宿での一夜（前書き）

「ヒロインの座陥落の危機！？」

B
y
ハルカ

理性崩壊？宿での一夜

「ふふ」

カミノが鼻歌交じりで服を脱いでいる様子が痛いほど伝わってくる。

「やっぱり負けてる……」

「そんなことないと思うけどなあ」

「二人ともボクに対する嫌がらせですか？」

ハルカとイエローとカナがお互いのとある部分を比べて一喜一憂している様子も伝わってきた。

皆さんにも何故俺がこんなことを言っているのか説明しておこう。女子湯に連れてこられた俺とリードは神速で服を脱いで温泉へとダイブしてじつと固まっている。

後ろを見たが最後、自分たちの理性が崩壊してしまうと自覚しているからだ。

「リヨウマア……」

「耐えるんだリード。きつと精霊が何とかしてくれる」

「もう神頼みしかないんだね……」

「実際、その神様だった女がこの状況を作り出してるわけだけだな」
「神にすら頼めないんだね……」

ぶくぶくと温泉の中で息を吐くリード。その顔はこれからやってくる桃色の悲劇に耐えられないと門が立っているようだった。

「大丈夫、自分を信じよう。俺らは色仕掛けなんかに屈しないってな」

「リヨウマ……」

「タオルをめくるぐらいならセーフだってな」

「リヨウマはこの状況を絶対に楽しんでるよねえ!？」

「失敬な！俺は今すぐにも逃げ出したいんだ！でも俺は一週間力ミノの奴隷だから逃げられない。というわけで迷いを全て吹っ切ってみました」

「自分の欲望に素直になっちゃってるだけじゃないかあ！しかも僕は全く関係ないのにリヨウマと一緒に罰を受けたんだよ！？理不尽だ！」

「そんなこと言われてもなあ」

まあ確かにリードの言いたいことも分かる。自分は別に何かしたわけでもないのに俺と同じ罰を受けるのに納得がいかないというワケだろう。俺だってこんな罰受けたくないしな。

『お待たせ♪欲情してたかい？少年たち』

「「!？」（バツ!）」」

後ろから聞こえてきた声に思わず振り返る俺たち二人。なんだかんだ言っても俺たちは思春期の16歳。裸の女がいたら見てしまうのはしょうがないだろう。

「……………リード……」

「……………やっぱり欲求に逆らうなんてダメだよな」

「俺の目を見て言わんかコラ」

ニヤニヤしたまま言っても説得力無いぞ。

と、そんなことを言っている俺だが今の力ミノを見てすでに限界を

迎えそうになつて居るのも事実だ。

元からスタイル抜群のカミノがタオル一枚で自分たちの前に突っ立っているこの状況。女の裸の免疫のない俺とリードはただただ理性を保つのに精一杯の状態だ。

「あらあらあ？私の裸で興奮してるのかしらあ？」

「何を言つてんだ？そんなことがあるわけないだろ？」

「視線が私の胸に向いたまま動いてないその状態でよく言うわよね」

だつて目の前に青少年の夢である巨大な双丘が存在してるんだもんさ。

見るなという方が無理だつーの。

「それじゃあ入るわね。……あゝ、生き返る」

ワザとだろうなこの女。俺とリードの間にわざわざ入ってくるなんて。しかも温泉に入ったことによつてタオルの上の部分が揺らめいて見えてはいけなところが見えそうな状況になつて居る。

「（リヨウマ！僕には辛すぎるよ！）」

「（耐えろ！耐えれば明るい未来が待つて居るはずだ！）」

アイコンタクトで理性を保とうと試みる俺とリード。頼む……あと少しでいいから保つてくれ……

「ちょ、ちょっとカミノ！？一体なにやつて居るの！？」

「リ、リードには刺激が強すぎますって！」

「あはは……まさかの展開に驚きが隠せねえなこりゃ」

遅れてハルカ達三人が入つてきた。

しかし俺とリードにはそんなことよりも最大の壁が立ちはだかることになる。

「「（うおおおおおおおおお！？こ、ここは楽園か！？）」「

一糸纏わぬ姿のハルカとイエローとカナ。そこそこ胸が大きいハルカは恥ずかしそうにタオルを体に押し付けているせいでその双丘が形を変えて俺の理性を根こそぎ持っていこうとしている。リードはイエローの姿を見て鼻を抑えて蹲っている。おそらく体から込み上げてくる赤い衝動に耐えているのだろ。頑張れ。それにカナもヤバイ。至福の時の恰好も結構際どかったがタオル一枚になるともう直視できないほどにヤバイ。タオルで胸を隠してはいるがカミノと同じぐらいの大きなのでタオルからはみ出そうな錯覚に囚われてしまう。ああ……あのタオルを盗ってみたい……

「んじゃアタシ達も入ろうぜ」

「あゝ！気持ちいいー！」

「体が温まりますね」

何故か俺とリードの近くに腰かける三人。その光景は夢にまで見たハーレム状態なのだが、結構きついものがある。本当に耐えられるかな？俺たち。

「お、俺を体洗ってくるよってうわあ！？」

「え？きゃあ！？」

「ええ！？う、うにやあ！？」

バsshャーン！

慌てて温泉から出ようとしたせいでカミノとハルカを巻き添えにし

てその場に倒れてしまった俺。

「イテテ……」

ゆっくりと顔を起すが目の前には壁が拡がっているだけ。何故か両手に柔らかい感触が伝わってくる。あはは……まさかね……

「リヨウマは意外と大胆なんだな」

おそろおそろ自分の両手を見ると、そこにはカミノとハルカの胸を鷲掴みにしているマイハンド様があった。

フニフニ

「「ひ、人の胸を揉んでんじゃないわよおおおおおおおおお
おおおおお！！」」

「わ、わざとじゃねえってぐはあっ！？」

顔を真っ赤にしながら俺の顔面にメガトンパンチ級の鉄拳を食らわせた二人。

俺はその威力に耐えきれずに気を失ってしまった。

「——ん？ここは……っ!？」

そう言えばさつき意識を刈り取られたなあと頭に浮かべようとした瞬間に俺の頭は混乱することとなった。俺は今、宿のベッドに寝かされているのだがその隣でカミノがすやすやと眠っているのだ。隣のベッドというわけじゃない。同じ布団で寝ている状況だ。

「……寝ている時の顔は可愛いじゃねえか……」

普段は人を小馬鹿にしたような顔で俺を見てくるから気づかなかつたがカミノは絶世の美少女。

こうやって無邪気に寝ている姿を見るととても元神様だとは思えないほど可愛い顔をしている。

つつーか近えよ。しかも俺を抱き枕と間違えてるのか結構力こめて抱き着いてきてるし。ああ……このままじゃ起きれない……

「おい、カミノさーん？起きろー」

「ん……」

「っ!？」

そこまで眠りが深くないのか身じろぎするカミノ。そのせいで俺とカミノの顔の距離がさらに短くなってしまい今では指二本分ぐらいの隙間しかない。ヤバイ！この状況はいろいろとヤバイ！

「すう……すう……」

「はぁ……ま、いつか」

起こしても起きないのならこの普段は見られないカミノの寝顔を堪能させてもらうとしようかね。

……長いマツゲが顔に当たってるけど気にしない方向で。実際は胸とか太ももとか男としては夢のような部分が密着してるのでこれでも結構理性保つのに必死なんですよ？

「……リヨウマぁ……」

「なぜに俺の名前？コイツ夢の中でも俺を弄ってんのか？」

俺はどこにいてもカミノにいじられる存在なのかよ、と動けないながらも涙を流す。あり得ねえだろそんな人生。

「……また、バトルに負けてるじゃない……」

「ほつとけ。別に毎度毎度負けてるわけじゃねえ」

寝言だから悪意がない分厄介だ。コイツが俺に抱いている印象はバトルが弱いトレーナーっていう印象なのか？確かに俺はそこまでバトル強くないしカリスマ性もないけど……

「……つたく、しょうがないわねえ……本当に私がいないと何もできななんだからぁ……」

「お前は俺の母親か何かがよ」

「すう……すう……（ニヘラ）」

「一体どんな夢見てんだよ。コイツがにやけるような夢って……まあいいや。俺もねーっと」

疲れていたのか俺の意識はすぐに途切れることとなった。

「（あゝ！ やつと寝てくれたよこのバカ！）」

リヨウマが二度寝するまでの間、寝たふりを続けていた私だけでもうそろそろ限界だった。

かなり微妙なタイミングだったわね……

「リヨウマの方こそ寝顔は無邪気じゃない」

こんなバカのことなんかどうでもいいと思っていたのに最近の私はちよつと変。

ハルカにはああやって言っただけで本当はリヨウマのことが何故か頭

から離れないの。

普段から言い争いばかりしてるけどどちらも本気で言い争ってるわけじゃなくて一種のコミュニケーションのように争っているだけ。これは予想だけどリヨウマは私の事をちゃんと信用してくれてると思うの。

私だってリヨウマの事を信用してる。だってリヨウマと話してるときは心がぼーっとなって幸せな気分になるんだもの。こんな気持ちを抱くようになったのはいつからだったかしら？一緒に旅を始めてからそんなに経ってないのにもうすでに分からなくなってる。

私は元々神様だからリヨウマのことはよく知ってる。

どんなときでも周りを明るくしていたリヨウマ。

これを言ったら怒られると思うのだけどリヨウマが死んだのは事故なんかじゃない。

一緒の世界で過ごしてみたいと考えた私がリヨウマを事故に遭わせたの。それで私の願いはなかったのだけど、私の我が儘にブチ切れたゼウス様が私の神としての称号を剥奪したのね。まあその後私をこの世界に連れて来たゼウス様はやっぱり優しいんだなあとは思ったけどね。

フフッ、私にしては長く話しちゃったわね。もう寝るとしましょう。

「おやすみ、リヨウマ」

チュッ

無防備なリヨウマの頬にキスをする。

マウストウマウスは貴方から　ね♪

私はそこで意識を手放した。

理性崩壊？宿での一夜（後書き）

「フッフ、実は私の方が人気があったり？」

B
y カミノ

驚愕！？現れた幻のポケモン（前書き）

「みゆ？」

B
Y
ミ
ユ
ウ

驚愕！？現れた幻のポケモン

「……………」
「……………」

温泉騒ぎから一夜明けた今日、みんなで朝食を取っているときにハルカが俺の頬にあるキスマークを発見。朝食後に何故かカミノと一緒に正座させられているという状況だ。

「………… 昨晚のことを詳しく説明してもらいましょうか？」

背後に修羅像を君臨させたハルカが口の端をひくひくとさせて俺たちに疑問をぶつける。

俺だって状況が飲み込めなくて混乱してるのに……

「………… 気絶した後に目を覚ましたらカミノと同じ布団で寝ていた」

「歯を食いしばりなさいカミノ」

「待つて！？ねえ、待つてよ！？これにはジョウト海溝よりもふっ

つつつかあ——理由があつて」

「問答無用！カミノは別にリヨウマのことをどうも思っていないって言うてたじゃない！？」

「そ、それはそうだけど…………」

反論できないのか図星なのか黙り込んでしまうカミノ。
つつーかさあ

「お前ら一体なんのこともめてるんだ？」

「………… リヨウマがまさかここまで鈍感な奴だったとは…………」

「流石の僕でもビックリだね」

「ハルカとカミノさんが可哀想です……」

何故か俺の株が世界恐慌並に大暴落している気がする。

「……………リヨウマの鈍感さには今更突っ込まないわ」

「おいコラ待たんかい」

「そんなことよりカミノの件よ！なんでリヨウマと一緒に寝てたの！？そしてリヨウマのほっぺたについてるこのキスマークは一体なに！？簡潔かつ明確に説明してもらおうよ！？」

「ハ、ハルカちゃん落ち着いて　ね？あ、ほら！あそこにミュウがいるわよって……え？」

「そんな冗談が通じるワケないでし

——！？」

カミノがハルカの気を逸らすために何気なく窓の外を指差した。しかし俺たち全員はその方向を見た瞬間に自分たちの時が止まったかのような錯覚に陥った。

「ミュ……………ミュウ！？」

「えええええええええええ！？な、なんだそりゃああ！？」

「あはは……………まさかアンタ達といるだけでミュウに会えるとは思ってもいなかったぜ……………」

「は、初めて見ました！これがミュウですね！？」

「しかも色違いだね。ピンクじゃなくて水色だ」

もうすでに珍しいとかめつたに会えないとかを通り越して奇跡じゃねえのっていうぐらい俺たちは驚愕に顔を染めていた。っていうかミュウの色違いって水色だったんだな。初めて見た。

「みゅー」

ポンッ！

「へ？」

……今の状況をできるだけわかりやすく伝えようと思うがあまりにも混乱しているので頑張って理解してほしいと思う。

突然現れた色違いのミュウがカナに近づいたかと思ったら、カナが磨いていたゴージャスボールの開閉スイッチを押して自分から捕まってしまうた。

生前どころか人類初じゃね？と疑問符を浮かべてしまうこの状況は一体どうやって理解すればいいだろうか？

「……………えーっと……………ミュウ、ゲットだぜ？」

「そりゃそんな反応しかできねえよなあ……………」

偶然磨いていたゴージャスボールに偶然現れたミュウが偶然自ら捕獲された。

人に話しても『はあ？』と言われてしまうくらい非常識な出来事がついさつき自分たちの目の前で起きていたのだから口から出てくるのは呆れと疑問の言葉だけだろう。

「す、すごいですねカナさん！ミ、ミュウを捕まえるだなんて！」

「そ、そうね！う、羨ましいかも！」

「二、ニクネームとかつけないの？も、もうアナタのポケモンなんだし！」

「……………それ以外にもツツコムところはあるんじゃないかな？」

引き變った笑顔で大量の冷や汗をかきながらも頑張って口から言葉

を発している女性陣と冷静に三人にツツコミを入れているリード。
まさか一匹の幻のポケモンの登場でこんなに混乱することになるう
とは……流石はミュウだな。

「ニツクネームかぁ。うーん……あ！」

「何か思いついたか？」

「ああ！」

心の底から嬉しそうにニカツと笑うカナ。まあ、ミュウを捕獲でき
たことが嬉しいんだろう。偶然だけど。

「コイツの名前は今日から【エアー】だ！」

「……まさかとは思うが色が空の色だからエアーとかいう理由じ
やねえだろうな」

「………そ、そうだよ！その通りだよ！なんか文句あんのか！？」

「んにゃ別に」

「なんだよそれ………」

朝っぱらからいろいろとありすぎたせいでこの場にいる全員が心底
疲れたような表情をしているのが見て取れた。まだ朝だけど。

「なあ。今日はもう宿で過ごすってことでいいか？」

「………賛成」「………」

まさかの一日中室内生活を余儀なくされた俺たちはふらふらとした
足取りで自室に戻っていった。

私たちが自室に戻った途端にカナがミュウ……いや、エアールをボールから出して自分の膝の上に着地させた。

「みゅ？」

「……………やべえ。可愛すぎるぜコイツ」

「この無邪気そうな表情が保護欲をくすぐりますよね」

「さ、触ってもいい！？」

「いいんじゃないの？ エアール、ハルカが触りたいそうだ」

「みゅっ」

エアールが自分から私の胸に飛び込んできたので頭を優しく撫でてみる。

ツルつとしてるわけでもなくワサツとしてるわけでもない。不思議な感触だ。

「言葉で表現できない気持ち良さね。一生触っていたいかも……………」

「ボ、ボクにも触らせて！」

「みゅ？ みゅっ」

「ふわぁ……………」

子供の様に顔を輝かせてエアールの感触を楽しんでいるイエロー。や

っぱり可愛いポケモンって正義よね。

「ん？リードは触らなくていいのか？」

そつえばさつきからリードが一言も喋ってないことに気が付いた。
疲れちゃってるのかな？

「あはは……僕はちょっとミュウが苦手なんだよ……」

「なんで？こんなに可愛いのに？」

こんなに可愛くて愛想が良いポケモンが苦手だなんて信じられない
つ。

「……………幼いころにミュウの【テレポート】に巻き込まれてシロ
ガネ山の頂上に置き去りにされたことがあるんだ……」

「それは確かにトラウマものね……」

「っていうかよく帰ってこれたな」

リョウマとカミノに聞いた話なんだけど、シロガネ山は本当に強い
トレーナーしか昇り降りできないくらい凶暴なポケモンが住んでい
るらしい。幼い頃って言うぐらいだからポケモントレーナーになる
前だと思つし、リードもそんなに強くなかったはず。

「ちょうどリザキチがリザードンに進化してね。……………置き去りに
されて三日経った日の事だけど」

「アンタ本当によく生きてたなあ！？」

「雑草とかバグに入れっぱなしだったお菓子とかで空腹を凌いで
リザキチの炎とピカキチの電気で寒さをしのいでた」

「もはやそれは小さい子にできるサバイバルレベルを超えてるんじ
ゃない！？私ですら真似できないかも！」

「しかも寝ようとしているところにバンギラスとかゴローニヤとか
 いろんな凶暴なポケモンに襲われそうになるし……」

「もうアンタはカントー地方民栄誉賞貰ってもいいと思うぜ？子供が一人でシロガネ山を踏破するなんて前代未聞だろ……」

「いや踏破以前の問題だと思いますよ？」

あはは……。リードが最強のトレーナーになることができた理由が
ちよつと分かった気がしたかも……

「以上の事から僕はミュウのことが苦手なんだ」

「……確かに、そんな目に遭ってるなら苦手になってもしょうがねえよな」

「……リードに激しく同情するかも……」

「さ、流石はリードだね！」

「ずん」

[illegible]

「みゆ」
♪

「カミノ、さっきのミュウについてどう思う？」

部屋に戻って帽子をバッグの上に置いたすぐ後に髪を弄っていたカミノに尋ねた。

「……はつきり言っただけじゃないわね。ミュウがカナのポケモンになったのは偶然だったとして、こんなタイミングで現れるのはおかしいもの」

「だよなあ」

幻のポケモンは人生で一度見られたら凄く幸せな人間　と言われるぐらい希少な存在だ。

なのにそんなポケモンが自らを祀っている街にひょこつと現れるだろうか？

「……お前はあのミュウがどうしてこの街にやって来たと思う？」

「これは確信のない私の考察だけど。あのミュウは何かから逃げてきたんじゃないかしら」

「逃げてきた？　一体何から？」

「自分を強制的に捕獲しようとしたトレーナーから　とか？」

「確かに……。あのミュウはただでさえ色違いだからな。売れば金

にもなるし見世物としても使える」

「……………アナタはそんなことしないわよね？」

「するかバカ。いいから話を戻すぞ。俺はあのミュウが何者からか逃げてきたというお前の考察に同意する」

「あら？珍しいわね」

「一番ありえそうな考察だったからだ。でも、俺が思つにミュウを捕まえようとしたトレーナーは一人じゃないと思う」

「どういうこと？」

「お前、気づかなかつたのか？あのミュウ、PPが残ってなかつたぞ？」

「……………は？」

「ポケモンっていうのは技のPPが無くなると動きにキレが無くなるんだ。俺の知っているミュウっていうのは素早さがそこそこあるはず。でもあのミュウの動きは俺のクラぐらいのキレしかなかった」

「それ間接的にクラを傷つけてるの？褒めてるの？」

「話を逸らすな。えーっと、どこまで話したっけ？」

「アナタが巨乳好きってところまでよ」

「そうだったな。巨乳はその柔らかさが全てであつて――

――」

ゴォン！

「ドタマカチ割るぞクラ」

「わざわざジュカを呼び出してげんこつするの止めてくれないかしら！？ポケモンの力ってアナタが思っているよりも強いのだよ！？」

「やかましい！あー、もう！この話はこれで終了！話が逸れすぎて収拾がつかなくなってる！」

「私的にはアナタが言った巨乳についての自論にドン引きしてるのだけど……………」

「ほっとけ！あー、もう！風呂入ってくる！」

「あ。私も行く。……リョウマは強制的に女湯よ？」

「畜生！！レースになんて出るんじゃないかったああああああああああああああ！！！」

俺は着替えを持って逃走を試みるがカミノに襟首を掴まれて女湯に連行された。

驚愕！？現れた幻のポケモン（後書き）

「みゆ〜」

B Y ミュウ改めエアー

混乱！？男が一人と女が二人（前書き）

「今回はヤバイ。全体的にヤバイ」

B
Y
リヨ
ウマ

混乱！？男が一人と女が二人

「あゝ、やっぱりいい湯加減ね」

こんにちは。相変わらず理不尽な目に遭っているリョウマだ。
カミノに女湯に連れてこられて同じ湯船につかっている状態と言えば状況は理解してもらえらるだろう。

「はあああああああ……」

「……隣で魂が抜けそうになるぐらいのため息吐くの止めてもらえ
る？殴りたくなるから」

「殴ってる！メチャクチャ顔面殴ってるって！」

「あらあ？ごめんなさあい」

「……テメエ後で覚えとけよ」

「奴隷が一体何をほざいているのかしらあ？」

「ぐ……」

自分で招いた一週間奴隷の罰のせいで逆らうことができない俺。
つつーか、この状況にいつまでも耐えられる気がしねえ。

「カミノさんや」

「なに？」

「タオルぐらい巻いてもらえないですかねえ！？」

俺の隣で温泉に浸かっているカミノは体にタオルを巻かずに文字通り
全裸で腰かけている。

ついでだが今の俺はカミノから目を逸らしてます。……理性が保ち
そうにないから。

「

ードにそう告げて部屋を飛び出した。

「いつてらっしゃい」というカナの声が聞こえたから戻らなくてもオーケーよね？

でも私はこの後、凄まじい光景を見ることになる。

それがあんな光景だなんてこの時は思いもしなかった……

「（頑張れ俺頑張れ俺頑張れ俺頑張れ俺！！）」

カミノが背中から抱き着いてくるこの状況を必死に耐えようと試みているリヨウマです。

年上の女性から全裸の抱擁を受けて無事でいられるほど俺の心は成熟していないだよ！悪かったな！

ふによん

「あ……」

「へ、変な声を漏らすなああああああああああ！！」

「しょ、しょうがないでしょ！？胸が押し付けられて」

「それ以上は言うんじゃない！いろいろな意味でアウトな発言だ！」

「あ……ん……ちよ、ちよっと！動かないでよ！」

「だったら抱き着いて来るんじゃないやねえよおおおおおおおおお
おおー！！なんで俺が女湯で女の喘ぎ声を聞かにならんのだ！」

「ワザとじゃないって言うてんでしょ！？」

「それ以前の問題だろうがああああああああああああ！！
つてうおお！」

「え！？きゃあ！？」

バツシャーン！

「（ガラガラガラ）ふ……………リョウマ……？それにカミ
ノも何やって——」

絶妙なタイミングでハルカが女湯に入ってきたが何故か言葉を途中で切った。

視線は俺の方を見て固まってしまっている。

「な、なななななななななななななな何やってるの二人と
も！？」

「え？」

「……下見なさいこのバカ／＼／／」

カミノに言われておそろおそろ下を見える。

俺の右足がカミノの両太ももの間に膝立ち状態になっていて大惨事
まであと一歩という状態。

俺の両手はカミノの豊満な胸を鷲掴みにしていてもうすでに手遅れ
と言った状態。

俺の顔はカミノの顔と拳一つ分しか離れていなくてこれまた手遅れの一步手前と言った状態。
総合的に見ると……

「アウトだな……」

「………なんで……」

「………え？」

「なんでいつつもカミノばかりリヨウマとの距離を縮めるの!？」

ハルカが泣いていた。

顔をぐしゃぐしゃにしてハルカが子供の様に大粒の涙を流して泣いている。

俺のせいなのか……？俺がハルカを泣かせたのか……？

「私だって……私だって……頑張ってるのに……」

「………」

「不器用だけど……必死にリヨウマと肩を並べられるように頑張っているのに……えぐ……」

遂にハルカはその場にぺたんと座り込んで俯いて泣き始めてしまった。

嗚咽が混じって言葉を途中で切ってゆく。

「なのに……ひう………なのにいつ、も、いつも………リヨウマの隣にいるのはカミノ………私がどんなに頑張っても………えぐ………リヨウマと同じ道を歩けない………」

ハルカがそんな思いで俺と旅をしているだなんて気づかなかった。だって俺は別にハルカが俺より劣っているだなんて思ってもいなかったから。

ハルカにはハルカにしかない長所がある。
俺には俺にしかない短所がある。
一人一人なんかじゃない。

「ハルカ、俺の話を聞いてくれないか？」
「……………うん……………」

「俺はハルカの事が好きだ」

「……………え？」
「でもな。それと同じくらい……………」

「……………カミノの事も好きなんだ」

「……………え？」

「俺は中途半端な人間だからこれといって長所があるわけじゃない。
だから俺には支えが必要なんだ。その支えがお前だよハルカ。お前は絶対に折れることのない心を持っている。そして……………とても魅力的な女の子だ」

「リヨウマ……………」

「そして俺はとても弱い人間だから強さが無い。だから俺には弱さを隠すための強さが必要なんだ。その強さがお前だカミノ。お前は絶対に負けないという強い意志がある。そして……………とても頼りになる女性だ」

「リヨウマ……………」

「でもどちらかを選べと言われても俺には選ぶことができない。俺は……………優柔不断だから。俺は……………ハルカもカミノも……………一人の女性として心から好きだから」

この気持ちに気づいたのは果たしていつだっただろうか？
それはおそらく……自分の弱さに気づいた時だろうと思う。
どんなに強がってもどんなに足掻いても自分は弱いと痛感してしま
った時だろう。

「俺は……自分がどうす——（ボタンッ）」

くそ……い、意識が……

「リヨウマ！？」

「ハルカちゃん！部屋まで運ぶわよ！」

リヨウマを部屋のベッドまで運んだ私とハルカはテーブルを挟んで
向かい合っていた。

「カミノはリヨウマのどんなところを好きになったの？」

「そうねえ……」

そう言えばそんなこと考えたこともなかったなあ。

「私はいつのまにかリヨウマのことを好きになっていたわ。多分だけど、このバカの優しさに惚れたのね」

コイツは他人の為に命を張れるぐらいバカな奴だからね　と苦笑しながらハルカちゃんに言った。

「それでハルカちゃんはコイツのどこが好きなの？」

「私？私はリヨウマのポケモンに対する愛情が好き。リヨウマはどんなに弱いポケモンでも絶対に見放さないし見捨てない。私は、そんなにリヨウマの心が好きなの」

「心　ね……」

ハルカちゃんらしい理由かもね。

この子は純粹で不器用だから。

「で、どうするの？」

「……そんなの決まってるでしょ？」

私とハルカちゃんはお互いにニシシと笑いあって同時に言った。

「二人でリヨウマを愛しましょう！」「」

「——ん？ここは——ってうお！？」

目を開けた途端に俺の目に飛び込んできたのはハルカとカミノの顔だった。

つつーか

「お二人さん？すつごく近いんですが……」

もう鼻は当たってるだろと言わんばかりの密着度に心拍数が自然と跳ね上がっていくのが分かった。

「……いくわよハルカちゃん」
「……うん」

え？え？一体何する気なの！？

チュッ
チュッ

「／／／／／」
「／／／／／」

ええ！？今ハルカとカミノからく、口にキスをつて――

「あ？あああああああああ！？／／／／／（プシュッ）」

状況が全く掴めない。頭がぼーっとして……

バタンッ

再び意識を失うとは……

『次はこれ以上かもよ？』
『覚悟しておいてね？』

そんな眩きが聞こえたような気がした。

混乱！？男が一人と女が二人（後書き）

「なん、だ……？これ、は……？」

B
Y
リヨウマ

災害！？街を襲う悪夢の象徴（前書き）

「街が……」

B
y
カナ

—— な、なんだよコレ……」

ただ暗いだけかと思っていた空には何かたくさんのが蠢いているように見えた。

なんだよコレ。一体なんなんだよ……

「お、おいカナ！？あれ何だ！？」

「だからさっきから一大事だって言ってるだろ！？少しはアタシの話を聞けよ！？」

思い当たる節が多すぎて反論できないのが腹立たしい。

「よく頭の中空っぽにして聞けよ！？あの蠢いているのはダークライの大群だ！それでもってあのダークライたちによって街の人とかポケモンが襲われてんだよ！！」

「……………マ、マジ？」

頭の中が本当の意味で空っぽになるのを感じた気がした。

街の異変にいち早く気付いたカミノこと私は宿を飛び出してダークライを迎撃することにした。
あのバカの寝顔を楽しんでいたから気づいたって言うのはココだけのヒミツよ？

「リョウマのバッグから勝手に持ってきたけど今は緊急時だから問題ないハズ！！ 顕現せよ！LUCALIO！！」

「（ん？主人じゃないのか？）」

この無駄に真面目そうなルカリオはリョウマのポケモンの中で一番レベルが高いポケモンなの。

……まあ今は『主人に新たなチカラを捧げるため！』とか言ってタマゴ生んだのを孵化させようとしているみたいだけど……

「今は緊急時だからアナタの主人は私よ！ルカちゃん、【はどうだん】であのダークライたちを蹴散らしてちょうだい！！」

「（何やらマズイ展開になっているようだが心得た！我が波動よ！悪を滅し、浄化せよ！【はどうだん】！！」

流石はレベル100といったところかしらね。今の攻撃で結構な数のダークライたちが戦闘不能になったわ。

「よし。このままの調子でいくわよー！功績次第じゃあ、あの

ネボスケさんに褒めてもらえるかもね」

「（それは誠か！？フ……フフフ……ハ——ハ——ハッハッハッ！——そうと分かれば我が本気を出すしかあるまいて！！雑兵どもが！！生きてココから帰れると思うなよおおおおお！！！！）」

あー……ルカちゃんが壊れちゃった……

あぁなったら当分止めらんないのよねえ……

『カミノ（さん）！！』

私が苦笑いしながらルカちゃんの戦いを見ていると普段着に着替えたりードとイエローがこちらに走ってやってきていた。

「あれ？カナとハルカちゃんとバカは？」

「カナにはリョウマを起こしてもらってる！！ハルカは何故かキューン死してた！！」

な、何よ！！べ、別に思い当たる節なんかないわよ！？昨晚のキスが原因とかじゃないんだから！！

「ダークライ……」

「厄介だね。ダークライの特性は【ナイトメア】だから眠らされている街の人とポケモンがどんどん衰弱してしまう」

「どうするのリード？ボクのポケモンじゃあの子たちを止めるの難しいよ？」

「そうかもね。でも、あれを止めないとヤヨイシティ限定みたらし団子が食べられないよ？」

「らっちゃん、【きあいだま】！！」

「アナタたち何しに来たのよ……」

「もちろん加勢のためだよ？さあ僕らの力を見せてやろう！！ピカ

きち、【雷神トールの鉄槌】！！」

「ピツカア——！！」

リードのピカチュウが上空のダークライに向かってハンマー型の雷撃を撃ち込んだ。

そして今の攻撃でほとんどのダークライが戦闘不能になったんだけど……

「——ダメね。いくら倒してもどんどん増えてキリがないわ」
「ねえカミノ。一つ質問するけどあのダークライたちは一体どこから来てるんだろうね」

「ん？それはこんなに統制のとれた動きをしているからどつかのトレーナーの場所から来てるんじゃない……あ！」

「そう。と、いうことはどこかにこんなバカなことをするトレーナーがいるはずだね？」

「でもそれが分かっても見つけられなかったら意味が無いような……」

「イエロー、僕はそのトレーナーを見つける方法を知ってるよ？」

「スマン、遅れた！！」

「起こすのに手間取った！！」

「私たちも加勢する！！」

そしてリードは宿からこつちに走ってくるバカとカナとハルカの内、バカを指差してこう言った。

「リヨウマのラティオス使えばいいじゃん」

カナに五・六発殴られた後にカミノたちのところに行ったらトレーナー探せと命令された。

「トレーナー？特徴とかは？」

「いかにも悪者って感じのヤツを見つけたら連絡しなさい」

「んな無茶な……」

「昨日の風呂の事バラすわよ？」

「誠心誠意心を込めて一生懸命任務を遂行させていただきます！！」
「それでいいのよ。それで」

はあ……まあ、街を救うためだからと割り切ろう。

「出てこいラティオス」

「（やっとボクの出番かよ！リョウマはいつもいつもウィングばかり使ってたさあ！！）」

この出てきた途端に罵倒の嵐を食らわせてくるのが俺のポケモンの中で最も探査に向いているポケモンであるラティオスだ。

「へえ、色違いのラティオスなんて初めて見たよ」

「色も違うが性格も結構歪んでるけどな」

「（……………上空から墜落させてやるのか？）」

「怖えよ！？お前一応言つとくけど俺のポケモンだからな！？」

「（ウルサイウルサイ。カミノ……………胸触つてもいい？）」

「このエロポケモンが！！いいから敵を探しに行くぞ！！」

「（えー）」

「えー じゃねえよ！！こっちは一大事なんだっつーの！！」

「（分かったよー。振り落とされるなよ？）」

「振り落とす気満々じゃねえか！！止めるよ！！今はそんなふざけてる場合じゃねえって言ってるんだろ！？」

「（ウルサイ！！早く行くんだろ！？）」

「逆ギレかよ！？そんなこと分かってんだよ！！つつーかこの無駄な時間造ったのお前だろうが！！つてうおお！？タイミングが急だなオイ！！ちよ、ちよつと！！速い！！速いつてええええええええええええええええええええええええええええ……………」

以前会った漫才大好きコンビのように言い争っていたリョウマとラティオスは凄まじい速度でダークライの大群に突っ込んでいった。

「ハルカちゃんはい追いかけていいの？」

「そう言うカミノこそ」

「私はアイコンタクトで『ここは任せた』って言われてるからね」

「私はココに来る前に『俺の帰れる場所を守ってくれ』って言われたからね」

この二人は一体何があったんだろう？ 妙に仲が良いから違和感がするなあ。

「ねえイエロー。あの二人に何かあったの？」

「同じ女性として教えてあげない」

「まあ別に絶対に知りたいわけじゃないからいいんだけどさ」

「アンタらよくそんな雑談しながら戦えるよなあ！？」

そう叫んでくるのは先日偶然捕えたエア―（ミュウ）でダークライを迎撃しているカナだ。

僕的には、ミュウでこの大軍を止めているカナが一番凄いなと思うけどね。

「そんなこと言っただって僕の手持ちは全部ダークライ迎撃に当たらせてるから僕はやることないし」

「私のバシャーモたちは街の人たちの避難所の護衛に行かせてるから私の手元にはグレイシアしかないし」

「私はあのルカちゃんに全部任せてるから」

「あの……ボクは真面目に戦ってるんですけど……」

「ただアンタらレベル高いトレーナーなんだよ！？ そんなんだからってうわあ！？」

こっちに必死にツツコミをしていたカナの真横をダークライが放った【シャドーボール】が通り過ぎた。

「こらこら。余所見はやーよ？」

「う、うるさい！！この街はアタシの唯一の故郷なんだ！！アタシが絶対を守って見せる！！ラテは空から【ちようおんぱ】！！レイとリトは避難所の護衛に回ってくれ！！スターは【れいとうビーム】で動きを止める！！マルドはルカリオと一緒に迎撃！！そして、エアーはアタシと一緒にこの街を守るんだ！！」

「みゅー！！」

…………… まあ確かにこんなシリアスな場面でふざけすぎたのはマズイよね。

「カミノ、真面目にこの災害を止めよう。僕らも一応トレーナーなワケだし」

「そうね。まだ二日間しか滞在してないけど私結構この街の雰囲気好きよ？」

「私はこの街の人を守りたい！！」

「ボクもこの街のポケモンたちを守りたい」

まあ皆ふざけてたけどこの街を守りたいって言う気持ちは持つてるからね。

表に出さないだけで。

「みんな…………」

「ほらほら手を休めない。今はリョウマが戻ってくるまで足止めに徹するしようよ」

「ああ！！」

ココは僕らが抑えておくから早く戻ってきてね……リョウマ

災害！？街を襲う悪夢の象徴（後書き）

「お前は誰よりもこの街を守りたいんだろ？——カナ」

B
Y
リヨウマ

予想外！？遂に発見、敵の所在（前書き）

「今回はなんとというか……ベタだ」

B
Y
リヨウマ

予想外！？遂に発見、敵の所在

「うーん……全くとっていいほど見つからねえなあ……」

ダークライの大群からの攻撃を回避しつつ敵のトレーナーを探しているのだが一向に見つからない。

うえっぶ……

「つつーか、スピード落とせ！！風景が見えなくなるぐらいのスピードで回るんじゃないよ！！うえ……」

ラティオスはジェット機並みのスピードを出せるらしい。

そして今は緊急時なのでこのバカが出している速度はマックススピード。

そのせいで今の俺の体は空気の抵抗と遠心力によって壊れちまいそうだ。

「（……ん？なあんだ。まだ落ちてなかったの？）」

「この災害止めたらお前絶対殴る。今決めた」

「（どうせ返り討ちだろうけどね）」

「……いいからさっさと見つけるぞ。こんなところで漫才してる場合じゃない」

「（分かってるけどさあ、いくら探しても見つからないんだからしようにないんじゃない？）」

しかし、流石にこれだけ見つからないのは逆に不自然だ。ダークライは減ることもなく増加の一途をたどっているのだからどこかに絶対に潜んでいるはずなんだ。さっきダークライの出現ポイントに行ってみただけで地面に空っぽのモンスターボールが落ちていただけだ

った。トレーナーがいらないのにボールだけが大量にあるなんて状況は一体どうやったら作れるっていうんだ……

「（どう？見当ついた？）」

「ダメだ。まったく思いつかん」

「（こつちもダメだ。まったく……伝説のポケモンであるボクにすら思いつかない方法ってどんな方法取ってるんだろっねえ）」

「もしかして雲の上から頑丈に改造したモンスターボール落としてるとかだったりして」

「（ははは。まさかあ！）」

「あはははははは！（あははははははは！）」

「————つて！空の上見てねえじゃん！！」

「（————さっきの自分を殴り飛ばしてあげたくなるよねー）」

「いいから行くぞ！確実にいるだろうから！」

「（りょーかい！振り落とされんなよー！）」

「任せろ！」

「（んじゃ、いつくよ——！！）」

手を折りたたみ、軌道を真上に変えてダークライの大群に突っ込んでいく。

「（ああ、もう！ダークライが鬱陶しい！）」

ダークライ達から【シャドーボール】とか【ダークホール】などの攻撃を避けながら雲の上を目指す俺とラティオス。はっきり言って振り落とされそっだ。握力とか空気の抵抗とかの問題で。

「（よし！突っ切った！）」

ラティオスのそんな安堵の声が聞こえたと思ったら眩しい日光が俺

の目にちくりとした痛みを与える。

雲の上は清々しいほどに晴れ渡っていて、雲の下で街ひとつ壊滅レベルの災害が起こっていることを忘れてしまいそうになるぐらいなのだが、その空には明らかに違和感を感じさせる物体が浮いていた。

「やつぱり……」

「（へえ、まさか巨大空中要塞からの攻撃だったとはねー。敵ながらあっぱれ？）」

ラティオスの戯言はシカトできるとしてもこんな危険の塊のような要塞はシカトできない。

早くカミノ達のところに戻ってこのことを報告しなきゃな。

「（あのー……リョウマ？）」

するとラティオスが妙に畏まって俺の顔を覗き込んできた。コイツにしては珍しいな。

「どうしたんだ？早くカミノ達のところに戻らねえと」

「（いやー、そのことなんだけどさ……）」

「なんだよ。さっさと言えって」

「（実はね——）」

ひゅー という音がだんだんと大きくなっていることに気づいた。それに周りの景色がだんだんと下に下にと下がっている気がする。コイツはまさか……

「（——さっきのダークライの攻撃のせいで体力が限界なんだよねー）」

轟！！という音と共に地面への急降下を始めた俺とラティオスの体。全身の毛が逆立ち、冷や汗が止まらなくなる。

「バッカヤロオオオオオオオオオオオオ！！！」

怒りのあまりラティオスに向かって叫ぶがそんなことでは落下は止まらない。

やべえ！このままじゃ地面との強烈なディープキスをする羽目になる！！

「くっ！戻れラティオス！」

「（あいあいさー）」

とりあえずラティオスが地面と衝突するのは避けることができた。けど、このままじゃ俺の体が粉々になるという未来に直面することになる。

そんな最悪な道は辿らない！

「そうだウィング！ウィングを出せば！」

アイツなら空も飛べるし速度もある。

そうと決まれば早速召喚だ！

「…あれ？…あれえ！？」

バッグがあるはずの背中に手を回すが空をきるだけ。

あれえ！？なんでバッグが無いんだ！？このままじゃ落ちちまう！
！って

「そうだったああああああああ！！バッグはハルカに預け

てるんだっ たああああああああああ！！」

あの時かっこつけて『俺の居場所を守っててくれ』とか言っ
て預けるんじゃないっ た！

「チツクシヨオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

カミノの後任の神様……俺の人生ここまでですかあ！？

俺は何もできずに人形のように地面へと突っ込んでいった。

「リザきち、【竜王バハムートの降臨】！！」
「グオオオオオオオオオオオ！！！」

リードのリザードンの体から巨大なドラゴンの形をした炎が噴き出てダークライ達を次々戦闘不能にしていっている。

「バナきち、【大天使サリエルの天罰】！！」

「バアアアアアアアアアアアアアア！！」

リードのフシギバナの背中にある巨大な花から虹色の胞子が放たれてダークライ達を毒や眠りやマヒ状態にしていける。

「カメきち、【海神ポセイドンの怒り】！！」

「ガアアメエエエエエエエエエ！！」

リードのカメックスの肩に当たる部分についている巨大な双振りのポンプから放たれた水流が蛇のように波打ってダークライたちを蹂躪していく。

「つていうかねえ……」

「アナタ強すぎじゃないかしら！？」

「いや、そんなこと言われてもね……一応は最強のポケモントレーナーの称号貰ってるわけだしさ」

「もはや最強とかいうレベルじゃないでしょ！！一方通行が必死に目指してた絶対能力者ぐらいの強さじゃない！！」

「カミノ、発言がメタすぎるって……」

イエローとハルカとカナはこの世界の住人だからか私の言った言葉の意味が分かってないようで、ダークライ達を迎撃しながらも首を捻っている。っていうかりヨウマはまだ帰ってこないのかしら？

「お、おい！あれってリヨウマじゃねえか！？」

「きゃあああああああ！？」

カナのパニックした声とイエローの悲鳴が聞こえてきた。
どうしたのよそんなに慌てて――

「――ってリヨウマあ！？」

カナとイエローが注目している方向を見るとそこには絶叫しながら墜落しているバカの姿があった。
ってそんな悠長に説明してる場合じゃない！！

「リヨウマあ――！！！」

するとハルカちゃんがリヨウマが落ちてくるポイントに向かって走りだした。
あんな高いところから落ちてくる人間を受け止められるわけじゃない！！

「しょうがないわね！！風になれ、ブレイブ！！」

「ムクホオオオオオオウクッ！！」

「ハルカちゃん乗せてあのバカ助けてきて！！」

「ムクホー！！」

流石は鳥ポケモンというべきか凄まじい速度でハルカちゃんのところにとり着くブレイブ。

「リヨウマを頼んだわよ、ハルカちゃん！」

「リヨウマあ——!!」

空からリヨウマが落ちてきてるのを見た途端に気づいたら走り出していた。

頭の中にリヨウマが地面に激突して潰れてしまう光景が一瞬だけ浮かんでしまったから。

そんな光景を思い浮かべてしまった自分が許せなかったから。

いつもリヨウマに守ってもらってばっかだった自分と離れたかったから。

「ダメ、間に合わない!!」

でもそんな私の思いは現実を変えることができない。

どんなに走ってもこの距離じゃ追いつけない。

もう、このまま好きな人を死なせることしかないっていうの……!!?

「ムクホー!」

「ってあなたは……リヨウマのムクホーク?」

「ムクホー!!」

「お願い！私をリヨウマのところに連れてって！！」
「ムックホオオオオオオオク！！」

遠くの方でカミノが小さく笑っているのが見えた。
相変わらず気の利く人ね……ありがと。

「絶対に死なせない！！」
「ホオオオオオオオオオオオオクッ！！」

パシュツ

リヨウマが地面に衝突する直前でギリギリ助けることに成功。
相当怖かったのね。リヨウマの体は汗でびっしょりと濡れていた。

「た、助かった……マジで今のは焦った……」
「リヨウマー！！」

「うわつとーど、どうしたんだ？」

「良かった……リヨウマが地面に衝突して死んじゃうかと思った……」
「……」

「（ラティオスのバカが力尽きて墜落しましたーとか言えねえなこりゃ……）」

「……？ 今何か言った……？」
「んにゃ別に。まあ……その、何だ。助けてくれてサンキューな」
「うん！！」

これで少しは成長できたのかな？

「ハルカ、とりあえずみんなのところに帰ろう。敵の居場所が分かった」

最終決戦が始まる予感が私の体を震え上がらせた気がした。

予想外！？遂に発見、敵の所在（後書き）

「私の一番好きな小説の無能力者が言ってたわ。『必要なのはカードじゃない。テクニックだ』とね」

B Y カミノ

無茶！！巨大空中要塞への道のり（前書き）

「こんにちは、カミノよ。この小説を読んでいて読者のみなさんは気になるところが無かった？アレのことよ。……まさか思い出せない？しょうがないわねえ、私が思い出させてあげるわ。リョウマのポケモンを私は一体どうやって持ち運びしてるでしょーか！答えはあとがきでね」

B y カミノ

無茶！！巨大空中要塞への道のり

「———というワケだ。ハッキリ言っただの高さはポケモンの【そらをとぶ】で辿りつけるような高さじゃない」

ハルカに救出してもらった後力ミノ達と合流した俺だったが、ゆつくりと話をする必要があるので一旦宿に戻ったというワケだ。外から爆音が聞こえてくるからおそらくまだダークライによる破壊活動は続いているのだろう。

リードによると街の人間とポケモンの避難は終わっているみたいだからケガ人は出ないけど。

「だとしてもその空中要塞に行かねえとこの災害は止めらんねえんだろ？」

「ああ。あの要塞にたどり着けないとこの街は地図から消えるだろうな」

「そんな！？な、何か手はないの！？ボクはこの街が消えちゃうなんてヤダ！」

「落ち着きなつてイエロー。リョウマはその巨大空中要塞にたどり着くための方法を思いついたからこそみんなをここに集めたんだと思う。そうでしょ？」

「理解が早くて助かる。でもな、この方法を実現するためには多くのものが必要になりすぎる。ハッキリ言って間に合うかどうか……」

「どんな方法でもいい！！この街を救えるなら！！頼む！」

椅子から降りて床の上で土下座の体制になるカナ。

おそらく誰よりもこの街が好きで絶対に守り通したいという気持ち強いカナ。

だからこそ皆の前で土下座なんて言う行動をとったんだろうな。

「頭を上げろつて。お前には土下座は似合わねえよ」

「イヤだ！リヨウマが首を縦に振るまでは！」

「だれも嫌とか言つてないだろ？俺だつてこの街を守りたいと思つてゐるんだからな」

「！それなら……」

「ああ。みんなでこの街を守るんだ。つつーわけで今から俺が考えてる要塞までたどり着く方法について話そうと思う。真剣に聞いてくれ」

皆の顔を見渡す。

それぞれが黙り込んで俺が話すのを待っている状態になったところで俺はその方法について話し出した。

「敵は雲の上で要塞の中に缶詰め状態だ。おそらく敵が自らこつちに降りてくることは無いと見て良い」

「とりあえずはダークライの攻撃だけつてこと？」

「ああ。まあコツチの方は何とかなるだろう。問題はやっぱり要塞にたどり着く方法だ。あの要塞は雲の上にあるから飛行ポケモンを使つても届かない。ならば何で辿りつければ良いでしょうかハイ、リードくん……！」

「突然だね……えつと？飛行タイプのポケモンですら届かないような高さに上るとすると、気球なんかじゃとても無理だし飛行機でも通り過ぎてしまうおそれがある。ということは……やっぱりヘリコプター？」

「こ名答」

ヘリコプターなら結構な高さまで上がれるし要塞を通り過ぎることもない。

しかしこの方法には大きな問題がある。

「まず第一にダークライが空を覆っていて雲の上が上がれない。ヘリでダークライの攻撃に耐えるなんて不可能だからな」

「一体だけならまだしも数えきれないぐらいいるもんね……」

「ああ。そして第二にヘリを操縦するヤツがいない。ヘリも持っていないがそれ以上に操縦できなければ意味がねえ」

「私ヘリ操縦できるわよ？」

「そうか。それで要塞に行くメンバーについてなんだが………

…おいカミノ、今なんつった？」

「だから私はヘリコプターを操縦できるって言ったのよ」

まさかの事実。カミノはヘリを操縦することができる！

まあたしかにコイツは元神様なワケだからそれぐらい知ってそうだけどさあ。

「カミノって操縦免許とか持ってるの？」

ハルカがカミノにそう尋ねる。

確かにハルカの言うとおりだ。元の世界だろうがこの世界だろうが乗り物の操縦には必ず免許が必要だ。

でもカミノはこの世界に来たばっかだから免許は持っていないハズ……

「……………ハルカ、私が一番好きな小説の一番泥臭い主人公はこう言ってたわ。『必要なのはカードじゃない。技術だ』とね」

「それは浜面さんだけが使える名言です！！半端なお前が安易に使っているような言葉じゃねえんだよ！」

「いやその前にこれって無免許運転だからね？二人ともいくら浜面さんが好きだからってそこを見落とさないでよ」

「リード！お前には浜面さんの良さが分からねえのか！？」

「いや、だって僕がこの世界に来る直前ではまだ浜面さんスキルア

ウトだったし……」

「そうよリード！浜面さんはねえ……愛する人を守るために超能力者を一人で倒したのよ！？無能力者なのに！」

「え？なに？なんで僕がアウエーの空気になってるの？」

浜面さんのカッコよさが分からないなんてリードは終わってると思う。

結局アニメでの出番といえは上条さんに殴り飛ばされてそげぶされるだけだったし。

「あのー……要塞の件は？」

シーーーーーーン……

イエローが呆れたようにそう言った瞬間、宿の中が静寂に包まれる。冷や汗を大量にかく俺とカミノ。

結局俺たちの会話の内容が分からなくて首を傾げているハルカとカナ。

先ほどの会話でメンタル面に大きな傷を負ってテーブルに俯せているリード。

全員が全員話が逸れているということに気づいたのは今だったりする。

「今はヤヨイシティの危機ですよね？」

『……はい』

「リヨウマさんとカミノさんはヤヨイシティよりも小説の方が大切なんですか？」

『いいえ、滅相もない』

「だったら真面目になってください」

『本当にスイマセンデシタ……』

「まったく……このメンバーはいざというときに役に立たないんだから……」

出ました闇イエロー。

目に全く光が灯っていない状態で人の精神をゴリゴリ削っていく最悪の人格。

ハッキリ言っただけ慣れることは無いと思う。

「……カナ、一つ聞いてもいいか？」

「街を救うためだ。何でも聞いてくれ！」

「この街にヘリコプターってある？」

「街の中央に一つだけヘリポートがある。でも、ダークライたちの攻撃で大破してるかもしれねえ……」

「まあとりあえずは行くしかねえな。それで、ここからが本題だ」

俺はその場にいる全員を見渡して一呼吸ついでこう言った。

「要塞には誰が行く？」

「リード！道を切り開くよ！」

「僕はそんなキャラじゃないんだけどな……」

ラッタでダークライたちを迎撃しているイエロー。

リードはその後ろからピカチュウで他のダークライたちの迎撃に当たっている。

「よし、道が開いた！リョウマさん！」

「おう！お前ら、遅れるなよ！」

『了解！』

リードとイエローが作り出したヘリポートまでの一本道を全力で駆け抜けていく俺とハルカとカミノとカナ。

結局、要塞にはこのメンバーで行くことになった。

カミノはヘリの操縦兼敵を殴りたい係で参加。

カナは街を守り隊兼敵を殴りたい係で参加。

ハルカは俺と一緒に隊兼敵を殴りたい係で参加。

そして俺は……敵を倒す係で参加だ。

………うん。結構私情挟んで参加してるよね。

「あつた！まだ無事なヘリが一つだけ！」

「よっし！乗り込むぞ！」

ダークライたちからの攻撃を避けながらヘリに転がり込む俺たち。ヘリは三人乗りで一人は立ったままでいなければならない。

「ハルカとカナは座れ。カミノは操縦席へ。俺はこの出入り口からダークライを迎撃する」

「……分かったわ」

「了解よー」

「お、おい！アンタ！危険すぎるぞ！？下手したら墜落するかもしれないねえんだ！！」

優しい性格のカナは俺の行動を必死に止めようとしてくる。

確かに失敗するかもしれない。

——けど、

「俺以外はみんな女の子なんだから座ってる。危険な役目は……俺一人で十分だ」

「なっ……」

「カナ。諦めて座りなさいって」

「そうね。リヨウマは一度決めたことは曲げないわよ？」

「けど！」

「い・い・か・ら！座ってる！」

「きゃ！？」

カナが全然言うことを聞いてくれないので無理やり椅子に座らせてシートベルトを着用させる。

……もちろん、体にできるだけ触れないようにだ。カナの服って露出多いし。

「美少女は座って俺の活躍ぶりを観察してる！」

「び、美少女！？アタシが！？」

「そうだ！お前は美少女だ！とびっきりのな！！」

「アタシが、美少女……」

「街を守りたいって言う気持ちはわかる！！だが、その気持ちだけに囚われてすべてを自分で一人で背負い込もうとするのは止める！！」

「けど……ここはアタシの故郷だから、アタシが守らないと……」
「大切な仲間のためだったら俺たちの命ぐらいいくらでも賭けてやる……」

「!?」

「お前はもう俺たちの大切な仲間だ!!外で援護してくれているリードとイエローだってそれが分かっているからあんな危険な役目を買って出してくれたんだよ!!お前は一人じゃない!!だから……俺たちを信じる!!」

「……………う、ん／／／」

よっし!説得成功!

しかし……なんだ?カナの顔がほんのりと赤く染まってるんだが、熱でもあるのかな?

「……………またライバルが増えた……」

「え?ハルカ、今何て?」

「カミノ、いつきまーす!!」

「のわあ!?!」

まさかのヘリコプター急発進。

しかも全速力で空に急上昇。

拳句の果てにはダークライたちからの【シャドーボール】の嵐。

「チー!LUCALIOから受け取ったチカラを見せるとき!!ジュカ!例のものと一緒にヘリを守れ!」

「ジュツカア!!」

ボールからジュカを出し、バッグの中からとあるものを取り出させる。

それは……………蒼白色のタマゴだった。

「生まれる時期はちょうど今！ジュカ、エネルギーを流し込むんだ！！」

「ッカアアアアアアアアアア！！！」

パリーーーン！！

ジュカが咆哮をしたと同時にタマゴが真ん中から真っ二つに割れた。そして、その中から一匹のポケモンが姿を顕わした。

「オンッ！！」

「よっし、生まれた！！お前の名は【ソウル】！！そんでもって今からお前の魂ソウルの攻撃を見せてもらっぞ！！ジュカとお前の二人で【ダブルきあいだま】だ！！」

「ジュッッッッカアアアアアアアアアアア！！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！」

一掃

そんな言葉が似合うぐらいの破壊力でダークライたちを葬り去っていた。

流石はLUCALIOの息子。特攻と波動のチカラが段違いだ。

「オン！」

すると、ソウルが俺の帽子の上に着地して腹ばいになった。

「……………まさかの定位置獲得ってヤツか？」

「オ〜ン♪」

「……………まあ、いいか」

そしてへりは雲を突っ切って要塞の前に到達する。

「これは……」

「あゝら、結構マトモね」

「あそこに敵が……」

目の前の巨大空中要塞を見てそれぞれの反応を示す彼女たち。
つつーわけ、で……

「行こうぜ。最終決戦へ!!」

俺たちは敵の待つ要塞へ足を踏み入れる。
ヤヨイシテイを守るために……

無茶！！巨大空中要塞への道のり（後書き）

「正解は……私が四人目の転生者に任せているポケモン牧場に通じるバッグを所持しているからでした」っていか新キャラ宣言ってヤツかしらね」

B y カミノ

「次章ではあの投稿トレーナーが顕れるかも!？」

B y ハルカ

危険？最終決戦までのトラブル（前書き）

「ちょ！？いやあああああああああああ！！」

B
y
カミノ

危険？最終決戦までのトラブル

「キヤアアアアアアアアアアアア！！」

「うわあああああああああああ！！！」

「バカカミノオオオオオオオオオオオ！！！」

「ご、ごめええええええええん！！！」

……出だしから絶叫で申し訳ないと思う。

今の状況を簡単に説明しよう。

ヘリコプターで要塞の真上までたどり着いた途端に敵さんからのミサイル攻撃。

それを必死に回避しながら着地を試みたがカミノの操縦ミスによって片翼にミサイルが直撃してしまつて墜落しているという状況だ。

……俺、墜落するの今日だけで二度目なんだけどなあ。

「ええい！こうなれば俺とハルカだけでも生還してやる！！！」

「さっすがリョウマ！！！」

「あれえ！？アタシはあ！？！」

「カナはプテラで何とかしてくれ！ハルカは飛べるポケモン持っていないからしょうがないんだよ！！！」

「私は！？私も飛べるポケモン持ってない！！！」

「やかましい！！そこら辺に漂つてゐるヘリの破片にでも掴まって減速を試みる！！！」

「差別！？ちょ、なんで私だけそんな扱いなのよ！？！」

「テムエの操縦ミスだからだ！！！」

「追尾ミサイルから逃げ切っていたこと自体を褒めてくれてもいいんじゃないかしら！？！」

「へーへー凄いですね！！これでいいか！？LET'S GO、ウイング！俺とハルカを乗せて要塞に降り立て！！！」

おお…… 自分の上に載っていた瓦礫の山を吹き飛ばしての登場とは…… 案外元気だな。

「…… 見捨てた俺が言うのもなんだがよく生きてたな」

「奇跡よ！！奇跡以外の何物でもなかったわよ！！っていうか、せつかくのホワイトの女主人公仕様の服が汚れちゃったじゃない！！」

「汚れるぐらいですんでよかったじゃない……」

「カミノの体ってどうなってるんだよ……」

おそらく、体は剣でできている とか 彼女の名はアーチャー と
かいう裏設定とかあるんじゃないの？

一応は神様だったわけだし。

「あ。通路見つけ」

「このイカレ男があああああああ！！私の無事よりも敵への道のほうが大事だというの！？」

「そりゃ、まあ」

「レポートで壁の中に埋め込んでやりたい……」

コイツならやりかねないなって本気で思える自分がいるのが怖い。
こんな言い合いを続けながら俺たちは発見した通路の中に入っていた。

通路に入っただのは良いんだけど、そこが最悪だった。

「キヤア——！！」

「もつとスピード上げるハルカ！！」

「畜生が！！こんなお決まりトラップなんかしかけてんじゃないよ！！」

「あははははははははは！！」

入った途端に入り口を封鎖されてダンジョンお決まりの巨大な丸い岩から逃げようぜ！的なトラップが発動。
そういうことで十分ぐらいその岩から逃げているというワケだ。

「ぜえ！ひゅー！けほつ。おえ……」

「ハルカ！一応は女の子なんだからそんな声を出すんじゃない！！」

「だ……だって！スタミナが残ってないんだもん！！」

「だったらポケモンに手伝ってもらえよ！！」

「そ、その手があった！！バ、バシャーモ！私を負ぶって！！」

「バシャーモ！！」

スタミナとスピードがあるバシャーモの背中に乗って俺たちの前を

疾走していくハルカ。

つつーか、俺もそろそろヤベエ……

「ウイング！俺を運んでくれ！！」

「キュウ！！」

飛行タイプであるウイングに乗ってカミノとカナを置いていく俺。ハッキリ言って行動は最悪だが今は状況が状況なので仕方がない。

「ア、アタシも！！ラテ！」

「ギャオオオオオ！！！」

ついにカナまでもがポケモンに乗って岩からの逃走を始める。
あれ？この状況ってなんかデジャブ……

「またあ！？また私だけ置いてけぼり喰らってない！？」

「じゃあお前もポケモン使えよ！！」

「だから私を運べるぐらいのサイズのポケモンを持ってないの！！」

「ラグラージがいるだろうが！！」

「逃げる以前の問題で潰されるわよ！！」

「だったらバッグをこっちに渡せ！！それで少しは軽くなるだろ！？」

「わ、分かったわ！！」

俺はカミノのバッグを受け取るためにウイングのスピードを落としたりカミノの横に着く。

そしてカミノのバッグに手を伸ばし――

「隙アリイイイイイ！！！」

——カミノに伸ばした腕を掴まれてウイングから落ちそうになった。

「お、おいバカ！！落ちるだろうが！！」

「誰が離すもんですか！死ぬときは一緒よ！？」

「イヤだ！！こんなシヨボーイ死に方なんて真つ平御免だ！！」

「私だつて嫌よ！！死ぬなら敵と相打ちで死にたいわ！！」

「……二人とも早く逃げないと潰されるぜ？」

「「え？」」

カナが前の方で呆れた声を出す。

背筋が自然とピンと伸び、冷や汗が大量に出てきた。
顔の血の気は引き、鳥肌がふつふつと出てくる。

そして俺たちは——

「「ウイング、【しんそく】！！」」

——逃走を開始した。

「速く速く速く！！」

「ラテ、いそげえ！！」

「バシャーモ、もつと速く！！」

あ！あそこに光が見える！！

「お前ら！あそこに出口があるぞ！！」

俺たち四人は後ろから追ってくる岩のすれすれを逃げながらも出口に急いだ。

運がいいのか、その出口は四人が一気に突っ込んでも余裕なぐらい

大きい。

しかもギリギリで岩が通れないような大きさだ。

「『いっけええええええええええええ！』」

[illegible]

出口に身を投げ出して雪崩れ込む俺たち。

背後では岩が壁に激突して粉々に粉砕する爆音が聞こえた。危機一髪だった…… ウィングのスピードが勝ってよかったよ。

『ようこそ、ミユウを導きし者たちよ』

「まさか、な」

「……あんなトラップの後に決戦が控えてるなんて……」

『早速だがここで死んでミユウを渡してもらおう』

俺たちの目の前には巨大な玉座に座っている男が一人いた。

このプレッシャー……コイツ、タダモノじゃねえな。

「お前は誰だ」

「はっはっは！！出会って早々にタメ口とは教育が成ってないな！いいだろう教えてやる。私の名はテリース＝マクガーデン。伝説の冒険家と言われていた人間だ」

「テ、テリース＝マクガーデンだと！？」

俺の隣に立っていたカナが心底驚いたように敵の名前を繰り返した。

「そんなに有名なのか？」

「テリース＝マクガーデン……すべての化石を発見し、すべての遺跡を制覇した最強の冒険家。二年前から行方不明になっていたって聞いたことがあるかも」

「んで、実はこうやって悪の道に染まってましたーってオチが付くわけね？」

カミノ、そうやって言ったら緊張感とかシリアスとか全部意味無くなっちゃうからな？

「私は悪の道になど染まっていない。私は失ったものを取り返すために立ち上がったただけだ」

「失ったもの……？」

「そうだ」

俺の呟きにテリースが相槌を打ち、続きを話し出した。

「私は十三年前、災害によって家族を失った。最愛の妻。命を懸けても守りたかった息子。そんな大切な家族を私は、たった二秒で失ったのだ」

「災害？」

「シンオウ大震災のことさ。アタシは幼かったから全然覚えてないけど。死者は十万人。行方不明者は五百人の大規模な地震だ。アタシの家も地震によって半壊した」

そんな大きな災害がポケモンの世界で起こったりするんだな。

ここはもつと平和な世界かと思ってたんだが……

「ここにいるラムパルドとオムスターも両親を失った。皮肉にも、自分たちを守つてな。お前たちに……お前たちのような若造に我々の苦しみが分かるか！？喪失感が！！ある日突然自分の大切なものが失われる辛さが！！」

「……待てよ？だったらなんでミュウが必要なんだ？すでに失っているんだから今更ミュウを捕まえたって——」

「ミュウは全てのポケモンの遺伝子を持つポケモンだ。そして……すべての技を使えるポケモンでもある」

「すべての技……」

「そうだ。私はその性質を利用して失った家族を復活させる。もちろん、ズガイトスとオムスターの両親たちもな」

復活……？確かにポケモンの技には無限の可能性があるが……死んだものを復活させる技なんてあったか？せいぜい回復ぐらいだったと思うが……

「そこのお前。今『死んだものを復活させる技なんてあったか？』と思っただろう。いいだろう、教えてやる。色違いのミュウに

だけ使える技が一つある」

「唯一の技……？」

「そうだ。その技の名は【マリアの奇跡】。自分が生き返らせたい者を五人だけ生き返らせることができる技だ」

どうやらこの世界だけのオリジナル技のようだな。

現世ではそんな技なかったし。そもそも人が死ぬということがゲームでは起きなかったし。

「だから私は色違いのミュウを手に入れる！！その女！！お前がそのミュウを所持していることはダークライたちの報告で分かっているんだ！！」

「そこだ！俺がずっと疑問に思ってたのは！！お前はどっやってあの量のダークライを手に入れた？」

倒しても倒しても減らないダークライ。

ハッキリ言ってそんなのはありえない。

なにか裏があると見て良いと思っていたんだ。

「ああそのことか。……私は行方不明と言われる前からミュウを追ってきた。それに要した時間は十四年。そんなに大量の時間があれば五万体のダークライぐらい簡単に手に入れられる」

「五万體！？」

「まさかそんなにいたとはな……」

せいぜい一万体ぐらいかと思ってたんだが……

予想外だ。つつーか、下にいるリードとイエローはダークライの殲滅に成功したのかな？

そっちはそっちで心配だ。

「さて。雑談はココまでだ。……………最終決戦とやらを始めようではないか!!」

かつて最強と謳われた冒険家とそこそこ強い四人の戦いが幕を開けた。

危険？最終決戦までのトラブル（後書き）

「その幻想をぶち殺す!!」

By リョウマ

終局！！最終決戦（前書き）

「キャラ紹介を改訂したわ。それと……劇場版の最終話&新章突入話よ」

B y カミノ

「<カイ・R・銃王>さんからの投稿トレーナーが登場しているぜ
」

B y カナローズ

終局！！最終決戦

「オムスター、『ハイドロポンプ』だ」

テリースがそう命令するとオムスターの口から俺たちに向かって凄まじい威力の水流が襲い掛かってきた。

「チー！ジュカ、『まもる』だ！！」

「ツカア！」

俺たち四人の回避が間に合わないと悟った俺はジュカに盾になってもらった。

しかしオムスターのレベルが相当高いのか、ジュカの【まもる】にヒビが入っていく。

「ツカア……………」

「なんて威力だよ……………リョウマのジュカが押し負けるだなんて」

「でもチャンスができたわ。ライちゃん、オムスターに【10まんボルト】！！」

「ラアイ！！」

バチバチバチッ！

カミノが繰り出したライチュウの電気だまりになっているほつぺたから人間なら即死レベルの電流がオムスターに向けて発射された。いくらレベルが高いとはいえこの技なら体力を結構減らせるはずだ。

「……………ふっ。私にはもう一体ポケモンがいることを忘れたか？」

「し、しまった!？」

「ラムパルド、【しねんのずつき】だ」

「ギャオオオオオオオオ!！」

「ツカ!？」

ズン……

テリースのラムパルドの【しねんのずつき】を受け止めたジユカだったが、予想外の破壊力に片膝をついてしまう。

元々ジユカは特攻スピード型だから防御には向いてない。

チツ……入れ替えるべきか……？

「アオ——ン!」

すると俺の帽子の上に乗っているソウルが押し負けそうなジユカに向かって吠えた。

それが応援か激励は分らない。

けど……今ジユカを入れ替えてはいけないことだけは分かった。

「ハルカちゃん!カナ!リヨウマの援護するわよ!ラグラ、【ハイドロカノン】!」

「了解!バシャーモ、【ブレイズキック】!」

「分かつてる!ラテ、【はかいこうせん】!」

ジユカが動きを止めているラムパルドに向かって三方向から強力な攻撃を仕掛けるカミノとハルカとカナ。

よし。流石にこの威力の技は受け止められないだろ……

「つくづく油断をする奴らだ。オムスター、【まもる】」

パアアアンツ！

テリースのオムスターによって攻撃が弾かれて景気のいい音が鳴る。
しかしこれでオムスターにもスキができた！

「LET・S GO！ZERO！【つじぎり】だ！」

「ザアアンツ！」

ZEROの【つじぎり】がオムスターの触手に次々と深い傷を負わせていく。

しかしレベルが高いのだろう。ダメージを負いながらもZEROへ強力な反撃を命令無しでやっていた。

「我々の願いはそんなものでは止められんぞ！ラムパルド、ジュカインを振り払って【じしん】！オムスターは【なみのり】だ！」
「お前正気か！？こんなところでそんな技を使ったら要塞ごと墜落するぞ！？」

「ちゃんと脱出装置ぐらい用意しているからこんな技を使うのだよ！それにオマエ以外の連中はすでに戦闘不能だがな！」
「んだと！？」

テリースの言葉に後ろを振り返る。

そこには、ポケモンを戦闘不能にされた拳句にボールの開閉スイッチを破壊されてどうしようもなくなっているハル力達の姿があった。おそらくオムスターの長い触手によって破壊されたんだろう。

ZEROの猛攻のスキにそんな芸当を見せるとは……

「チイ！LET・S GO！ウイング！ZEROを載せて【そらをとぶ】！」

【じしん】と【なみのり】は空にいる敵には当たらない。
よし。これなら反撃ができる！

「フツ……甘いな。甘すぎるぞ小僧！そんな戦い方などいままで幾千と見てきたわ！ラムパルド、トゲキッスに【がんせきふうじ】！オムスター、キリキザンに【からみつく】だ！」

「んな！？」

とてつもなく素早い動きで俺のポケモンの動きを一瞬で止めるだと……！？

これが……最強。

どんな作戦もどんな戦術も経験によって打ち消してしまう。

これが……最強の冒険家テリースのチカラだったのかよ……

「オマエは確かに強い。そこら辺のトレーナーには負けないぐらいにはな。だが……そんな強さのトレーナーぐらい私は簡単に打ち勝ってきたのだ！」

「——んな……」

「あ？何と言った？」

「ふざけんなって言ったんだよこの三下が！！」

「！？」

コイツは確かに強い。

でも、そこまでのチカラがあるなら………そんなだけの強さがあるなら………

「なんでお前はそこまでのチカラを持っていながら自分の事しか考えらんねえんだよ！？確かに家族を失ったのは辛いかもしれない！悲しいかもしれない！けど………だからって生き返らせるっていうし、ようもない目的の為に何の罪もない人間を苦しめて傷つけて良いわ

けないだろうが！」

「しょうもない……？ 私の願いがしょうもないだと！？家族を……最愛の家族を生き返らせようと奮起して何が悪い！？またあの笑顔を見たいと思って何が悪い！？またあの温もりを感じたいと思っ
て何が悪い！？私は……私の家族はたった一回の災害で抵抗もできずに死んだのだぞ！？コイツらの家族もそうだ！まだ小さい子供を残して親が死ぬなんてそんな理不尽……認められるわけないだろう
！！」

「理不尽なんかじゃねえよ！！」

「！？」

「確かに……大切なものを失って取り返したいっていう気持ちはわかる。けど……お前の家族は……そのラムパルドとオムスターの家族は……本当に抵抗なんかしなかったのか！？十万人も死んだ大きな災害で偶然お前だけが生き残ったって本気で思ってるのか！？……俺はこう思っぜ。アンタの家族は大切な父親を守るために――」

「止める！言うな！」

「――無力な体にムチ打って災害に立ち向かったんじゃないかってな！」

「五月蠅い！黙れ！」

「アンタはいつまで言い訳を言い続けて現実から逃げ続けるんだ！
！ アンタの家族は……そんな生き方をしてもらうためにアンタを

庇ったんじゃないだろ！？　だったら……自分たちの命を投げ出すぐらいの覚悟を決めてくれたアンタの大切な家族の為に……アンタの家族の願った最高の人生ってヤツをやってみたらどうなんだよ！　アンタは単に自分の葛藤と苦しみを他人に押し付けてるだけだ！　！　そんなんで……そんなことでアンタの家族とアンタのポケモンの家族がうかばれるわけねえだろ！？　少しは落ち着いて考えろよ！　アンタの家族とポケモンを思う気持ちは本物だ！　だったらその気持ちをもっと世の中のために使うとかできねえのかよ……」

「……」

俺の言葉に黙り込むテリス。

コイツだって本当はこんな事をしたかったんじゃない。

ただ……どうやっても振り払えない過去をどうにかしてほしかっただけだ。

その感情は人間として当たり前の感情だと思う。

だから俺は別にコイツを軽蔑などしない。

「まだ間に合うって……アンタなら今からでもやり直せるって……」

「リョウマ……」

「フツ。リョウマらしいな」

「相変わらずの熱血やろうね」

やかましいぞそこの敗北連中が。

「……本当にやり直せるのか？　大切なものを失った我々でも……人並みの幸せを手に入れることはできるのか？」

力なく床を見つめていたテリスが顔を動かさないまま俺にそう尋

ねてきた。

そんな質問に俺は一つのことしか答えられないだろう。

「当たり前だっつーの。人間は誰しも幸せになる権利があるんだ」

「——ッ！？そうか……そうだったのか……」

「グルルルウウ……」

「オムウウ……」

自分のこれからの未来に歓喜したのかかんだうしたのか定かではないが、自分の大切なポケモンに囲まれて彼は本当に幸せに見えた。
まあ、これで一件らくちゃ——

ドオオオオオオオオンッッ！！

突然、要塞内に爆発音が響き渡った。

な、なんだ！？

「次は一体何！？」

「多分だけどバトルの余波が要塞へ甚大なダメージを与えたのでしようね」

「落ちるのか！？こんなデカブツがアタシの街に！？」

「多分ね。あと、これは予想何だけど、こんなデカブツがああ街に落ちたらヤヨイシティはシンオウ地方の地図から消え去ることになると思うわ」

「な——ッ」

カミノの現実的な言葉に言葉を失ってしまうカナ。
確かにこんなデカいもんがこんな高さから落ちてきたら街の一つや

二つ吹き飛んじまうのは当たり前えだ。

「……………出てこいディン、ナンス」

「（御意）」

「ソッナンスッ」

ボールからフリーディンとソーナンスを繰り出す俺。

たとえ一人でも救うことができるなら俺は戦う。それが……………俺の意志だから。

「ハルカ、俺のバッグ預かっててくれ」

「な、何をする気なの！？」

「ん？ この要塞を止めるだけだ」

「だったら私も手伝う！」

「お前らはポケモン出せねえだろうが。いいから俺のディンの【テレポート】で脱出しろ。多分だけど、このダメージじゃ例の脱出装置も使えないだろうからな」

「でもっ！」

それでも食い下がるハルカ。

ああ、もう！しゃあねえな！

——フッ——

「……………え？」

「うわ……………／／／／／」

隣でカナとカミノがそれぞれの反応を見せる。

まあ、しょうがねえだろうな。

なぜなら……………俺がハルカにキスをしたのだから。

「……カミノ、ハル力を頼んだ」

「はあ。……止めても聞かないんでしょう？」

「ああ」

「ったく……絶対に帰ってきなさいよ？」

「了解。ディン、ナンスとハル力とカミノとカナとテリースとお前自身を【テレポート】」

「（……本当によろしいのですな？）」

「……ああ」

「（ご武運を）」

ヒュンッ

ディンの【テレポート】によって一瞬にしてハル力たちの姿が掻き消えた。

「さーってと、一仕事するのでしょうか——って、ん？」

「オン！」

「ジユカア！」

「ってなんだお前が残ってたんかよ。ZEROでさえ俺の命令でボイルの中に戻ったっていうのに」

「オ——ンッ！」

「ツカ——ッ！」

「分かった分かった！そう怒るなつて。まあ、その……なんだ？一緒に英雄にでもなるとしますか！」

確か操縦室はあそこなハズ……

俺はやヨイシティの消滅を止めるために無謀なことをやりに行った。

「リヨウマ……」

【レポート】で飛ばされた先はヤヨイシティのヘリポートだった。そしてちょうどそこでリードとイエローと合流したというわけ。

「そうだったのか……まあ、確かにリヨウマらしいね」

「自分の事よりもまず他人のことを考えるところとか」

「……またお礼を言いそびれちゃった……」
「リヨウマ……」

ハルカちゃんがりヨウマから預かったバッグをギュッと抱きしめて
上空の要塞を見つめている。

多分この中で一番リヨウマを心配してるのは彼女かもね。

「信じましょう。あのバカが無事で帰ってきてくれるのを……」

私たちは待つことしかできない。

だってそれがアイツの願いなのだから……

結局、要塞はヤヨイシティに墜落することは無かった。

けど、別にどこかに墜落したわけでもない。

突然、要塞の墜落コースに空間の裂け目ができて要塞ごと飲み込んでしまったの。

私にはあの裂け目がどこに繋がっているかなんて分からない。

けど、この世界のどこかに繋がっているということだけは確信している。

とりあえず私たちはバカを探すことにしようと思っているの。（カナは街の復興の為に別れたわ）。

だって……あのバカは『絶対に帰ってくる』って約束したのだから……

ポカポカとした陽気に包まれた町、ズイタウン。

ここには【タケット牧場】なる育て屋が存在する。

そこには約100匹ものポケモンが暮らしている。

しかし、その牧場のポケモンはある一人のトレーナーのポケモンなのだ。

「ん〜！……いい天気だなーっと」

そしてその牧場の受け付けなる場所で背伸びをするこの青年こそがこの牧場の牧場主であるタケットだ。

まあ彼は転生者だったりするのだがそれについては後日語ることになるだろう。

「……タケットさんって、相変わらずだらけてますよねー。そんなんでよく牧場主勤まりますよねー」

そんなもって彼の前で呆れながら嘆息しているのはスカイⅡオリハラなる女トレーナー。

まあ、彼女の事も後日話すことになるだろう。

「どうせバイト感覚だしなー」

「……全国の育て屋に対して失礼な発言ですね……」

「まあ、ポケモンは好きだからいいんだけど――」

タケトがいきなり目を見開いて言葉を失った。

そしてスカイも後ろを振り返って同じ反応を見せる。

なぜなら――

――そこには空間の裂け目が突然できて赤と白の帽子をかぶった青い服の青年が出てきたのだから……。

終局！！最終決戦（後書き）

「こらー！私の弁当返してください！」

B
Y スカイ

とりあえず四人目のキャラ紹介いつとく?&イラスト公開<リョウマver・

「ついに俺の紹介ですつと。眠……」

B
Y
タ
ケ
ト

とりあえず四人目のキャラ紹介いつとく？&イラスト公開<リョウマver.>

タケト

年齢

16歳

容姿

ツリ目でもタレ目でもない普通の目。髪は肩ぐらいまでの長さで所々が跳ねている。髪と目の色は赤。
顔はかなり二枚目なのだが普段から纏っている残念な雰囲気ので扱いはほとんど三枚目。

服装：黒いパーカーに白い長ズボン。

身長

175cm

体重

60kg

性格

とにかくやる気がない。面倒くさがり屋。しかし、曲がったことは大嫌い。ポケモンを何よりも愛している。

好きなポケモン

全部

嫌いなポケモン
無し

職業

【タケット牧場】の牧場主

将来の夢

一攫千金

手持ち<確定>

アーサー（エンペルト♂）

ラルース（デオキシス）

ナイト（ブラッキー）

「どうも！主人公のリョウマです！」

「どうも。ヒロインのカミノよ」

「今回は遂に完成したイラストを公開したいと思います！」

「わー。どきどきするわー」

「棒読みだなオイ」

「当たり前でしょ？私のイラストじゃないんだから」

「正直ですねー。……コホンッ。それでは……どうぞ！」

> i 3 3 4 3 7 — 3 4 1 6 <

「どうすか!？」

「まさかのデフォルメ仕様に読者の皆さんは開いた口が塞がらないでしょうね」

「説明をしとくけど、作者は最近『Angel Beats!』僕らの戦線行進曲』という漫画にハマっているんだ」

「んで、その漫画は四コマ漫画なんだけど登場するキャラクターが全員デフォルメ仕様なのよ」

「というわけで作者が今後投稿していくイラストは全てデフォルメ仕様になることが決定したりしなかったり！」

「私の美しさをデフォルメで引き出せるのかは作者次第ってワケね

……」

「そゆこと！つつーワケで、以上！イラスト公開くリヨウマVer
>でした！」

「「それでは本編で〜！」」

「って私の出番は新章ではあるの!?ねえ——」

とりあえず四人目のキャラ紹介いつとく？&イラスト公開くリヨウマバーン

「まあまあそんなに焦るなって。休まなきゃケガも治んねーぞ？」

B Y タケット

必然？最後の転生者との出会い（前書き）

「ううゝ……まな板じゃないですうゝ」

B
Y
スカイ

必然？最後の転生者との出会い

『ここは……？』

俺の目の前に広がるのは『闇』。
何も見えず、何も感じない。

『はああああああ……まさかと思うけど俺、死んだ？』

あんな巨大な要塞と共に墜落したんだから死んだとしてもしょうがねえか。

『まあ、これから頼むぜ。』闇『』

俺が消滅するまで一緒に過ごしていくのだから……

「——という寝言をこの男の子が言い始めてしまいましたけど、うしますタケトさん？」

タケト牧場の応接室にあるソファの上に寝かせてある青年の顔を『ノーム』であるスカイ・オリハラが覗き込んでいる。

『ノーム』とは、『アストラルボディ』と呼ばれる実態を持たない精神体が『依代』^{よりしろ}と呼ばれる仮の体に移っている存在の事だ。

……凄く用語を並べて説明をしたが分かってもらえただろうか？まあ、詳しく知りたい人はググってくれ。

「んー？ああ、ほっとけほっとけ。いずれ目覚めるって」

そしてスカイの質問に【タケト牧場】の牧場主であるタケトがテレビを見ながら答えた。

彼は元神様であるカミノによって転生させられた四人目の転生者で、リョウマという二人目の転生者のポケモンたちが暮らすこの牧場の牧場主に任命された青年である。

しかしタケトは嫌がるそぶりも見せずに『まー、ここでゆっくり過ごしながらリーグ出場すればいいし。あ。バッチ集めるのメンドいから全地方のバッチ寄越せよなー』という大胆な条件を付けてこの仕事に就いたのだ。

「エンペルウ」

「お。アーサーじゃんか。どした？」

「ペルウ！」

「……………スマン。全然分からん」

「当たり前でしょうが……………」

タケトがボケでスカイがツツコミ。

この二人は普段からこうやって日常を過ごしている。

スカイとタケットが出会ったのは二か月前の事だ。

転生させられたタケットがズイタウンの広大な原っぱで弁当を食べていたスカイの目の前に墜落するということなんともお約束な出会い。

あまりに非日常な光景にしばしの時間凍りついていたスカイが慌ててタケットの方に向かって介抱したのだが……

『——あ。弁当だ。ラッキー』

『ってこらあ！なに勝手に私のお弁当食べてるんですかあ！』

『うん。美味しい美味しい』

『あ、そうですか？それはよかったですってちつがあ——

う！今の私が求めているのは褒め言葉じゃなくてお弁当です！ってちよつと！？すでに8割ぐらい無くなってるじゃないですか！？』

『ごっそさんです』

『完食！？いたいけな少女の前でその少女のお弁当を勝手に完食しましたよこの男性は！』

『いやー、お前って料理上手いんだなー』

『なっ……／＼／＼／』

現世では一応ジャーズに所属していたタケットの純粹スマイルに思わずときめいてしまうスカイ。

しかし、今まで一度も感じたことが無いその感情に混乱してしまう。

『（ええ！？こ、この胸の高鳴りは何ですか！？も、もしかして恋！？）』

いやいやそれはねーだろ とツツコミを受けそうな解釈をしてしまったスカイは『あわわー！？』と柔らかいほつぺたを抑えて座り込んでしまう。

それを見ていたタケトは？マークを頭に浮かべて首を傾げている。

『って、そうだそうだ。なあ、お前』

『は、はい！？』

『何をそこまで焦ってるんだよ。えっと、ここらへんに【名無し牧場】っていう牧場とかないか？知り合いにその牧場主になる様に言われてんだけどさあ、なにぶんここに来るのは初めてなもんで』
『来るというよりは落下でしたけどね……【名無し牧場】ですか？それならそこにある牧場がそうだと思いますけど』

タケトの後ろを指差して答えるスカイ。

タケトは勢いよく後ろを振り返って……言葉に表せないぐらいの感動に包まれた。

昔から憧れだったヨーロッパ風の建物がぼつんと存在していて、そこから東京ドーム五個分ぐらいの敷地に大きな柵がしてある。柵の中には数多くのポケモンたちがのんびりと過ごしている。どのポケモンも本当に心の底から幸せそうに過ごしている。

『……なあお前』

『……一応スカイっていう名前があるんですけど何ですか？』

『ここは楽園か？』

『いえ。ズイタウンですけど』

『イツツビユートイフォー……』

『英語話せないなら止めといたが良いと思いますけど』

とまあ、こんな感じで出会った二人は【タケト牧場】でここ二か月ぼーっと過ごしているワケだ。

「タケットさんタケットさん。以前から言ってますけど私はリーグに出る為に旅をしなければならいんですよ旅を」

「ふーん……それで？」

「その……あの……一緒に旅に出てくれませんか……？／／／／／」

妙にもじもじしながら絞り出すように言葉を紡いだスカイ。

美少女ともいえる顔立ちの彼女が顔を赤らめて上目遣いをしているその光景はなんともいえないエロさをひきだしている。

……まあ、彼女は単にタケットと一緒に旅をしたいだけなのだが――

「イヤ」

――極度のめんどくさがり屋のタケットがそれに同意するはずもない。

「なんですかあ！？」

「だって俺ってばバッチ全部所持ってるし」

「わ、私だって持ってますよ！？イッシュ地方はまだですけど！」

「んじゃ別に旅なんてしなくてもいいじゃん」

「はっ、しまった！？」

自分で誘っておいて自分で誘えない状況に自分を追い込んでしまうスカイは俗にいう【天然】という種族ではなからうか　とタケットは頭を抱えてあわあわしているスカイを見て思ったりする。

「じゃ、じゃあ私とポケモンバトルしてください！それで私が勝ったら一緒に旅に出ましょう！」

「二日前もそう言っただけで負けてたよな。余談だが、俺とスカイの戦績

は百勝零敗だ」

「そんな語り部口調で言わないでください！私だってこのポケモンたちと修行していますから前よりは強いんです！」

「そりゃハウエン地方のチャンピオン倒したぐらいだからそうなんだろうけどって今なんつったコラ」

「え？このポケモンたちと修行しているから前よりは強くなったって……」

「何勝手に人様のポケモンとバトっちゃってんの！？前も言ったがココにいるポケモンは俺のでもお前のでもないんだよ！どうするんだ！『慰謝料払え』とか言われたら！ココの財政が沈没前のタイタニック号レベルだってことぐらい把握してるだろ！？」

「それはタケットさんが意味もなく大量の買い物をするからですよね！？」

「意味が無いってなんだ意味がないって！ココのポケモンたちの為に新しいポケモンフードを買っただけだろうが！」

「それだけですと！？わ、私、知ってるんですよ！？私が今立っているこの床の下に大量のエロ本があるってことぐらい！」

そう言っただけで足元の床板を外していくつかのエロ本を手取るスカイ。勝ち誇ってはいるが顔が真っ赤に染まっているところを見るとスカイは意外と純情な子なのかもしれない。

「ちょ、お前なにしてんだ！？返せ！いや、返してください！それは俺の元気の源なんだ！」

「うるさい！こんな本なんか……こんな本なんか……」

「お、おいスカイ……まさか……」

「燃えればいいんです————っ！ボーマンダ、【かえんほっしゅ】！」

ポッ

スカイの傍で眠っていたボーマンダが命令を受けて目を覚まし、エロ本を灰にした。

「バカなあ——っ!？」

タケトは震えながら灰と化した自分の宝物たちを繋ぎ合わせようとしている。

しかし形どころか分子レベルで存在が変わっているのです。そんなことじゃ元には戻らない。

「この鬼！悪魔！」

「なんとでも言うてください。私はこの家にそんなえ、エロ本なんか置いてあるのが許せないんです」

「この壁！ペチャパイ！まな板！ミラーコート！」

「流星にそれは言いすぎじゃないですかね!？」

しかし、タケトの言うとおりスカイの胸はゼロとは言わないがあまり発達はしていない。

まあ、ノームって皆そんなもんですしね！。

「うう……す、少しは成長してるんですよ」

「だから？」

「表に出なさい！今回はマジで潰します！」

「上等だコラ！あとでメイド服でエロいご奉仕させてやる！」

「だ、誰がそんなハレンチなことですか!？本気で殴りますよ!？」

「ポケモンバトルですう！勝手に間違わないでくださいい！」

「うっざ！前々から思ってたけどこの人うっざ！」

「えつと……ここ、どこ？」

「「え？」」

二人が不毛な言い争いをしていざバトルをしようかとドアに手をかけたとき、眠っていた青年が目を覚ました。

「えつと……ここは俺のポケモンたちが預けられている牧場でお前がこの牧場主でそこのお前が受付担当的なモンであってるか？」

「おー」

「はい」

なんか地獄のような夢を見た後に目覚めたら見覚えのない天井見上げててそしたら隣で良い争いしている男女に会って……なんだこの状況。

「――で、その……タケットだっけ？」

「おー」

「タケットが最後の転生者でその……」

「スカイです」

「スカイがタケットの……彼女？」

ズドンッ！

何故かスカイが足を滑らせて備え付けのテーブルに頭をぶつけた。
今アンタ動いてなかったよな？

「な、なななななななな」

「落ちて着けスカイ。ココは地球だ」

「な、なんで私がタケットさんの彼女だと思ったんですか！？」

「近い近いって」

見間違いだろうか？

スカイが嬉しそうにしているように見えるんだけど……

「えっと、さつきココがタケットとスカイの家だって言ってたからさ。
これっていわゆる同棲ってヤツだろ？羨ましいなあ」

「同棲！？そ、そういうええ世間一般的に見ればそうなってる！で、
でもここ二か月全く進展がないんですけど……ううゝ」

「そんな目で見んな。壁」

「ボーマンダ！」

「わぁ！待て待て俺が悪かった！」

「【りゅうのいぶき】！」

「うわコイツマジでやりやがった！チツ！ラルス！ディフェンス
フォルムでガード！」

なんかスカイがボーマンダで攻撃したらタケットがデオキシスで防御した。

……………えー……………何この二人。かな〜りバイレンスなんですけどー。

「ってそんな意味不明な夫婦漫才見てる場合じゃねえ！ハルカとカミノたちに合流しねえと！痛い……………」

「夫婦漫才言うな。っつーか今のお前はぼろぼろの患者状態なんだから今は休め。そうだなー、せっかくだし自分のポケモンたちと触れ合ってみるか？」

「俺のポケモン……………」

「おー。おいスカイ、行くぞー」

「……………胸ってどうやったら大きくなるんですかね……………」

「はあ、またそのモードっすか。ったく」

ずるずるずるずる

俺はスカイを引きずるタケットに案内されて自分のポケモンたちが住んでいる牧場の中に入っていた。

必然？最後の転生者との出会い（後書き）

「旅に出ないと。あいつらと合流するために」

B
Y
リヨ
ウマ

恐怖？タケト牧場での一日（前書き）

「いけつ、ボーマンダ！」

B
Y スカイ

恐怖？タケット牧場での一日

「ほれ。ここがお前のポケモンたちが暮らしてる我が【タケット牧場】の全容だ」

「おお……」

俺の目の前に広がっている光景はまさに桃源郷だった。

全てのポケモンのタイプに対応できるようにタイプごとにエリア分けされている。

広大な土地を最大限利用してポケモンたちを満足させることができる。

「どうですかリョウマさん？私たちの牧場は」

「すげえ……夢見てエだ……」

「そりゃよかった」

ドドドドドド

ん？なんだ？牧場の奥から大量の砂煙が……

「お。早速来たな」

「ちゃんと足を踏ん張ってくださいね」

「え？なに？あれはなに！？」

「まあ見てろって」

見てろって言われても……

「——って俺のポケモン！？」

「詳しく言えばこの牧場にいるお前のポケモンが全員集合してる感じだ」

「ええ！？ そんな感じってぶるああ！？」

もう突進してきたポケモンたちに撥ねられた俺は宙を舞った。
ま、まさか自分のポケモンに轢かれるとは……

ぐしゃ

「……………うわぁ」

「ってテメェら！ その反応は何だぁ！？ その吐しゃ物を目の当たりにしたような反応は！」

「いや、だって血まみれでぼろぼろだし……………」

「踏み潰されて拳句の果てには痣だらけ……………」

「正直直視できないっす」

「ハモるなあ！！ そんなに人の心をずたずたにして楽しいか！？」

「いや全然」

「そうだろうなあ！！ 俺だってそう思ってたよ！！ っていうかそれで楽しいか思ってたら思いっきり引いてたわ！！」

「五月蠅いリョウマ」

「同感です」

「泣いてやるう——ッ！！」

その場に崩れ落ちて涙を流す俺。
いやマジで今のは辛かった。

っていうかスカイがこんなにエグイこと言うとは思ってなかったし。

「まあまあそう言わずに。私とバトルでもしません？」

「唐突！？ なぜ今の流れでそんなこと言い出したのが理解できません！！」

「あ。スイマセン……リョウマさんは実は弱いから私とバトルするのが怖いんですね。スイマセン」

「むきやー！！二回も謝られた！！いいぜ！やってやるよ！！後で痛い目見ても知らねえからな！？」

「……あ。ゴメンナサイ。ちよつと手持ち組んでました。今何て言いました？」

「コ・ロ・ス！！ボコボコニしてやるううううううううう！！！」

というワケで俺対スカイの三対三のシングルバトルをすることに。
あ。俺まだ手持ち組んでないじゃん。

まあ、ココに皆いるみたいだしいつものメンバーじゃないので戦ってみるか……

「……………ここ、俺の牧場なんだけど……」

うるさいだまれ。

「えーっと……今からリヨウマ対スカイのバトルを始める！使用ポケモンは三体！ステージの破壊は認めん！っていうか経営にかかわるから禁止！！」

タケトにも大きな悩みがあるようだ。
だが心配はない。

「任せとけ。いい具合にリフォームしてやるから……」

「壊すな！！ お前マジで今のこの牧場は財政難なんだからな！？」

「五月蠅いですタケトさん。集中させてください」

「おいお前だつてこの牧場の従業員だろうが！！ 少しはこっちの心配をしろ！！」

「いけっ、ボーマンダ！！」

「シカトオ！？」

スカイの一体目はドラゴンポケモンのボーマンダ。

かなり凶暴で手が付けられなくなってしまうポケモンだ。

しかしその反動でコイツの強さは計り知れない。

ステータスもかなり高くて攻撃力が半端ない。

さて、俺は誰を出すか……

「LET・GO！！パル！！」

「シェンツ！！」

俺が繰り出したのは2まいがいポケモンのパルシェン。
圧倒的防御力を誇る氷タイプだ。

「先手必勝！【ふぶき】だ！」

「シエエエエエェン！！！！！！！！」

ゴオオオオオオオ

……今思っただけでなんでパルシェンがボーマンダよりも速く動けるんだろう。

まあ、気にしてもしょうがねえか。

「ふっ、甘いです!!ボーマンダ、【かえんほうしゃ】!!」
「グオオガアアアアアアア!!」

スカイのボーマンダが【かえんほうしゃ】で吹雪を全て燃やし尽くした。

しかも一瞬で。

かなり強えなああのボーマンダ……

「【れいとうビーム】!!」

「【かえんほうしゃ】!!」

「くっ。耐えるパル!!」

「その調子ですボーマンダ!!」

「て……デメエら……速攻で俺の牧場を破壊させてんじゃねえよおおおおおお!!」

「「あ」」

タケトが咆哮するぐらいのこの惨状。

野は焼け

草は散り

地は抉れている。

あー……ヤベエかも。

「……ふっ。こゝこまでにしといてやろう」
「……そ、そうですね。い、良い戦いでした」

がしっ

ココに新たな友情が生まれた。

厳しいバトルを通じて通い合った二人。

俺たちはこれからたくさん経験を通じて更なる高みへ行けること
だろう。

ぐわしっ

「「！？」」

「………ちょーっと待ってくださいねー」

チィー！この流れで逃走しようと思ったのに捕まった！

しかも今のタケットの目に何故か光が灯ってない！！

やっべえめっちゃ怖ええ！！

「な、なんだよタケット………そ、そうだ！今日は天気もいいし、こゝ
で弁当でも食わないか！？」

「……地面挟れてるけど？」

「あー………」

「た、タケットさん！久しぶりに雑草抜きでもしましょう！最近あま
りしてませんでしたから！」

「………抜く雑草すら燃え尽きてるけど？」

「あー………」

ぴくぴくと口の端を引き攣らせるタケット。

俺とスカイはがたがた体を震わせている。
ダメだ……打開策が見つからねえ……

「……お前からこれから一週間タダ働きな」

「はいちよつと待っててください！！タケットさん！？　タダ働きつて
嘘ですよね！？」

「いやマジ」

「俺は早くカミノ達と再会しなきゃいけないんですけど！？」

「知らん。この地面とか全部元に戻すまで許さん」

「「そんな！？」」

この男は悪魔なのか。

他かが地面に巨大なクレーター作っただけでこの所業。

大魔王サタンもビックリだ。

「許してくださいっ！そうじゃないと……今日の夕飯を一品減らします！」

「ええ！？　何その小っちゃい脅し！そんなんでコイツの怒りが静まるとは思えな——」

「よし分かった。今回ばかりは許そう」

「——って許した！？　お前ただけ夕飯大事なんだよ！？」

「バカかお前。夕飯が無いと人間は生きていけねえんだぜ？」

「知らねえよ！！いや知ってますスツゲエ知ってます。だからその後ろ手に構えているつるはしを下ろしてください。マジで自分チョーシくれてました！！」

つるはしでの攻撃って避けられるんだろうか？

俺にはよく分からない。

「……………ちっ」

「ねえ、今舌打ちしなかった？　今お前結構心から残念ですってアピールしてるような顔してましたけども」

「……………ちっ」

「スカイもそこで乗らないで！！そんなに俺の心をずたずたにして楽しいか！？」

「……………そこそこ」

「やっぱり悪魔だよお前ら！！っていうかこのやり取り凄く身に覚えがあるんですがっ！」

「気のせいです」

「デジャビュだデジャビュ。それより今日はもう飯にしよう。日も暮れてきたし」

「じゃあ私は夕飯を作ってきますねー」

あ。逃げた。

エアームドに乗って逃げたぞアイツ。

「……………さて、夕飯ができる間お前はこの地面埋めろ」

「……………はい……………」

俺はそれから二時間もの間巨大なクレーターを埋め続けた。

両手が痛え……………

恐怖？タケト牧場での一日（後書き）

「私、実は人間じゃないんです……」

B
y スカイ

進展？スカイの告白とリョウマの決断（前書き）

「お久しぶりです!!」

B Y スカイ〓オリハラ

進展？スカイの告白とリヨウマの決断

リヨウマSIDE

「うちそうさま！」

地面のクレーターを何とか埋めた後、スカイが作った夕飯を食べた。いやー美味い。そこら辺の店で通用するぐらい美味い。将来はシェフか何かか？

「美味かったよ。スカイって料理上手いんだな」

「女は料理ができた方が良いつて言いますからね」

「ハッ。何言つてんだか」

「あ。手が滑りました」

タケットの言葉を聞き逃さなかったスカイがカップに注いでいた紅茶をタケットの頭めがけてバシヤツとぶっかけた。あれって熱湯じゃね？

「あつつつつつあああああああ！！！！！！」

「うわぁ……………」

顔を抑えて床をごろごろと転がるタケット。そんなご主人様に向かってエンペルトのアーサーが必死に水をぶっかけて冷やそうと試みている。凄え。凄えよあのエンペルト。自分の水流を完全に制御してる。どんだけ育ててきたんだよ……

「な、何すんだデメエ！」

「こっめんなさ〜い」つい手が滑っちゃって。デヘッ」

「ざけんなクソアマあああああああああああ……！」
「ボーマンダ、【りゅうのいぶき】……！」
「ギヤア——！！！」

このタケト牧場に来て学んだことが一つある。スカイを怒らせると自分の寿命が一気に減少するということだ。今俺の目の前でポケモンの技を、もろ喰らってボロボロになってる悲しき転生者もいるしな。気を付けようっと。

「あー……俺ちょっと外行ってくるわ」

——
パタン

ドタバタ暴れまわっている赤髪青髪カップルを置いて牧場の中への扉をくぐって閉める。さて、どこにいるかなー俺の今会いたいポケモンは……

『スカイ！ 流石に花瓶はやバイって！ それは死ぬって！』
『ウフフ……タケトサンがいけないんですよ？ タケトサンが鈍感だから……』

『意味分かんねえ！！ お、おいっ！ ちよっ、待っ——』

ゴイイイイン！！

……………早く探しに行こーっと。

「あ。いたいた」

タケト牧場内を歩き回ること十数分。俺は目的のポケモンを発見した。

うん。間違いない。あのシルエットは間違いなくアイツだ。

「おい！ デイーン！」

「（おお！ 主殿！ 久しゅうございますな！）」

そう。俺が今会いたかったポケモンはフリーデインのデイン。俺がカミノたちを要塞から脱出させるときに使用したポケモンだ。俺のポケモンの中でもテレパシーが使える数少ないポケモンの中の一匹だったりする。

「その……アイツらはあの後どうしてる？」

俺が身勝手に置いてきた連中だ。その後を心配するのぐらい許してほしい。また再会したいしな。

そんな俺の問いにデインは、

「（皆さま方は主殿を探してシンオウ地方を歩き回っておりますぞ。今はおそらくノモセシティあたりかと）」

「意外に近いな。んじゃ、俺から会いに行こう。もともと俺の身勝手で離ればなれになっちゃったわけだし」

「（フツ。主殿らしいですな。それで主殿。後ろに客人がいるよう

ですが」

「へ？」

客人？後ろ？

デインの言葉を聞いて後ろを振り返ってみる。そこには青い髪の毛を持っていて人形のような顔立ちをした少女――スカイ
「オリハラが立っていた。

………なんで服に赤い液体が付着しているのかはあえて聞かないでおこう。あれはきつとさっきの紅茶だ。そうじゃなけりゃトマトソースだ。

「スカイ？ なにやってんだ？ どんなところで」

「リヨウマさんはノモセシティに行くんですか？」

「……まあな。俺を待ってるやつらがいるから迎えに行かねえと」
「そう、ですか」

スカイが顎に手を当てて深く考え込みだした。

なに？ 全くスカイの意図が分かんねえ。

こいつは一体何がしたいの？

「えっと……どうしたんだ？ いきなり現れたかと思ったらいきなり黙って考え込んで……」

「す、スイマセン。えっと私の相談に乗ってほしくて来たんですけど……」

相談？

見ず知らずの俺に相談なんて変わってるなあ。まあ、一応は知り合いだし聞いてやらんこともない。

「いいぞ。言ってみろよ」

「ありがとうございます。えつとですね――」

スカイは俺の隣に腰を下ろす。

そして、無数の星が浮かぶ夜空を見上げながら言った。

「――私って、実は人間じゃないんです」

「……………は？」

俺にはスカイの言葉が幻聴のように聞こえた。

「イテテ……………あ”ー死ぬかと思った」

スカイに頭を花瓶で強打されたタケットはコブのできた頭をさすりながらソファに腰を下ろした。その近くではエンペルトのアーサーとデオキシスのラルースとブラッキーのライトがすやすやと寝息を立てている。そんなアーサーたちを一瞥してタケットはスカイが淹れた紅茶を飲みながらひとり呟く。

「そっぴゃあ、アイツって自分の創造主を探さねえといけねえんだっただけな……………」

スカイ＝オリハラ

彼女は【ノーム】と呼ばれる種族だ。

魂が元々の姿で今の姿はただの借りもの。

いつでもどこでも好きな時に【依代】さえあれば姿かたちを変化させることができる種族。

スカイはそんな種族の一人だ。

しかし、タケトはそんな彼女の正体を知っても人間として接し続けてきた。

【依代】といっても肌触りなどは人間と全く同じ。

心も人並みにある。

そんな彼女を人間じゃなく扱うことなどタケトには不可能だった。

「まったく……リーグ出場が目的つつたつて後は申請するだけだろーが……」

シンオウのバッジを全部持っているタケトとスカイは既に出場資格を得ている。

シンオウリーグまで残り一か月。

申請はリーグ開催前日まで。

ポケモンの【そらをとぶ】でリーグまで行けば一日と掛からない距離。

そんな距離を目指すために旅に出ようという考えがすでに怪しいとタケトは思っていた。

「作りモンの存在か……」

タケトはカップの中の紅茶をグイッと一気に飲み干した。

「ノーム……作り物の存在か……」

「はい。私は人間じゃない。そこら辺のぬいぐるみと何も変わらないんですよ」

ぬいぐるみと何も変わらない。

それは自分のことを誰よりも分かっているスカイだからこそ口に出た言葉だろう。

自分の本物なのか、二セモノなのか。

そんな二択に振り回され続ける人生。

そんなの……悲しすぎるだろ。

「……タケットは」

「？」

「タケットはお前のことを人形とは思ってねえと思う」

「……」

「お前と話してる時のタケットって笑顔を浮かべてるぜ？ 純粹な笑顔だ。あんな笑顔は人間相手以外に向けられねえよ」

「……………」

スカイの沈黙がさつきよりも長い。自分でも分かっているんだろう。

そんな考えは自分の自虐だってこと。別に他の人の誰も気にしてないってこと。

「自分の存在に自信を持てよ。お前にはタケットが付いてる。悲しいときはアイツに傍にいてもらえばいい。嬉しいときはアイツに絡ん

だつていい。それが……相棒つてもんじゃねえのか？」

スカイがタケトに好意を向けていることは知っている。つつーかあからさまに向けている。バレバレだ。

「そう、ですね……ありがとうございます。少し、スッキリしました」

「そうか。そりゃあ、良かったな」

「はいっ。じゃあ私はこれで」

「あ。ちよつとまった！」

家の方へ戻ろうとしたスカイを引き留める。

これだけは伝えなくてはならない。

命の恩人には伝えなくてはならない。

「なんですか？」

スカイがきょとんとした表情でこっちを見つめている。やっぱりお前は人間だよ。

さて、言いましょうかね。

「今まで世話になったってタケトに伝えてくれ」

その日、俺は飛行タイプのピジョットのジェットに乗って【タケト牧場】を後にした。

——ガチャ

タケトがぼーっと新聞を読んでいると、スカイが牧場内から帰ってきた。

「リヨウマさん、ノモセシティに行きましたよ。ピジョットに乗って」

「そうか。まあ、アイツは待つてる人がいるみてえだしな」

タケトの言葉の後、部屋の中を沈黙が支配した。

その沈黙が続くこと五分後、

「吹っ切れたのか？」

「へ？」

タケトが突然つぶやいた言葉に疑問符を浮かべるスカイ。
そんなスカイに視線も送らずにタケトは続けた。

「自分の存在意義なんつー小さい悩みは吹っ切れたのか？」

「そうですね……やっぱり創造主は見つけたいし自分の存在は何なのかってまだ思ってますけど……」

スカイはタケトの眼を真っ直ぐと見つけて言い放った。

「私はタケトさんが私のことを大事だと思ってくれてるって分かっただけ、自分のことを好きになれましたよ」

「なっ……／＼／＼ ば、バカ言ってるじゃねー！ だ、誰がそんな

ことを――」

「リヨウマさんですけど。ってあれあれー？　もしかして照れてますか？　照れてるんですか？」

「照れてねえよ！！　ただ心配してただけだ！！」

「あ。若干認めましたね」

「あーもう！　ウゼエよお前！！　何！？　今日のお前マジでなんなの！？」

「スカイ〓オリハラです。タケットさんの相棒のポケモントレーナーですよ」

スカイ〓オリハラ

彼女はイレギュラーの存在であるトレーナーに恋をした人間を目指す人間。

進展？スカイの告白とリョウマの決断（後書き）

「久しぶりだな、みんな」

B
y
リョウマ

予想外？思わぬアクシデント！（前書き）

「今回は、サファイアさんの投稿トレーナーが出演してるわ」

B
Y カミノ

予想外？思わぬアクシデント！

「んー……そろそろだと思っただけだなー……」

ジェット（ピジョットの♂）に乗って空を飛ぶこと数時間。休憩を挟みつつだったがそろそろノモセシティに着くころだと思っ。この世界の地理ってゲームといまいち違うから分かり辛なんだよな……ゲームじゃ正確な距離なんて分かんなかったし。

「まだ飛べるか？」

「ピジョッ！」

「そうか。ノモセに着いたら、飛び切りのポケモンフーズ食わせてやつからな」

「ピジョーッ！」

「って、ちょ！いきなりそんなスピード出したら、うわあ——」

ジェットの急激な速度増加でバランスを崩してしまった俺は、そのまま地上へと落下してしまった。

「ピ、ピジョーッ！」

ジェットが必死に俺を追いかけてくるけど、気づくのがちょっとばかり遅かったせいで追いつくのは無理そうだな。まあ、高度はそこまで高くなかったし、気絶ぐらいで済むだろうけど……痛いのは、もう嫌です……

俺はそのまま重力に逆らうことも許されずに、地上へと落下した。

ノモセシティの近くの213番道路、そこをラベンダー色の髪を腰辺りまで伸ばした少女がとぼと歩いていた。その隣では、ほうようポケモンのサーナイトがふわふわとついてきている。

「（そろそろノモセシティね。まずは宿を探しましょうか。ユラも疲れたでしょ？）」

「…………（コク）…………」

ユラと呼ばれた少女がサーナイトの言葉に静かに頷きを返す。右目が隠れるぐらいの長い前髪から覗く顔に、表情というものはあまり感じ取ることができない。

『わああああああああああ』

「…………？」

「（人の声、みたいね…………上から聞こえたけど…………ッ！）」

自分の上、つまりは晴れ渡った青空を見上げたサーナイト――
ルルは目をぎよっと開けて、硬直してしまった。それは何故か。それは…………一人の人間が上空から落ちてきたからだ。

「ふべえ！」

顔面から地面に激突してピクリとも動かなくなった青年を目の前に、ただただ硬直し続けるユラとルル。

その状態が五分ほど続いた時、ユラが、

「……だ、大丈夫なの……？」

「（どう考えても重傷じゃないかしら？　ってあれは……ピジョット？　このトレーナーのポケモンかしら）」

青年が落ちてきた方向から一匹のピジョットがバサバサと慌ただしく飛んできて……そのまま地面に激突した。

そんな一人と一匹を茫然と見つめて、ルルは露骨に溜め息を吐き、

「（とりあえず今日は野宿でいい？）」

「……（コク）……」

「——つてえ——！」

顔面撃った！　ヤベエ！　今のはマジで死ぬかと思った！　つて

……あれ？」

俺の目の前には瞬く星が無数に広がっていた。　って夜？　なんか

手当もしてあるし……誰かが助けてくれたのかな？

「いやー、ラッキーだな。まさか死なずに済むなんてなー。俺も案外、不幸じゃなかったり？」

「（空から落ちてくる時点で十分不幸じゃないかしら……）」

「それもそうだなって………今の誰？」

「（後ろよ後ろ）」

とりあえず声の命令通りに後ろを振り返ってみた。そこには、俺も良く知るかなり有名なポケモン、サーナイトがピジョットを抱きかかえて立っていた。ってあのピジョットはジェット？

「お前が助けてくれたのか？」

「（私もだけど、貴方を助けるって決めたのはユラよ）」

「ユラ？ それってお前のトレーナーか？ お礼言いてえんだ。今どこにいる？」

やっぱり人として、お礼ぐらいは言っておいた方が良いと思う。それが常識、マナーだ。

そんな俺の言葉に、サーナイトはフツと表情を暗くして、

「（お礼は良いわ。あの子ってちょっと人間が苦手なのよ……だから、そのまま何事もなかったかのように帰ってくれないかしら……？」

さすがのような瞳で俺を見て懇願してくるサーナイト。人間不信か……そりゃあ気の毒だな……俺に会いたくないのも分かるっちゃあ、分かる。よし。

「お前のトレーナーって今どこ？」

「（今私の話を聞いてた！？）」

「聞いてたさ。でも、お礼を言わねえのと人間不信ってのは何か違う。これは俺のためであり俺のためであるんだ」

「（全部あなたのためじゃないの！？）」

「そうだ。だから数秒でいい。そのユラって子に会わせてくれないか？」

「（……………）」

腕を組んで深く考え込みだすサーナイト。まあ、俺の目的はそのユラって子の人間不信になっちゃった理由を聞いて、できれば普通の子にしたいなーっていうのが主なんだけど……

「（……………あなた、私がエスパータイプのポケモンだってこと忘れてないかしら？）」

「あ」

読まれた！？ マインドリーディングで読まれた！？ これだからエスパータイプは！ まあ、俺が油断したのが悪いんだけどさ……ごめんなさい。

「（ふむ……………貴方は変わった人間のような……………）」

「え？ それって褒められてんの？」

「（いいわ。十分だけ時間をあげる。その間にあの子を変えて見せなさい）」

「いやだから場所を聞いて」

「（飛びなさい！ 一思いに！）」

「うわっ！？ て、テメエ何の恨みがあつて……………わあああああああ！」

ヒュンッ！

「……空、綺麗……」

213番道路の海辺の岩に腰を掛けて、一人静かに夜空を見上げているユラ。彼女は感情の起伏の少ない表情でじっと夜空を見上げ続ける。彼女はいつも一人であり、一人ではなかった。なぜなら、ポケモンが必ず彼女を慕っていたからだ。

「あー……君がユラか？」

「……！？……」

突然後ろから声をかけられ、びくん！とその場で飛び上がるユラ。彼女に声をかけたのは、先ほどルルにレポートで飛ばされたりヨウマだ。服のあちこちに砂がこびりついてるのは、彼がレポートされたときに、砂の中に体が転移されてしまっていたからだ。よく死ななかったなお前。

「……あなたは……」

「君が俺を助けてくれたんだってな。とりあえずお礼を言っとく。」

ありがとな（ニコッ）」

「…………別に…お礼なんて…………」

冷めた左目でリヨウマを一瞥するユラ。そんなユラを、リヨウマは真剣な瞳で見つめて、

「お前、人間不信なんだってな」

「…………（コク）…………」

「見ず知らずの俺が言うのもどうかと思うんだけどさ…………お前が人間不信になっちまった理由を、俺に教えてくれないか？」

「…………ッ！…………」

感情の無いユラの顔に、あからさまな動揺が見て取れた。そんなユラを、リヨウマはさらに真剣な瞳でじーっと見つめて、

「人には、言いたくないほどの過去なのか？」

「…………（コク）…………」

「そっか…………じゃあ、さ。俺の質問に頷くか首を横に振るかで答えてくれないか？」

「…………（コク）…………」

ユラが了承したのを見て、リヨウマは満面の笑みを顔に浮かべる。そしてユラの隣に移動して腰を下ろした。そのとき、ユラがびくっ！と拒絶を示したが、リヨウマは嫌そうな顔一つせず、

「大丈夫。怖くない。俺は味方だよ、ユラ。じゃあ、まずは一つ目の質問だ。お前は、ポケモンが好きか？」

「…………（コク）…………」

「そっか。じゃあ、二つ目。人間は好きか？」

「…………分らない…………」

「そう……。じゃあ、三つ目。お前は……そのままでもいいか？」
「……………」

不思議そうに首を傾げるユラを見て、「今の質問じゃわかりにくかったか？」と頭を掻きながら、リヨウマは笑顔を浮かべて言った。

「えっと……どういう言い方すりゃいいんだろ？ そうだ。ユラ、お前は今の自分から変わりたいか？ 人間不信なんかじゃなくて、普通の女の子として、生きていきたいか？」
「……………」

リヨウマの問いに、ユラは死んだような目でリヨウマをぼーっと見つめる。この人は一体何を考えているんだろ？ そんなことをユラは何度も何度も繰り返し繰り返し思っていた。

「ユラ。お前が人間不信になった理由。それは、その髪でかくしてある右目が原因なんだろ？」

「……………」

リヨウマの言葉を聞いた途端に、前髪で隠れている右目を髪の上から抑えて、ユラは数歩後ろに後ずさった。

「お前は俺と話しているとき、無意識で右目を隠そうとしてた。前髪で隠れているにもかかわらず、だ。だから俺は思ったんだよ。お前は……右目が原因で人間不信になっちまったんじゃないのかな？
つてな」

「……………」

身動き一つせず、黙り込んでいるユラをじっと見つめながら、リヨウマは続ける。

「俺の昔の知り合いに、外国出身の奴がいたんだ。ソイツの瞳は透き通った青色でさ、みんなと違うからってよく差別されてた。時にはイジメにもあってた。俺は何もできない自分を恨んだよ。何で俺はこの子を庇ってやれないんだって。そう思ってたんだ」

ツツーっとリヨウマの頬を涙が伝った。自分の知り合いとユラが被って、過去の苦しみがフラッシュバックしてしまったからだ。

「俺はあの時の過ちを繰り返したくない。だからユラ、俺にお前を救わせてくれ。俺は……絶対に前を笑わないし、バカにしない。軽蔑だつてしない。だから頼む。お前の苦しみを、俺に晴らさせてくれ！」

涙を流しながら目の前で土下座までするリヨウマを見て、ユラは狼狽を隠せていなかった。この人は今までであって来た人間とどこか違う。この人なら……。そんな希望が頭に浮かぶが、ユラはすぐにそれを振り払う。

（私は親にさえ見捨てられた！ 人間なんて誰も信じない！ 私には……ルルとラルとキキさえいればいい！）

自分の仲間であるサーナイトとキルリアとラルトスを思い浮かべて、ユラは心の扉を閉じようとした。

そう。閉じようとしただ。

それは何故か。それは……リヨウマがユラをぎゅっと抱き寄せたからだ。

「人は一人じゃ生きていけないんだ。ポケモンがいる。それだけじゃ生きていけないんだ。人は支え合わなくちゃ、いけないんだ……」

「……ッ!……」

ユラがリヨウマに抱きよされながら目をぎょっと開く。
なぜなら、リヨウマがユラの前髪を掻き上げて、その右目を露わにしたからだ。

群青色の左目と対を為すような、紅色の右目。

自分のトラウマを見られたユラがリヨウマからサッと顔を逸らす
が、リヨウマは笑顔のまま、

「綺麗だ。他の誰も真似できないくらい綺麗な瞳だよ。それはユラ
のアイデンティティだ。誇れ。誇っていいんだよ。俺が許可する。
お前の瞳は……世界で一番、綺麗な瞳なんだ」

「……きれい……?」

「ああ。綺麗だ。こんな宝石のようなものを隠すなんてもったいな
い。それぐらい、ユラの瞳は綺麗なんだ」

ッ――

頬を何かが伝っていった。ユラは、それが涙だと遅れて気づく。
もう流すことは無いと思っていた涙。その涙が、自分の頬を伝って
いる。温かくて冷たい。これが涙。

ユラは涙を流しながら、リヨウマの背中にギュッと、両手を回す。

「……私……普通に生きれる……?」

「当たり前だ」

「……私……もう……イジメられない……?」

「当たり前だ」

「……私……友達……できるかな……?」

「ハハッ。何言ってるんだよ」

ユラの問いに、リヨウマは涙を拭いて満面の笑みを向けながら言った。

「すでに俺がユラの友達じゃねーか。俺はリヨウマ。お前の……人間の最初の友達だ」

「……うう……うわぁ——！」

リヨウマの胸板に抱き着きながら、今まで流してこなかった分の涙を流すユラ。

彼女は孤独だった。友達が欲しかったのに。

彼女は孤独だった。自分の肉親にすら、気味悪がられ、捨てられて。

彼女は孤独だった。元の明るさを失って、無感情な人間になっ
てしまったから。

だが………そんな彼女に、ついに心の安らぎが見つかった。

空に浮かぶ星々が見えなくなるまで、ユラはリヨウマの中で泣き続けた。

「で、だ」

深いクマができた顔を鏡で見て溜め息を吐きながら、リヨウマは自分の後ろにいる連中を見て、

「結局、俺についてくんの？」

「……（コク）……」

「（私的には、ユラをどこの馬の骨とも知れないあなたに付いていくなんて御免だけど……）」

「おい」

「（……ユラがどうしてもって言うから、ね）」

「……」

リヨウマの右腕に抱き着いて笑顔を見せるユラ。

そんなユラを見て、リヨウマは一度溜め息を吐く。

「まあ、いつか。旅は道連れ、世は情けって言うしな。んじゃ、とりあえず、しゅっぱーっ！」

リヨウマは、右腕に抱き着いているユラを見下ろし、ノモセシテイへの短い道を歩き始めた。

ユラ

彼女は失ってしまった心を、イレギュラーの手によって、少しだ

け取り戻すことができた少女。

予想外？思わぬアクシデント！（後書き）

「「その子は……誰？（怒）」」

B Y カミノ&ハルカ

やっと！再会はラブコメから！（前書き）

「カミノの第一人称を『私』から『アタシ』に変えました！」

By リヨウマ

やっと！再会はラブコメから！

「ここにも、いないね……」

最強のポケモントレーナーであるリードが、帽子を深く被りながらそう呟いた。アタシはそんなリードには目もくれず、朝日が昇った空をじーっと見上げる。

リョウマと離ればなれになってから、何日目かなんてもう覚えてない。というか、数えていない。それは、諦めてしまつと同等と思つたから……

「いる！ リョウマはきっとここにいる！ そう思つかも！」

「確信は？」

「ない、けど……」

リードの指摘に、ハルカちゃんが表情を暗くして地面に視線を落とす。リードはリードで、イエローちゃんにがみがみと説教をされていたわ。

リョウマがいなくなつてから、このパーティは過ごし辛くなつてしまった。リーダーのリョウマがいなくてもここまで変わるモノなのか……いえ、このパーティの柱だったリョウマがいなくなったから、みんなの間に亀裂が入っちゃったのね。

「とりあえず二手に分かれない？ アタシとリードは213番道路の方へ行ってみるから、ハルカちゃんたちは212番道路の方を探してみて」

「分かりました」

「……………分かった……………」

いつもの元気が完全に失われているハルカちゃんを、イエローちゃんが見送って、アタシはそんな二人を見送って、リードと共に歩き出す。

「リード、流石にあれは言いすぎじゃないかしら？」

「ご、ごめん……………僕もついかったなって……………」

「謝らなくてもいいわ。今のアタシたち、みんなそうだものね」

柱が無いと崩れ去ってしまう。それは人間関係もまた然り。早くリヨウマを見つけないと、取り返しのつかないことになるかねないものね。

「とりあえずノモセシティから出て探してみよう。もしかしたら、そっちから歩いてきてるかもしれないしね」

「うん」

アタシとリードは決して軽くない足取りで、ノモセシティの外に出た。

「人が、多いわね……………」

「うん……この時期は、海水浴客でいっぱいだからね……」

海に面している213番道路。そこには大量の海水浴の客でこつた返していた。これじゃありヨウマを見つけるなんてできっこないじゃない！

「って、アタシが諦めてどうするのかしらね。絶対見つけてやるのよ。意地でも、どんな手を使っても」

絶対にここにいるはずなのよ。だって、アタシの女としての勘がそう教えてくれるんだから。

「あ！ リヨ、リヨウマだ！ リヨウマがいたあ！」

リードが突然、声を荒げてそう言った。リヨウマがいた！？ 本当に！？

「え！？ ど、どこ！？」

「ほら、二時の方向！」

リードに示された方向をアタシはブォン！と勢いよく向く。そこに………確かにいた。

赤と白のキャップを被って、青のフード付きの服を着て、黒のズボンをはいたアタシの大事な人がそこにいた。いたんだけど……

「あの右腕に抱き着いてる女の子って誰なのかしらねえ……？」

「ひい！」

アタシは自分の額に青筋がビキリと浮き出ているのを感じたわ。

それぐらい怒ってた。だって、アタシたちが必死にアイツを探していたにもかかわらず、アイツはブロンドヘアーの美少女を侍らせて悠々と散歩気分？

一遍マジで殺してやろうかしら……

「リヨオオオオオオオオオオマアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

『な、なんだあ！？　ってカミノ！？　ひっさしぶりだなあ！！』

アタシの叫びを聞いて、リヨウマがこっちに笑顔を向けて走ってやって来た。ブロンドヘアーも少女を腕に抱き着かせたまま。

「リードも久しぶり！　会いたかったぜ！　いやー、再会までが長かったー！」

「そ、そうだね……あ、あはは……」

「ん？　どうしたんだ？　あつ、そうだった。紹介するよ。こいつはユラ。俺の友達だ」

「……（サツ）……」

「……まあ、この通り少し人間不信で、俺と後ろのサーナイトとキルリアとユラが抱いてるラルトスとしかあまり話すことができないけどさ……」

へえ……ユラって言うのね……見た目からして年下だ。ハルカちゃんの一つ上ぐらいかしら。おとなしい雰囲気と見た目がかなりマッチしてるわ。クッ！　いつからリヨウマはおとなしい子路線に走ったの！？

「あれ？　ハルカとイエローは？」

「イエローたちは、212番道路でリヨウマを探してるよ」

「……なんだろうね、この修羅場は……」
「ボクが聞きたいぐらいです……」

宿に戻った僕たちは、ハルカちゃんたちと合流して、大部屋を一つ借りて、そこに移動した。移動したんだけど……そこらが問題だったんだ。

リヨウマから全く離れようとしないユラちゃんにカミノとハルカちゃんが嫉妬。そこから、

「ねえ、ユラちゃん？ 貴方とリヨウマ、ちょーっと近すぎやしないかしら？」

「……リヨウマは……私の友達……」

「友達の距離じゃないかも！ そ、それは流石に近すぎ！」

「……私はリヨウマが好き……だって……友達だから……」

「（ビキリ） そ、それって、友達としてってこと？」

「……（ブンブン）……異性として……」

「う、うわぁ——ん！」

うわぁ……泣き喚いたハルカちゃんがリヨウマの脛を何度も殴りつけてるよ……痛そうだなぁ……

「ぐ……強敵ねアナタ……」

「……私は離れない……」

「ちょ、ちよつとぐらい離れたら？ そ、それじゃありヨウマが動きにくいんじゃない？ ほ、ほら！ トイレとかお風呂の時ぐらい

は離れないと……」

「……愛があれば……問題ない……」

「無理！ この子の説得は絶対に無理よおおおおおおおお
おおおおおおおおお！！！！」

最強の女トレーナー、ココに散る。

うーん……何か凄いな。修羅場って言うのをはじめて見たけど……
……なんか……うん。とにかくすごいね。

「ねえリード。あの状況ってブルーさんを巡って、グリーンさんと
シルバーさんが言い争いをしてたみたいじゃない？」
「あれもあれで凄かったけどね……」

普段から冷静沈着なグリーンさんが、子供の様にブルーさんを独
占しようとしたからね……欲って、怖いなあ……

「う……ん……イタタタ……って、ココはどこ？」

「……大丈夫？」

「ん？ ああ。だいじょーぶだいじょーぶ。これぐれえなんともね
えさ」

「……良かった……心配した……」

「ハハッ。ありがとな」

うーん……。リョウマとユラちゃんのやり取りを見て、カミノと
ハルカちゃんが凄くイライラしてるんだけど……やっぱり止めた方
が良いのかなあ？

「リョ・ウ・マ？ 私まだ再会の言葉をかけてもらってないかも！」
「あ、ハルカだ。会いたかったぜ！（ニコッ）」

「はう！」

ハルカちゃん戦闘不能。え？ 何この状況。まったく意味分かんないんですけど……

何かもうカオスな状況だから、いつきに時間を飛ばすね。えいつ！

「で、これからのことについてなんだが……」

顔を真っ赤に腫らし、両頬に赤い紅葉を咲かせたリョウマが話を切り出した。

「俺は、シンオウリーグに出ようと思う。参加登録はポケモンセンターでできるみたいだしな」

「シンオウリーグね……それにはアタシも賛成よ。どうせアタシも参加する予定だったからね」

「僕も同意する。レッドさんに絶対に出ろって言われてるからね……」

三人の転生者がシンオウリーグ出場を決意した。残りの三人は、

そんな三人を見て、

「……私は……リヨウマが行くところに行くだけだから……」

「私はリヨウマに付いていく!」

「ボクはブルーさんたちに久しぶりに会いたいから付いていくよ!」

全員の意見が一致した。

その場にいるみんな……リードとハルカとイエローとカミノとユラを見渡して、リヨウマはコブシをみんなの間に突き出す。

「じゃあ、目指せシンオウリーグ優勝ってことで」

「どうせならトップ3までをアタシたちだけで埋めちゃうわない?」

「そうだね。僕たちのチカラ、見せてあげようよ」

「私は応援を頑張る!」

「……私も……」

「ボクも応援の方に回りますね」

リヨウマの他の5人も、コブシを中央に突き出す。

そして、

「じゃあ、一か月後のシンオウリーグ、トップ3を独占するとしま
すか!」

「……」 「おう!」 「……」

イレギュラー率いるイレギュラーチームの決心の叫びが、宿中に響き渡った。

「スカイ。一か月後のシンオウリーグ、出場するのか？」

ズイタウンの「タケト牧場」にある一軒家で、転生者であるタケトがお気に入り黒いパーカーを着て、ポシエットを装着して、スカイにそう尋ねた。

「そういうタケトさんも出場する気MAXですよね」

「まあ、どうせ暇だし。コイツらの力を試したいしなー」

「ペルウ！」

「シスッ！」

「ブラッキィ！」

タケトの傍で自分たちのやる気を体と声で表すアーサーとラルースとナイト。そんな三匹を見、タケトはポシエットに入れている三個のモンスターボールを見つめる。この三匹は、この世界に来てから捕獲したもの。イコール、自分の努力だ。とタケトは心の中だけで思う。

「絶対に優勝しましょう！」

「じゃあ俺は二位でいいや」

「始めから敗北宣言！？ え、ちょ、本気でやらないんですか！？」

「やるつての。でも、どうせお前が優勝するんだろ？」

「は、はいっ！」

イレギュラーとノームは、シンオウリーグ出場のため、牧場を後にした。

「あと一か月後か……」

マサラタウン出身のサトシは、無数の星が瞬く夜空を、寝転がりながら見上げていた。

「どうするの？ やっぱり出場は止めとく？」

サトシの横に腰を下ろしているコーディネーターのヒカリが、ニシシと笑いながらサトシをからかう。

そんなヒカリに、サトシは真剣な表情で、

「いや、出場するよ。イッシュで捕まえた仲間たちだけじゃなく、今までの仲間たちも混ぜたドリームチームで！」

「そう。まあ、私はいつでもサトシの味方だから」

「ひゅーひゅー」

「た、タケシ！？ やめてよ！ はやしたてないで！」

主人公と主人公と元ジムリーダーは、シンオウリーグ出場の為に、
イツシュを後にした。

「たくさんの星が一転に集まるときね……」

黒いドレスに身を包んだ金髪の女性が、とあるスタジアムの観客
席で夜空を見上げている。彼女の名はシロナ。シンオウ地方のチャ
ンピオンと呼ばれている女トレーナーだ。

「シンオウリーグ……今までにない盛り上がりを見せてくれる気が
するわね」

シロナがいるスタジアムがあるこの街の名前は、【スサノオシテ
イ】。

街の名前の意味は【闘う者】。

一か月後、この地で、最強のトレーナーを決める戦いが行われる！

やっと！再会はラブコメから！（後書き）

「リードにイエロー、久しぶりだな！」

By
レッド

開幕！第56回シンオウリーグ！（前書き）

「くっくっく、ついに私の出番がやってきましたね……」

B
y
スカイ

開幕！第56回シンオウリーグ！

一か月後、シンオウ地方の南端にある街「スサノオシティ」に俺たちは舞い降りた。今日から一週間ほどかけて行われるシンオウリーグを祝って、スサノオシティでは出店が多数並んでいる。

「ここがスサノオシティ……」

「一年前にできたばかりの街だそうね。なんでも、シンオウ地方チャンピオンのシロナさんが自分の財産をつぎ込んで造ったとか何か」

「大富豪か！」

「どれだけ財産ため込んでんだよシロナさん……流石はチャンピオンってところか？ でも、街を一つ造っちまうなんてな……どこまでバトルを愛してるんだか。」

「ねえねえリード。レッドさんたち、もう来てるかな？」

「さつきグリーンさんから連絡は来たけど……レッドさんはまだなんじゃないかな？」

「レッド！？ グリーン！？ あの二人がここにきてるのか！？」

「う……うん。ブルーさんとかシルバーとかゴールドとか……ポケスの図鑑所有者は一応みんな来るみたいだけど……」

「ダイヤも！？ パールも！？」

「ブラックとホワイトはリョウマたちと被るからこの世界にいないみたいだしね……」

ついに出会えるというのか。憧れのあの主人公たちに！ ポケモンを始めたときから読んでいた漫画。それに出てくる主人公たちにどれだけ期待を寄せたことか。バトルに熱く、ポケモンを大切にす

る。そんな彼らに会えるというのか！

「ってアナタ。すでにルビーとサファイアちゃんとゴールドとシルバーには出会ってるでしょうが」

「気分の問題なんだよ！ そんな現実的な意見は聞き入れませーん」
「アタシの特大ストレートを眉間に叩き込んでもいいかしら？」

「止めてください。俺が悪かったです」

その場で日本の伝統文化【DOGEZA】を決める俺を、周りの観光客とか出場者とかが憐みの視線を向けてきている。止めて！
そんな同情的な目で俺を見ないで！

「とりあえずトーナメント表を見に行かない？ 今回はシングル部門とダブルス部門があるみたいだし」

そう。今回のシンオウリーグは二つの部門がある。シングルバトルで優勝を争う部門と、マルチバトルで優勝を争う部門。両方の出場はオーケーで、シングル部門とダブルス部門は交互に行われる。例としては、シングル部門の一回戦↓ダブルス部門の一回戦↓シングル部門の二回戦 みたいな。

「そうだな。じゃあ、行こうぜ」

俺達六人は、今回のシンオウリーグの選手宿場である建物に向かって歩いていった。

「げ。出場選手は全部で百人かよ……多っ」

「予選の人数じゃない。アタシたちの目的は本戦でしょ？」

「シングル部門は四つのブロックから上位三名まで出れるみたいだね」

選手宿場の大広間にあるトーナメント表を見て、俺たちはそれぞれの感想を述べていた。本戦に出場できる人数は全部で12人。そう。12人だ。12人なんだけど……

「なぜにリードは始めから本戦出場が確定してんの？」

「昨年度の優勝者はそうなっちゃうんだよ。ちゃんとルールブックを読んでこなかったの？」

「納得いかねえ……」

リードがシード。レッドさんもとりあえずは本戦に来るだろう。グリーンさんも。サファイアも絶対に本戦に出場するはずだ。この時点で残りは9人。俺とカミノを抜いても7人だ。どれだけ濃いだよこのトーナメント……

「あ！ リヨウマさん！ 久しぶりです！」

聞き覚えのある声が俺の背後から聞こえてきた。俺達6人はくんと口に出してしまいがら、後ろを振り返る。

そこには、ズイタウンの凸凹コンビ、スカイIIオリハラとタケットがこっちに向かって歩いてきていた。

「よう、スカイ。元気してたか？」

「はいっ。タケットさんとたつつつくさん修行してきました！ 今回は絶対に負けませんよ！」

「それはどうかな」

「何その余裕！？ ぜ、絶対に負けませんから！ 特にダブルス部門では優勝を狙うんです！」

「へえ、タケットとのコンビで出るのか？」

俺がそう言っていると、タケットが妙に暗い表情で俺の眼をじーっと見てきて、

「……優勝しないと俺の聖書^{エロ}が燃やされちまうんだよ……」

「あー………頑張れ」

つてゆーか、まだ持ってたのかよ、エロ本。いい加減に諦めればいいのにな。

「あら？ タケットじゃない。久しぶりね」

「うわ、出たよ。人間に惚れて神を辞めたアバズレ女だ」

「誰がアバズレよ！ アナタ何か調子に乗ってない！？」

「ハッ！ オメエみてえな太もも剥き出し女に負ける気はしねえんだっての」

「なっ！／＼／＼ こ、これはファッションなのよ！」

「見せたがりー。エロ女ー」

「上等だ！ アタシがリョウマとコンビを組んで、アナタたちをボッコボコにしてやんよ！」

「あれえ！？ 何だか私も巻き込まれましたあ！？」

「諦めろ。そして華麗に宙を舞え」

「それは決して血まみれじゃないですよえ！？ あ！ 顔を逸ら

さないでください！ こっち見て！ 心の扉を閉めないで！」

「……グッジョブ」

「なんだか諦められましたああああああああああああああああああああああ！！！！！」

相変わらず面白いなこの二人。どうせこの二人も本戦に行くだろうなあ……っつーことは残り5人か……一体誰が出場するんだろ？

俺がそんなことを考えていると、俺たちのもとに懐かしい訪問者が顕れた。

『リヨウマさん！ 久しぶりです！』
「ん？」

再び背後からの大声に振り返る俺たち。そこには、俺とよく似た格好をして、肩にでんきねずみポケモンのピカチュウが乗っている少年、サトシがこっちにトタタタと走ってきていたんだ。

「おお、サトシだサトシ。どう？ バッチの調子は」

「見てください！ 6つ目まで集めたんですよ！」

「へえ、早えな。じゃあ、今回のシンオウリーグはイッシュのポケモンで戦うのか？」

「いえ、俺は自分の最大の力でリヨウマさんと戦いたい。だから、今までの仲間たちのドリームチームで、俺はあなたを倒します！」

「いい覚悟だ。でも、まずは本戦に出場するのが先だな」
「そうですね」

サトシも出場する。なんだかこのリーグは楽しみだ。この世界に来て、一番の大盛り上がりを見せてくれるかもしれない。俺もこの1か月、修行に修行を重ねてきたから負ける気なんてないけどな！

『これより、第56回シンオウリーグ開会式を始めます。出場選手は第5スタジアムに集まってください。繰り返します。これより、第56回――』

「つとと、もうそんな時間か？」

「遅刻したら出場資格を剥奪されるから急がないと。あ。応援の人たちは観客席に行かなくちゃだめだからね。スタジアムの中には出場選手以外は立ち入り禁止なんだ」

「分かった！　じゃあ行きましようか、イエロー、ユラ」

「うん！」

「……リヨウマ……頑張って……」

ハルカとイエローとユラ、それにヒカリとタケシが観客席へのゲートをくぐっていった。俺たち出場組はそんな彼女たちを見送って、第5スタジアムへのゲートをくぐった。

『ようこそ、スサノオシティへ。シンオウ地方チャンピオンであるシロナです。今回のシンオウリーグは過去最高の112名が出場しています。負ける人、勝つ人、いろいろといます。ですが、貴方たちは絶対にやってはいけないことを一つ覚えておいてください。それは……負けたことをポケモンのせいにする。負けたのは自分

の責任だと思つて下さい。以上、シロナでした』

観客席、スタジアム内、どちらからもたくさんの拍手を送られたシロナさん。彼女はそのまま解説席へと戻っていった。今回のリーグは、シロナさんが解説を務めるのか……テレビで見たいなあ……いや、でも解説つてことはこのスタジアムに聞こえるぐらいにはなつてゐるのか？ ううむ……よく分からん。

『それでは第1～第4スタジアムでシングル部門の1回戦を、第5～第8スタジアムでダブルス部門の1回戦を行います。A～Dブロックの選手の1回戦の出場選手は指定の場所へ移動してください。なお、どちらも出場なさっている選手は、シングルの優先してください。その場合、ダブルスの方はシングルが終わり次第、参加していただければ結構です』

へえ、出場選手に優しいルールだな。どちらもちゃんと出場できるようになつてゐるなんて……

「なにぼーつとしてんの？ アタシたちはダブルスの初っ端の試合なんだから。急がないと」

「そうでしたね！」

カミノに腕を引かれながら、俺は第6スタジアムへと移動した。

龍馬たちの試合がある第6スタジアムへと移動してきた僕たち。シードの僕は本戦までやることが無いからリョウマとカミノの試合を観戦しようと思ってるんだ。あの二人のバトルの強さは、この1か月で飛躍的に上がってる。流石はイレギュラー。

「ねえ、リード。リョウマさんたちの1回戦目の相手って誰？」

「ん？ 確かイッシュ地方のジムリーダーであるカミツレって人とフウロって人だった気がするけど……」

「あ！ 私カミツレって人知ってるかも！ 確か、イッシュ地方のトップモデルじゃなかったっけ？」

「そうなの？ 僕はあんまりその方面は詳しくないからなあ……」

有名人なんだ。まあ確かに、ジムリーダーをしながら仕事をする人なんてたくさんいるしね。失踪したヤナギさんの後継ジムリーダーのブルーさんなんかはよくラジオで活躍してるし、マチスさんもマチスさんでなんか危ない取引とかしてるしなあ。あれ？ 僕って意外と暇人なのかな？

『ん？ あ！ リード！ それにイエローまで！ 久しぶりだな！』
「あ。レッドさん。久しぶりです」

観客席を上から降りてきた赤い帽子の青年、レッドさんが僕たちを発見して笑顔でやって来た。肩にはピカチュウのピカが乗っているね。あのピカチュウ、かなり強いんだよなあ……6タテされたのはいい思い出だ。

「あれ？ レッドさん、1回戦目は？」
「終わらせた」

「「早っ!?!」」

え? まだこっちの試合なんて始まってもないんですけど! 可哀相! レッドさんの対戦相手がなんだか可哀相!

「ち、ちなみに1回戦目の相手の名前は?」

「んー? 君も良く知るエメラルドだけど?」

「エメラルドくうううん! 君はよく頑張ったよお——」

「!」

クロワツサンヘアーの少年を頭に思い浮かべる僕とイエロー。彼はまだ強くないからなあ……図鑑所有者の誰にも勝ったためしがないし。

「で。リードはどっちを応援してるんだ?」

「リヨウマとカミノ、えっと……あの青い服の彼と金髪の彼女です」

「へえ、強いのか?」

「ええ。レッドさんが驚くような戦いをするんじゃないですか?」

僕でも予想ができない戦いをするペアなんですよ」

「それは面白そうだな!」

そういうと、レッドさんは僕の隣の席に腰を下ろした。その周りでは、リーグの優勝を毎年かつさらっていく僕とレッドさんのコンビが揃っているのを見て、写真を撮ったり、キヤーキヤー言ってる人たちがどんどん増えて言っていたんだけど……流石にもう慣れるから、あまり気にならなくなったんだよね。

『それでは、第1試合、カナズミシティのリヨウマ&ムロタウンのカミノVSライモンシティジムリーダーカミツレ&フキヨセシティジムリーダーフウロのマルチバトルを開始します!』

.....え？ リヨウマってカナズミシティ出身ってこと
になってたの？ それにカミノはムロタウン？ どんだけホウエン
地方が好きなんだろうか.....

開幕！第56回シンオウリーグ！（後書き）

「オメエ……悪役みたいだぞ？」

B
y
タ
ケ
ト

始動！一回戦目（前書き）

「私の魅力で、貴方たちをくらくらさせてあげる！」

B y カミツレ

始動！一回戦目

『使用ポケモンは一人一体。それでは……始めっ！』

ダブルス部門の一回戦目がついに始まった。相手はカミツレとフウロか……。つつーことは、電気タイプと飛行タイプ……。トーナメント表で確認しといて正解だったな。

「カミノ」

「分かってるわよ」

二人で話し合ってパーティを組んできたんだ。この勝負……負け
るわけがねえ！

「貴方たちを……私のポケモンでくらくらさせてあげる！ シビル
ドン！ スポットライトの中へ！」

「よぉーし！ アタシもカミツレちゃんには負けないわよ！ 宙を
舞って！ ウォーグル！」

シビルドンとウォーグルか……。どっちもシロナさんの手持ちと被
ってるけど……。どちらも強いポケモンであることは確かだ。しかも
そのポケモンの持ち主が電気タイプのエキスパートと飛行タイプの
エキスパート。油断はできねえんだ！

「LET'S GO！ ガラ！」

「ラグラ、出番よ！」

対するこっちはガラガラとラグラージ。どちらも電気タイプに強いポケモンだ。ただし、飛行タイプとは相性が悪い地面タイプ。攻撃は効果が無いし、素早さでも負けるだろう。しかし、ラグラージは水タイプが入ってるし、氷タイプの技も使用できるから問題は無い。問題は俺のガラガラだ。タイプは地面オンリー。武器は手に持っている【ホネこんぼう】。届くわけがない。

「地面タイプ!? こっちがくらっと来ちゃった!」

「アタシに地面タイプは効かないの! ウォーグル、【ブレイククロー】よ!」

空から一気に急降下して、俺のガラを捉えんとするウォーグル。しかし、俺は何の焦りも見せずにガラに命令を出した。

「ガラ、【ふぶき】だ」

「ガラア! ガラアアアアアアアアアアアアアアアアア! ! !」

辺り一面に吹雪く氷の嵐。技を予想もしていなかったウォーグルとシビルドンは回避が間に合わず、直撃してしまっていた。

この世界ではあまり知られていないのだが、ガラガラは地面タイプ以外の技を結構覚えることができる。【かえんほうしゃ】や【れいとうビーム】、【つばめがえし】に【だいもんじ】。まさにオールラウンダーなポケモンだ。

それに、ガラガラは物理防御がかなり高い。攻撃力もそこそこ高く、俺のガラは【ふといホネ】を持たせているため、攻撃力が通常の二倍だ。まあ、【ふぶき】は特殊攻撃だから関係ねえけど、ふいをつくならこの技が一番だと俺は思ってる。

「ウォーグル、大丈夫!?」

「ウ、ウォー!」

「シビルドン、まだ輝ける?」

「ビルウ!」

やっぱり。特攻が高くないガラの【ふぶき】じゃ全然体力を減らすことができねえか……それなら!

「カミノ!」

「言われなくても、分かってるわよ! ラグラ! ウォーグルに【れいとうビーム】!」

「グラアアア!」

「なっ!? 速い!?!」

ラグラの【れいとうビーム】がウォーグルの横っ腹に直撃し、ウォーグルが氷漬けになって地面に落ちた。ラグラージの素早さは通常はそこまで速くない。だがカミノのラグラージは何故か速いんだ。もはやゲームでの知識なんて通用しない。これがこの世界の醍醐味。某第二位風に言うならば、この世界に現実での常識は通用しねえ!

「ウォーグル、戦闘不能!」

「くっ……戻ってウォーグル! ゆっくり休んでね!」

これで相手のポケモンはシビルドン一匹。相手は電気タイプなんだから俺たちの勝利は確定かもしれない。

だが、シビルドンの特性は【ふゆう】。地面タイプの攻撃が当たらないポケモンだ。どっかのチャンピオンが使っている効果抜群が無いポケモンの如き最強っぷり。

まあ、相手は相手でこっちのポケモンに電気タイプの技ができないから睨み合いが続くわけで。

「ガラ！ 【すてみタツクル】だ！」

「ラグラ！ 【ハイドロポンプ】よ！」

「シビルドン！ 貴方の華麗なステップを見せてあげて！」

これじゃあキリが無いな……こんなところで苦戦している暇はないというのに。俺たちの目標はシングル部門ダブルス部門の両方の優勝。一回戦目で躓いてて、優勝なんか狙えるかってんだ！

「ええい！ カミノ、ちゃっちゃと終わらせるぞ！ 【ギガインパクト】！」

固い頭をシビルドンへ向けて猛突進していくガラ。

「そんな猪突猛進じゃ私のシビルドンは倒せないわよ！ シビルドン！ ……え。し、シビルドン！？」

自分のシビルドンを見て驚愕しているカミツレを、俺はニヤアとした笑みを浮かべて見つめる。

彼女は一体何に驚愕しているのか。それは簡単。

カミノのラグラが【ダイビング】でシビルドンの後ろに回り込んで、羽交い絞めになっているんだ。

さっきも言った通りカミノのラグラの素早さは何故か高い。ラグラはその能力を生かして、素早くシビルドンの後ろに回り込んだってワケ。

そんな身動きできないシビルドンに、物理攻撃力が二倍になっているガラの【すてみタツクル】が当たればどうなるかなんて言うま

でもない。

「シビルドン戦闘不能！！　よって、ただいまの勝者、リョウマ＆カミノペア！！」

「へえー……あのラグラージが素早いとはね」

リョウマたちのバトルを僕の隣で見ていたレッドさんが笑顔でそんなことを言っていた。この人は根っからのポケモンバトル好きだからなあ。リョウマたちのバトルが新鮮だったんだろうね。

「どうです？　あの二人のバトル」

「流石に強いなあ。俺でもピカだけじゃ無理かも」

「ぴ、ピカだけって……」

レッドさんの言葉に口を引き攣らせるイエロー。分かる。その気持ちは痛いほどわかるよイエロー。この人のポケモンの強さは常識なんだ。

まあ、レッドさんに勝った僕が言うのもなんだけどね……

「でも俺とカスミのペア、グリーンとブルーのペアに勝てるかどうかは分からないけどね」

「ええっ！？　レッドさんたちもダブルスに出てるんですか！？」

「

「ああ。まっ、俺はカスミに無理やりだけどね」

苦笑いを浮かべて頭を掻くレッドさん。

「ってマジですか……マサラタウン最強の主人公陣&ジムリーダーのチームって……ホントにリョウマとカミノは勝てるの!? このことは伝えといた方が良くもね。」

「じゃあ俺はグリーンの試合でも見てくるから。決勝で会おう。んじゃな」

「ははは………なんて破天荒な人なんだろう………頑張れ。リョウマとカミノ………」

とりあえずダブルスの一回戦目を終わらせた俺とカミノは、ハルカ達との集合場所である第一ロビーに向かっていた。

「まずは一勝だな」

「そうね。だけど油断しちゃ駄目よ? 絶対に原作キャラが参加してるはずだから。グリーンとかそんなところがね」

「うえ………それは辛いな………」

アニメの方の原作ならいいとしてもポケスペの方の図鑑所有者が来たらマズイかもな。あの連中の強さは折り紙つきだし。ハッキリ言って勝てねえと思う。

『カナズミシティのリヨウマ選手。今すぐ解説室までお越しください。繰り返します。カナズミシ———』

ん？ 何だこのアナウンス。よりもよって俺？ しかも解説室ってシロナさんがいるとこじゃ……

「行ってきなさいな。アタシはハルカちゃんたちのところに行ってるから」

「おー。んじゃまた後でー」

カミノと別れて解説室へと走って向かう。

はて？ 何かやっちゃったっけ？

始動！一回戦目（後書き）

「フッ。こんなもんか」

「何かっこつけてるのよ、グリーン」

B
Y
グリーン＆ブルー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4176w/>

転生してサトシを鍛えることにした

2011年12月18日15時47分発行